先つ席定るや、格闘の必得、專一なるを要す。敵其の間に、手を掛けバ、眞先きに、己れより切り付んする、氣勢攻々として、敵の動靜を監察すへし。立合ひの始めに、先を取るは、敵膽を取り拉くに、足るものたり。先んすれは人を制す、後れは人に制せらる、先後勝敗の決する所ろ、誓て初本は取るへく、人に取られさるものと、覺悟すへし。若し、此の覺悟を等閑にすれは、實戦に反背す。

彼の俗流は、先制の意味を誤解して敵、藤離の時には、片膝相接するほとに迫て、而して立上るや、跡退りし、或は刀尖を地につき、又たは、袴を狩り繰りなとして、種々形容ぶるは弊なり。畢竟、立合ひの初めより、先を取ると云ふを、誤解して、相近接するものならん。直ちに撃てバ、所謂先を取るの、意味に適すへきに、跡退りするに至ては、誤解も甚しと云ふへし。當流は、九尺以上の間隔を置き、眞向きに向き合ひ、兩膝を左右へ均しく拔らき、氣當りしつゝ目礼し、立上りつゝ、必らす二三小歩進み、瞬間對峙せす、直に勝敗を決せすんはあらす。是れ

所謂先々之先なるものにして、進歩する所以なり。

老成の地位に至ては、氣と氣の吸り合ひよりして、徐ろに位ひを取る、天自然の權際を生す。畢竟、互に戒嚴周密にして、互に初本は取るへく、人に取られすと、油斷なきが故に、敢て輙く打入るへからさるのみ。然るに進歩しつゝある者にして、故意に之れに倣へは、早や進歩を停止するのみならす、防禦一偏に流れて、進取の氣力を失ふものとす。先々之先は、假令ひ仕損するも、潔さよしと雖とも、後之先を巧みて、跡退りつゝ、仕損する者は、甚だ見苦しきものなり。此の故に立向はゝ、早や既に我か身は捨てゝ、相睨み、撃つへき機會あらは、撃つへし、突くへき機會あらは、突くへし、未た機會を得すんバ、機會を造出するのみ。但た膠中に待あり、待中に膠あり、之を忘却すへからす。

總へて敵に因て轉化すへし、兵字搆へも、一定不變なるは本意にあらす。敵に依り、器に依り、上中下斜段又は、八相に搆へ、技倆を角するものとす。然れとも、慣習外の施術は、必らす、果斷決行の銳氣に乏しくして、之れか爲めに、敗を招

くに至ることあり、故に敵の構へに拘はらす、吾れは吾が、平生に慣習したる構へに、取て技倆を角するも亦た得策なり。但し銃槍に對せゞ、中段より寧ろ下段に構ゆへし。銃槍は、平生の如く構ゆれは、其の槍尖を押へて、付け込まるゝか故に、緣を離れて、槍尖を地に摺る如く、構ゆれバなり。且つ吾れ兵字に構へしに、敵は他の構へを取て動かす、此の場合に、我れより一太刀も、打込ますして、構へを變するは、臆したる敵の、嫌ひなきを得す、故に空擊たりとも、打下して、更に適應の構へに轉化すへし。敵に突きの色あらは、其れ突けと、前進すへし、決して退却すへからす、而して精神を沈着し、基本演習第二十一二敎を應用すへし。

昔し土岐丹後守、長沼庄兵衛と武談の末に、實驗せんと欲し、試合す、丹後守は、中段にて突き懸る、庄兵衛、前進す、丹後守の突きは、外つれて中らす、丹後守は、猪牛の如く、突き懸るに、庄兵衛は、前進しつゝ、之を賺し、披らくと、丹後守は、行き餘りて、人もなき所ろを探る、其の後ろより、庄兵衛は、及に能在

ると、申したるに、感歎せりと云ひ傳へ、古今共に突き避けるは、前進するに、利あるをを確認せり。

第四章　切り返し

切りかへす太刀の早技目覺ましく當り傍ら敵なかりけり

此の切り返しは、第十七章に掲く、實に太刀の早きことは、切り返しを見て知るへし。

此の切り返しは、太刀を上段（即ち兵字）に冠ぶり、十字形に切り結ふを云ふ、劍術の基本なり、以て四肢の凝硬を除去して、筋力を剛にし、以て身體の動作を練習して、擧止を敏捷にし、以て縱横の接戰に抑侵して、靈眼を聰活にし、以て技業の圓滿を期致して、刀勢を快速にし、以て日本古來特有の白兵術に、練達せしむる階梯なり。

此の演習は、兵式號令を用ひ、規矩準繩に由らしめ、疾徐縱横を律するを以て、衆多の動作は一致し、身體の運動は周到し、轉々、勇壯活潑なるのみならす、自

ら軍紀の下に、膽力を鍛錬し、其の腦力を發育す。是を以て、殊に青年有爲の學生に、偉大なる効益を與ふるは、更に疑ふへからさる所ろなり。

夫れ、當流は、大極にして、無極なり。技さは數に限りあれとも、位ひは品に限りなし。太刀の生れは圓滿にし、體勢は、雍如とし裕容とし、前後左右に片倚らす、攜備は、兵字にして身を隱さす、其れ突けと、己か身を打呉れて、而して徐々前進し、機に應して切り返へす等、全く基本に熟するに隨ひ、必手相應して、變化は熟練より生す、復た測るへからさるなり。

然り、世間人情の浮薄なる、正則を履ます、直ちに變則に、縱弄放演せしめ、速成を得意とするもの多し。是れ不可なり、教練は速成を用ゆへからすとは、千古の格言なり。速成は、動作未た自在ならすして、曖昧に倒行逆施す。其の初めは、止むを得さるに出て丶、遂に無理なから、因襲するに終れり。圓滿自在ならすして、手先を計りにて、チョッチョッと、掠め打に過ぎさるも、無理ならすと謂ふへし。而して未熟者が、皮想の觀察に、或は云はん、試合ひは活機なり、基本を

活機の上に、應用するは迂なり、寧ろ、無法に打合ひするの、活用に如かすと。此の說も亦た迂なり、武夫の矢走りの路は早やけれと急がば廻はれ世田の長橋と云ふを、解せさるもの丶觀念なり。敎範の如く、基本を活用し得るまて、習熟せすして、應用する能はすと云ふは、誤迷なり。諺に先入爲主と云ふ、試みに習ひ得たるものを、更改せんとすれは、舊習固着して、容易に脫却する能はさるなり。是に於て、當初の習得肝要なりとす、凡そ、人既に知るものを忘れんと欲するは、來た知らさるものを、覺ふより更に難し。故に、先入爲主の事實を確認すると、同時に當初習得の肝要なる、事實も亦た確認すへし。然るときは、之を己れの慣習となすまて、勉强すれは應用自在なるも、亦た確認すへし。

二十日熱心者（餓に熱心する者は餓に冷却す大概三週間位にして熱心者と名くと云ふ）の如き、淺慮の人は、何事も習ふと、直に出來る樣に思ひ、而して己れの、未た熟せさるを顧みす、是れは吾れ能はす、是れも吾れ及はすと、放棄せり。畢竟、愚にあらされは、勇なきの致す所ろなり。冉求曰非不悅子之道力不足也と、孔子曰力不足者中途而廢すと、叱斥せ

しと云ふ。

論語にも、習ふとは時習云云、鳥の飛ひ上らんとするときは、羽色の白く見へるものにて、遠く北海を越ゆるも、始め一尺飛ひ、二尺飛ひ、漸く飛ひ習ひ、宙を飛ふに至る、故に羽の下に、白を配すと註す。又た、中庸には、人一能之己百之、人十能之己千之、果能此道雖愚必明、雖柔必強と、云ふにあらずや、此の故に此の基本を、千返萬返、復習せは必らす上達すへし。

古來日本の劍術は、西洋劍術などの如く、初心の内は、要領を說き示すよ及はす。唯た基本に法とり、稽古の數を積みさへすれは、自然に佳境に入るものとす。猶は佛にて念佛さへ唱ふれば、自ら極樂へ往かるゝと云ふと、一般なり。然るに、二十日熱心者の癖として、頻りに要領を聞きたがるものなり、蓋し是れ早や、逃け仕度をなす徵候と、見て大過なし。

凡そ、速成は、外見上一時成業せし如くなるも、其の過誤は陰然胚胎して、一種の技癖痼疾となり。却て上達の期に至て、滯滯するのみならす、最高度に達せすして、漸く、最下度に小成するに過きす。殊に此の基本に、漏せさる者は、事に臨んて究す、究するの極は、一轉して、虛構に流れ、再轉して、外飾に失し、遂に演劇に類する所作に陷ゐり、人に媚る如き、觀を呈するに至る、即ち、其の究するは、劍法の糞素なきに由る、其の媚るは、間脫けするを繕ろはんとするに由る。而して故意に、巧美ならんと欲するか故に、却て、破綻を顯はすものなり。總へて、究策に出る動作は、正大の氣なし、實に國家干城の重に、任せんと欲する、赳々たる武夫にして、假りにも、一時を彌縫し、人に媚る如き、卑劣手段をなすに至ては、寧ろ學はさるを可とす。武藝なる者は、大成して雲に聳へ、天然の雅致、人をして慨ろかしむへく、品位の卓越、人をして敬せしむへく、眞に剛毅果敢なる、精神氣力を養成するか、爲めのものなり。即ち、沃野に、寬鬆たる樅樹の如し、其の寬鬆たるは、日進上達する機能の伏する所ろ、測り知るへからさるものあり。之れに反して、盆栽は、盆栽に枯衰せる僞老の如し、其の巧みなる如く見ゆるは、千歲の綠色を假裝せしめたる、盆栽樹の枯衰せるものなるを以

て、早や成長せさるものなりと、知るへし。

具眼の士は、武を觀る玆に在り、目前の勝敗は更に論せす、日進上達の機能如何、心氣力の錬磨如何、特得の技倆如何、是れ等を鑑別するを主眼とす。苟しくも武に通するとなす者は、此の識量なくんはあらす、目前の勝ち負けを數へて、褒貶する如きは、俗眼たり、術語に目あつて、目なき者と云ふ、是れなり。

潛は、風雅を愛し氣韵を解して、高尚なる趣味を知る者にして、始めて書の神品を論し、畫の精妙を評すへし。玆に少しく例を異にするも、卞和が楚王に寶石を捧けて、足を斬らるゝも屈せす、漸く三代の王に至て、名玉たることを明知せられたると、一般に、琢磨の功を積み、自得する所ろあらせ、鑑識を有せさる者の爲めに、斥けらるゝも、屈するに足らさるなり。是を以て、再三言なからも基本を千返萬返し、心手自然の如く、慣熟せさるへからす。吾人が世に處するも、亦た然り。平生に養ふ所ろありて、時變に應する者は、事を處して事理分明、綽々餘裕あり、決して究せす、且つ絢ひす、素養なくして、事變に應する者は、徒らに心事の淺薄を暴露するのみ。然らは劍術にしては、劍術の基本に習熟せすんはあらす。之れに習熟すれは、應用自在にして、變化は熟練より生し、來て千變萬化し、底止する所ろなきなり。但し正則は、變則に比すれは、初心に於て、迂回する思ひもあらん、縱弄に比すれは、撿束を覺ふならん、其の迂回するに類するは、安全に進歩せしむる所以なり。其の撿束するに似たるは、無欲に玉成する所以なり。此の理由に疎きは、二十日熱心者の常情を、免れさる小人なりとす。至大至剛の精神を有する士君子は、積漸耐久し、以て正則を履み、次第々々に、熱心を增加す、故に克く熱心永續し、以て活達大成するなり。

第五章　後之先

懸けて釣り挑みてや待て打しほは惑ひ居着と起り頭らぞ

懸けて釣りとは、ヂリヂリと仕懸けて、氣當りすれは、敵は自ら止り得す、釣り出されて、無理に打來る、之を待て、切り返へす、等の手段を云ふ。

挑みてや待てとは、挑み挑み虛擊し、又は敵の心ろを窺さて、無理に打出さしめ、

其の隙きを實擊する、等の技倆を云ふ。機會は、千差萬別にして、概言すへからす、打しはとは、打つへき機會を云ふ。修練の功を累ね、演習の數を積むに、隨ひ、自得するものとす。此の機打つへし、彼の機打つへからすと、知るも、練磨の功至るにあらされは、目に見て、手足應せす、心に感して技倆出てす、心氣力動もすれは齟齬す。實に千返萬返數を積むはとに、功者なるものは、未た曾て有らさるなり。武道通の定語として、練達の人を歎美するに、數掛りしと云ふを以てす。又た初心の者を褒詞するに、癖なしと云ふを以てす。一に皆な定語の意は、簡にして味ひ深し。何となれは、熟練活達の素は、數掛るに在り。天眞爛熟の素は、癖なきに在れとなり。

惑ひいつきと云云、惑ひとは、敵が狐疑を生し、逡巡右顧左愕するに、乘して擊突するを云ふ。居着とは、いつきと讀みて、敵が跨かり過きなとして、動く能はさる場合に、擊突するを云ふ。既して、足をガクと踏み付けたる敵は、急に來らす。體より面を出す敵は、虛多し。起り頭らとは、敵より將さに打來らんとする途端

に、擊突するを云ふ。

起り頭らは、其の打んと欲するに、一念なるか故に、守るに隙きあるものなり。而して起り頭らには、多少の準備をなすを以て、其の間に髮を容れと、擊突すへし。是れ後之先也。尤も劍術の目付けは、必らす敵の眼とす、敵の拳又は太刀先きに、注目する位ひ迄は、未た初心なり。須らく敵の眼に注目し、以て敵の眸子のチラリとする途端に、打入るへし。所謂起り頭らそと云ふは、敵の眸子のチラリと、動く頭らに打入れは、先之先となる、手足動作の起り頭らにては、既に遲く、後之先なり。

敵の眸子のチラリとするや、否や、虛實を覺知す、打入るへし。併しなから、母盡母必母固母我、即ち、無念無想の作用に、一任せすんは、通常後之先多し。孟子亦云ふ、存乎人者莫良於眸子眸子不能掩其惡と、誠に意あれは、目も口はとに、物を言ふ、と云ふ是れなり。

日本の劍術には、眼中有靈と云ひ、西洋の劍術には機眼(ヒニスターース、ウエ、ケーケーエ)の適中と云ふ、我は靈

眼と云ひ、彼は機眼と云ふ、洋の東西を問はず、術語の意味に、符を合するか如くなるは、奇と謂ふへし。

問ふ、己れに惑ひを生したるときは如何、答ふ、決心叱咤すへし。是れ、或は、敵の謀る所ろに陷るあるも、退縮するの怯に優れり。膽勇を鍛錬するは、此等の場合に存すれゞなり。

抑々惑ひを生するは、敵の機先を狐疑し、防禦一片にのみ、意を配し、敵の志さす所ろは、面か、胴か、小手か、突かと、慮はかるか故なり。其れ突けと、打臭れて體當りすれは、好結果を得へし。丈夫たる者にして、猫の頸冠りを似ねる程に、見苦しきものはなし。

併し、上級に對すれは、峻坂に登る如く、早く呼吸迫り、輙ち惑を生す。下級に對すれは、平地に歩む如く、永く呼吸穏かなし、敢て惑を生することなし。畢竟、武級上下の爭ふへからさる所ろにして、體かち、膽力に關せさるなり。要するに、已れより下級に向ては、相接應(アイシライ)して以て技を練り。上級に向ては、打込みの必持ちにて、無二無三延ひ込み、打ち込み體當りし、以て、練達の程度を、上進せしひるものとす。

第六章　野試合

群がへる敵に向は丶尚は更丶燕嫌しにすかし切り脱け

此の野試合ひは、第二十一章に掲く、野試合ひは、武技を野外へ演習し、短兵接戦術を講究する所以なり。平常の演習に比すれは、層一層實戦に適切なるものなり。

野試合は、燕鳥の縫ひ往く如く、突如として前に隱れ、忽焉として後ろに現はれ、閃然電然出沒するときは、敵は呆然として、前者先つ倒れ、後者倒れ重さなるものなり。

元來多勢に向は丶、片端より切り倒し、薙き倒し、突貫すへし。是れ先制の利を占るなり。

又た多勢を引受けたらんには、先つ楯を取るも可なり、敵より刀を撥して迫るも、

柔を制む者は、虚に成り易しとす。

八方一方の敵に、八方より取巻れたるときは、敵八方に在ると思ふへからす。一線の血路を開くまてにて、八方も一方に同しかるへし、隘路などに於ては、敵の氣を脱かさるへからす、先つ敵を腹背に受けたるときは、忽爲後方なる敵を、振も向き様に切て、前方なる敵の氣脳を奪ひ、直ちに、前方を切り開くへし。

第七章　藝慾

稽古たゝ積らは塵も山とかや石もみがゝは玉となりぬる

此の上句は、薩摩隼人の矯捷男敢なる遺風を、涵養せし、日新齊の伊呂波歌に、下手そとてこゝろゆるすな稽古たに積らは塵も山と言の葉と、云ふに取る、蓋し書潛士は、一唱感激し、志氣之れか爲め、勃焉として起り、精神之れか爲め、煥乎として發し、道場に入る毎に、氣分を健淬し、耐忍躬行を淬礪せしものなり。

凡そ、成業練達の素は、倍他の度數に、加ふるに、勝他の慾望を以てし、試業に変へるに、思念工夫を以てせさるへからす。眞に復讀千返、其の意に通すと云ひ。

積雪は石を穿ち、積羽は舟を沈むと云ふ。奈何に不器量と雖とも、切瑳琢磨の功を積めは、玲瓏たる名玉となるへし、李白が詩は、不器量を以て得たりと、李攀龍は評せり。是れ吾れは不器量なりと、猛省するは、妙所の伏するを、發する所以なれはなり。

古歌に、爲せは成る爲さねは成らぬ成るものを成らぬと云ふは爲さぬなりけりと云ふ、人として爲さぬと云ふ程に、恥ちなるものはなかるへし。孟子も云ふ、人に若かさるを恥ちすんは、何そ人に若くことあらんと、其の不能を恥ちて、之を爲すへきを云ふなり。然るに、其の不能を恥ちて、之を掩蔽する者、往々世間の惰弱なる書生に、見る所ろなり、是れ恥つへき所ろを、誤了せしものと謂ふへし。何となれは吾れは下手なり、不器量なりと、自棄すれは、何事も成らされはなり。

洋の東西は風習を異にすと雖とも、爲不爲の點に於て大差あるか如し、之を例せは、柔術の形の如きも、同しく忘るゝとせんに、彼れは恥ちて學ひ、我れは恥ちて習はす、劍術の試合の如きも、同しく負るとせんに、彼れは恥ちて奮ひ、我れ

は耻ちて復たせず、是に於て萬事に、優劣を生するものゝ如し。

英國人〜ンリーコックス氏亦、本館儁秀の一人たり、（同國人にてダンセル及ひヘンリーの二名亦勝れす）日々新聞に云ふ氷川社頭、矢當々々の聲、喧し、有時、碧眼赤髯の人、竹刀を携て出入す、嗚、士人、刀を脱してより、豪氣、烟散霧消、亦一人の鐵骨男子を見ず、却て、外人に嘲けらる、可慨哉と、痛切々々

第八章　體當り

胸倉に肩もて葉津美突き飛はし崩れ立つ身を追ひ打にせよ

凡そ體當りは、我が體を以て、敵の體に當り、以て敵を突き倒し、手向ひ、若しくは、跡打ちせしめさるの法なり。所謂體に根さゝすして、手先き計りにて、チョッチョッと、掠め打ちする者は、相打ち多し、打て、打たるれは、打たさるに若かさるなり。

是に於て當流は、打入ると同時に、突き倒し、追ひ打ちするなり。其の突き倒すには、先つ、我か肩を低く下げ、其の肩を敵の胸倉に向け、肩と共に兩拳を、敵の腮の邊へ掬ひ上げて、敵の面の脱ける程に、掬ひ上げつゝ突き倒すへし。好しや突き當りて倒れさるも、敵は倒されさらんとするに、一念なるが故に、多くは胴に隙きあり、胴を防く者には、面に隙きある如く、執へか隙きあり、其の隙きを打つを、追ひ打と云ふ。又は離れ際に大きく、面を打つまねして、胴を薙き拂ふなと工夫すへし。

短柄竹刀は、付け込み、付け込み、踏み込むへしと雖とも、亦た至極の程合ひあり、付け込み過くれは、太刀先きつかへて、働らき難き場合なしとせす、此の場合は、我か兩拳を我か目通りまて上けて、其の兩拳を眞直く伸はしつゝ、敵の面金を押すへし。然るときは、慣れさる敵は、頸骨を折らるゝ心地（コヽヽ）して仰倒すへし。相互に衝突したるときは、兩拳の低くなり居るものに、勢力あるへし。是れ即ち彼の瀾か、向ふへ打ち勝らんとする際には、少しく退く勢ひにて、ぜぶと掬上げ押す所ろの心ろ持ちなり。此の心ろ持ちを自得すれは、概ね浮きたる敵は、宙に飛はされて仰倒すへし。

元和九年德川家光將軍、親ら諸臣と試合ひし、勝ち殘りて意氣甚た驕り、眼中に人なきが如し、時に硬直なる阿部豐後守忠秋、及ち徐かに進み出て、立合ふや一聲直ちに體當りし、將軍を道場に逆さまに倒す、大久保彦左衛門、之を見て聞て、曰く、主君たりとも、遠慮せざるは、武道の本領なりと、古來、體當りの猛烈なりしを知るへし。

體當りの有効なるは、敵の兩踵を踏み付けたる時、又は浮き上りたる時、或は跨がり過きたる時、等は、遁すへからさる最上の機會とす。

又た柔術の應用として、相接したる時に、土際を摺り掬ひ倒すも可なり。足搦は我か體と敵の體と、突き合ふたる場合に、施すの術なり。我か太刀は、敵の左側首へ摺り込み、我か左足は、敵の右足後に踏込みて、我か右肩を利せて倒すへし。吾れ足搦を掛けられたるときは、跡へ退くへからす。其のまゝ敵を押せは、足搦を掛け返へす道理にて、利益あるものとす。又は己れの拳腕を鎌柄とし、竹刀を鎌刀の如くし、以て敵の則首に引き掛け、敵を引き倒けさせ、中心點の片足のみに、移りたる時、其の中心點を拂ひ倒す、等工夫すへし。

慶長の頃ろ、大内に於て、吉岡建法（一説兼房又三郎也）朝吏を斫る、太田忠兵衛、進みて紫震殿の階下に建法に遇ふ、建法、遇々顛して倒る、時に忠兵衛呼て、曰く、人の蹉跌に乘するは、武夫の恥つる所ろ、汝、疾く起て輕蔑を決せよと、建法、乃ち身を翻して起らんとす、忠兵衛、閃然刀を揮ひ、一擊して之を殪す。後ち忠兵衛に問ふ者あり、曰く、吾れ聞く、建法は劍を善くする者なりと、彼れか其の倒れしは、天與なり、汝ち盍そ之れに乘せすして、而して、其の起つを待つ耶、忠兵衛、瞞て對て、曰く、是れ、劍法虚實の秘訣ある所ろなり、請ふ一言せん、夫れ、其の倒るゝや、倒るゝは虚にして、而して、以て身を捍く所以のものは、實なり。我れ其の實に臨めは、往々反て、爲めに斫らるゝ恐れあり。其の起つや、起つは實にして、而して、以て敵を防く所以のものは虚なり。我れ其の虚に乘せは、彼れに先たゝさるものなしと。太田忠兵衛の所謂虚實の辨は、須らく銘肝すへし。

又た佐々木巖柳、既に倒る、宮本武藏、之れに迫る、巖柳身を翻して、武藏の兩

闘を猛き拂ふ、武藏は之を飛び賺すと雖とも、尙ほ袴の裾を切られたり。田原坂血戰場に於て、之れに類似せし實例は、往々之れありき。當時負傷者あれは、呼び起して、而後に近つき、死屍あるも、身搆へして近つきしなり。是れ死傷者なりと、油斷して近つき、切られたる者、往々之れありて、自ら此の戒心を與へたるなり。故に虛實の辨は、其の跡に泥まずして、利用する所ろなくんはあらさるなり。

第九章　大技習練

志

しのぎをは削りて細くなるものそ平素の習ひ大技にせよ

凡そ、實戰は、平生の精巧を減殺し。刀尖は、最も遜縮するものたるを、知らずんはあらす。

夫れ、短兵奇襲は、縱橫奮鬪せすんはあらす。然るに、劍霜彈雨の間に、斬て入れは、平素に三尺振り上け、一刀兩斷に切り込む、天性をなす者にして、漸く、刀尖は三寸動き得へし。若し、平素に手先き計りにて、慣習したらんには、刀尖減縮し、寸分も動き得さるへし。是れ、平素の習ひ、大技にせよと、云ふ所以なり。

偖りに板間裡に於て、勝を貪はらんと欲せは、防禦小技に搆へ、手先き計りにて、支へチョッチョッと掠擊するに、利なきにあらす。然れとも此の利は、板間裡の利にして、實戰上の利にあらす。苟しくも、精眼に搆へたる敵の小手を、掠め擊ちに慣るれは、早や、面に打込むことは、容易ならす、次第々々に、小手のみ掠ゆるの、技癖を長するものなり。此の故に、打ち易き小手は打たす、打ちにくき、面を打ち慣れさるへからさるなり。併しなから是れ等は、板間裡の勝負を、目的とするに過きさる者と、異日一大需用に應し、偉動を奏せんと欲する目的を有する者と、に依て、大差別あり。吾人は、一旦緩急あれは、義勇奉公の用に、俟つものなり。是に於てか、此の主旨を普及せしめて、就一する所ろあらんことを、企望せさるにあらさるも、亦た劍客其の人々や、各々志さす所ろあるへし。然らは、曲馬師は、曲藝に巧美ならさるへからす。騎將軍は襲擊に勇敢ならさるへからす。騎將軍は襲擊に勇敢なり、曲馬師は曲藝に巧美なり、然れとも、互に地

を替へしめは、互に志を成す能はさるへし。是に於て、各自執る所ろの流義あり、遂に混合すへからす。古語に、志さし同しからされは、爲めに相謀らすと、是れ之を謂はん。

第十章　組打。

志　しなひをば落さば直くゝ打ゐりて外さば無手と組みてかためよ

撓ひとは、竹刀の事なり。其の撓ひをは、落さはとは、彼我二樣に解し。うちゐりてと云ふも、擊搏二義に解すへし。擊は得物を以て、ウッを云ひ。搏は肢體を以て、ウッを云ふ。即ち劍術を擊劍と云ひ、柔術を搏法と云ふ、是れなり。

先つ敵が竹刀を落したるときは、其の機を失はす、直ちに打入るへし。若し、其の機に後れたらんには、徐かに迫つて、輙く打たす、氣當りすへし。

若し之れに反して、自分の竹刀を落したるときは、直ちに飛ひ込み、柔術を應用すへし。或は一時飛ひ退さり、隙きを見て飛ひ込ひへし。

俗流の組打を見るに、剛士は、小手を脱き棄て、傍人は、竹刀を拾ひ上げなとして、

而を脱くを以て、勝負を決するか如し。當流は、小手や面を脱げは、引き分けにす、尤も小手や面を脱き去らすして、柔術を應用せらるれはなり。而して一旦組打ちするも、隙きさへあらは、直ちに竹刀を取り、後れて起らんとする虚を打て、勝を取る掟なり。

外史に牛若壹讀書夜學劍搏と云ふ、劍は即ち劍術なり、搏は即ち柔術なり、大軍亂れ入て相搏するは、和漢の史に多し、殊に源平を最となす。今や兵制革新す如何、曰く、現に西南の役に、我か拔刀隊士折田實房は、刀折れ賊と組打ちし、勇名を顯はせり。且つ、無煙無聲の速發銃は、發明せられて、恰も、中古弓矢の取ひに於ける感あり、聞くか如くんは、銃丸不洞兵裝は、試驗せられて、是れ亦た、中古甲冑の軍に於ける思ひあらんとす。從來準備射擊其の効を奏して、敵に衝突するを、決勝となせしものは、尚ほ、準備衝突とも謂ふへくして、眞正の決勝は、最後の組打ちにあるを、信せすんはあらさるなり。是に於て、柔術の軍隊に、必裏を感し來るへし。故に未來將校生徒たらんと欲する者は、搏闘(ハクトウ)も亦た稽古すへ

し。

第十一章　有耶無耶

有りて無し無て有るとは至妙哉無念無想の試合ひなかばに

無念無想なるものを、速了すれば、偶然の出來事に類似す。而して無念無想なるものは、決して、偶然の出來事にあらざるなり。若し其れ、偶然の出來事なるときは、心氣力一致せざるか故に、浩音快叫する能はざる如き、氣脱け間脱けするものなり。

無念無想や、意に究めざるにあらず、而して、言に述へ難き所ろなり。猶ほ孟子が、所謂浩然之氣も、言ひ難き所ろ、却て、無限無量の味ひを存す。而して、浩然の氣なるものは、胸中別に盛大の物あるにあらず。苟しくも、行の心に、慊からざるものあれば、浩然之氣餒ゆ、安んぞ浩然たるを得ん。猶ほ且つ、意我れに在らざるときは、辨舌爽快なるも、意我れに在るときは、吃々として、流暢ならざる如き、是れなり。

却説其の至妙なるもの、何處に在るかと問へば、何處にもなし。何處にもなきかと問へば、何處にか在り。左すれば、吾れにして吾れ知らずと、云はずんばあらず。故らに其の妙用を、顯はさんとすれば、念慮に渉りて、無念無想ならず、强ひて、無念無想ならんとすれば、木石同樣、無心無意に陷りて、至妙ならず。是れ劍道妙悟の、微に有耶無耶に存し、至妙なる所以なり。妙の字や少き女の亂れ髮ゆふにゆわれす解くにとかれす、是れ字體よりよみ來て、言ふに言はれぬ、意味を說けり。之を油奥き事の樣に、誤解すへからす。見ぬ人になんと語らん浪華江の見てさへ更らに言の葉もなしと云ふ、兩首の深味は、修業の進歩するに、隨て、心ろに肯んする所ろあるへし。

第十二章　健卒

命ちかけ君に捧けん劍き太刀仇に移るな花のしようぶに

凡そ道場に入る毎に、氣分を健卒する所以のものは、畢竟、命ちかけ君に捧けん劍き太刀云云の觀念、切實なるに由來す。夫れ、世々吾々の祖先が、身を以て國

に奉するに、斯の武を以てしたる遺風を思ひ、且つ、一旦緩急あれは、已れも亦た斯の武を以て、義勇奉公の用に、俟たんとす。豈に道場に入る毎に、氣分の健粹ならざらんことを、欲するも得へけんや。然り而して、粹は、鐵を燒き鍛ひて、而して水に入れ、鋼となすを云ふ。即ち、健粹は、其の燒き鍛ひたる火鐵を、水に入れる如く、精神の凛烈なるを意味す。

尤も、智識の豁達するに隨て、道場に入る毎に、氣分を健粹するの度を高ひるものとす。是れ即ち、有識の士は、有識の士ほとに、道場を神聖視し。無識の者は、無識の者たけに、道場を遊戯視する所以なり。

古來道場は、有識の士の、相會する所ろなるを以て、殊に禮讓を重んし、特に秩序を正ふし、奮勇剛氣專ら公正の手段に依りて、以て戰ひ、德義上、實に優美なる爭鬪なりしなり。然るに世間には、諸武の主眼を失ひ、徒らに角技者流を以て、思想卑劣を甘んし、狡計詐謀を逞ふす。都會輕佻劍客、多く是れなり。是れ、仇に夢るな花の勝負にと、驕誡せる所以なり。

第十三章　以鍔擊敵

拳しもて打込む程そよかりける体に根さゝぬ技は危うし

本題は、短兵接戰上の實驗を、擧けて極論せすんはあらさるなり。

第一　眞劍は間合ひ、（即ち距離）を誤り易き事

第二　眞劍は、板間程のみの目的にて、修業したる者は、寧ろ劍道未學者より、劣りて人後に、瞠然自失したる事。

第三　劍道未學者は、一に心氣急迫し、二に刀尖屆かす、頻りに土を研り、三に辷り倒れし者、往々之れある事。

第四　刺擊は、立向ひ來る敵に施し得ず。但し、一に切り結び居る傍らより刺したる者、二に偽つき疾みたるを刺したる者、三に逃るを追ふて刺したる者あるを見る、未た眞正に立向ひ來る、敵を刺したる者あるを聞かす。適々銃に劍を裝ひなから、却て之を振り翻し、打ちたるを聞く、未た刀尖にて、突きたるを見さりしなり。

第五　板間裡に於て、諸爪を上へ向け、摺り込み打ちに、熟したる者は、敵の骨を切り得さりし事。

右の如く、誠に眞劍は、第一に間合ひを、誤り易きに依り、偶拳を以て、敵の頭を打割る意氣込みにて、打込み、漸く刀尖適當なり。但し平生の試合ひと雖も、少しく勁敵に逢へは、間合ひを誤り、竹刀は届かすして、土を研る、況んや短矢接戰に於てをや。此の故に、こぶしもて打込む程そよかりける、とは云ふなり。

夫れ、慣れたる場所は、仕安く、慣れさる場所は、仕にくゝ、高きは近く見へ、低きは遠く見へる如きは、習慣の替はる爲めに、觸神の錯誤を生するに、由るものとす。是に於て、屢々場所を替へ、對手を替へ、以て研究せすんはあらさるなり。西洋劍術にも、屋外は室内に比すれは、近きに誤る、二十乃至三十珊知米突なりと云ふ。

我か、鶴翼魚鱗の携へは、遠近を反對にす。鶴翼は、眞向きにし、丈高く、幅廣

くすれは、間合ひ、遠くして近く見ゆ。是れ長大の人の德にして、脫け面なとを撃ち易き所以なり。魚鱗は、左向きし、丈低く、幅狹くすれは、近くして遠く見ゆ。是れ、矮小の人の、付け込み易き所以なり。

第二は、悠々待つ辯ありて、健腕健歩ならさるに由る。

第三は、劍道未學者か、氣のみ逸り猛けて、頻々土を研り、往々辷り倒れるは、逆上に近し、怪むにも足らさるなり。拔刀隊の歌に、息も絶へなん計りとは、穿ち得たる積りなり。

第四は、立向ひ來る敵に、刺撃を施し得すと云ふ、然るに、素人理論に、精神を沈着して、搆へて待ちさへすれは、敵より觸れて、貫ると云へる者あり。是れ空論のみ、實際眞劍は驚慌するを以て、平生の精巧を減殺するのみならす、突けも斬らるゝ、相打の恐れあり。故に態々、銃に劍を裝ひ居なから、却て、之を振り翼して、打つに至れり。拿破崙も云はすや、忽然驚慌する事の起りなは、敗らる時なりと。其れ然り、然るか故に、素人理論は、應用すへからさるなり。然る

を況んや、互ひに三尺の秋水を、以て相見る、突けば斬らるゝ、危急の場に處するをや。是れ、平日の竹刀試合ひに、仕易くして、異日の眞劍勝負に、仕難き所以なり。

第五は、板間裡のみの、目的に隨伴する弊習にして、實戰上須要の應用にあらざるなり。故に、体と太刀一致に連れて、右方より打つときは、右足を踏込み、左方より打つときは、左足を踏込み、踏込み過くる程にし、鍔拳を以て、敵の頭を打割る、意氣込みあるを要す。

前記の外に、眞劍は掠撃に流れ、防禦小技に陷ゐり、掠め切りするを免れず。猶は怜も、猫の鼠れて、玉取る如くになりがちなり。是れ、敵膽を奪ふ所以にあらずして、却て、敵を激發せしむる所以（虎之卷切り結ぶ云云の註異合ひを見るべし）なり。是を以て、踏込み踏込み、体に根さして、働らかざるへからず。若し之れに反せば、極めて危し。敵に体に根さゝぬ技は危しと、は云ふなり。

夫れ、優兵は、寡を以て、衆を撃ち、奇を以て、正を衝くに在り。彼の板間裡に

ては、悠々緩々構へて待つに、利ありと雖とも、畢竟、曲藝上の利のみ。短兵接戰は、第一に、氣の上の勝負あり。氣若し後るれは、受太刀となる、受太刀となれは、忽ち、其の首は飛んで、地に落つ。實に生死を、一刀一撃の下に分ち、成敗を、一目一瞬の間に決す。平生の板間裡に於ける、巧美は減殺す。故に敵の太刀は、我か專制の下に屈せしめ、敵の動作は、我か命令の下に從はしめ、以て、我は陽に立ち、敵は陰に置き、踏込み踏込み、先制せずんはあらざるなり。

吉田様陰居士の、武敎講錄に云へるあり、曰く、武士は武藝を習ひ、武義を論し、武器を閲するの、三事を以て常職とす。其の武藝を習ふは、技藝を巧みにし、名譽を求むるにあらず、唯た、手足を自由にし、骨節を便利にし、身輕く、體圓れて、只今にても、戰場に臨み、接戰に差支ゆることなき如く、應用を修練することなり。今世の武藝は、一種遊戯の花法となるもの多し。身を以て戰場に置き、瞑目工夫するにあらずんは、何ぞ其の遊戯たるを知らんやと。嗚呼活眼なる哉、天下活眼の士見る所ろ、必らず茲に出つ。而して世の劍客は、技に及ぶ能はざるな

り。蓋し浣季の今日、劍道を講ずる者、概ね劍客的の、奥中に座するを以て、奥惡を知らざる者のみ、是亦た怪しむに足らざるなり。要するに、血戰場に利わる所ろ、必らずしも板間裡に便ならず。板間裡に便なる所ろ、必らずしも血戰場に利ならず。秘陰の所謂身を以て、戰場に置き、瞑目工夫するにあらざれば、拳も て打込むはとそよかりける体に根さゝぬ技は危しと云ふ、深味は解し得さるへし。

第十四章　拔刀隊

木の葉散る田原か坂の太刀風は無念無想の試合ひなりけり

本題は、何たる感情より、起れるかを略解せさるへからす。之を暑解せんには、西南役戰歴上の一班を、自叙せさるへからす。之を自叙せんには、先つ田原坂に於ける、先登血戰は、偶然の僥倖にはあらさりしか、否やを慥かめさるへからす。之を慥かむるに、薩地朝日岳等に於ける、數度の斫り込みを以てせは、偶然の僥倖にあらさりしを、証明するに足るへし。是に於て、確信する所ろの、實驗を畢

て述へんとす。敎範全篇此の經驗を以て、伏線となす、故に、板間裡の曲藝を痛罵す。敎範全篇此の經驗を以て、骨子となす、故に、劍客的の華法を排斥す。好んで狂簡を學ふにあらさるなり、求めて奇矯を言ふにあらさるなり、實驗に依て、實驗を述ふるのみ、讀者請ふ之を諒すへし。

夫れ田原坂の地たるや、極めて險要たり。左は岡田連亘し、右は吉次嶺にして、前は羅崖崎嶇羊腸俗に云ふ段々畑なり。賊は、此の段々畑を利用し、巧みに壘を築き、所謂懷悍決死の士、堅く死守す。官軍晝夜肉薄力攻すと雖とも、動もすれは、賊は、拔刀奮進し、來て猖獗を極む。故に、官軍も亦た、拔刀隊を編成せさるへからさる必要を生せり。

曾て聞く、私學校黨は、常に謂らく、我か徒一擧せハ、蝦夷松前迄も、一蹴して擧くへきのみ、但た我れに敵たる者は、獨り東京警官六千あるに過さすと。當時官軍を易ふし、敵兵を侮とる、斯の如し、然り而して、獨り六千人を畏るゝ、所以のものは、川路大警視が、歐洲備警兵（ジャンダーム）の、制を視て建言し、曰く、天下の精英

たる、武士を募て、以て麾下を警備せん。と乃ち、武道に達し、剣撃に長する者を任用す。是れ即ち、私學校黨の、常に深く長るゝ所ろなり。我か六千員も亦た、赳々たる武夫を以て、自ら居る。畢竟、武士固有の長技に、恃頼する所ろ、大に敵愾の氣を振へり。（今日の剣客なきゝ云ふ者の比にあらさりき）是を以て、健腕一百餘人を精撰して、抜刀隊を編制す。其の戰ふや、獅子奮迅偉功赫々、全隊決死の結果、如彼矣。

三月十四日、拂曉、田原坂、段々畑の一大胸壁を、三面より合撃せんと欲し、各部署を分ちて進む、實道は短兵十名を率ひ、其の側面に向ふ。即ち二俣より水車場を過ぎ、字ヒトナイ谷の上に出つ、今茲薩人三百零四名の墳墓塚ある所ろ、是れなり、時に東天漸く白し、匂匂して壘側に潜行す。賊之れを悟らす、一意に正面へ亂射す。實道乃ち衆を麾まねき、曰く、好機會天與なり、失ふへからすと。即ち、吶喊して壘中に斫り込む、賊大に狼狽す、瞬間其の八九賊を斫て殪す。此の時胸部を命射せらる、恰も試合中に、胴を打たれたる心地に過きす、却て憤發死力を盡し、縱横(横)能闘せしを覺ふ。上田園田士等は、正面に在り、此の聲を聞き、

直に壘中に躍入す。川畑永谷士亦、旋つて茲に出つ。是に於て、總短兵相合し、共に鋭氣を增し、以て奮闘血戰し、血を蹂み、屍を越へ、北るを追ひ、直ちに第二線の賊を斫る、賊も亦た刀を揮ひ邀擊し、官賊共に抜刀衝突す。而して、銃丸四方より蝟集す、殺傷無算實道復た被傷す、尚ほ屈せす、且つ戰ひ、且つ進み、内村士に、擁止せらるゝも、聽かさりし由にて、釜瀬士、曰く、先登第一たるは、確認する所ろなり。何ぞ加療して、更らに復た出てゝ、戰はさる乎と。士に戒められ、且つ伴なはれて、去りし迄は記憶せり。

園田安賢士は今茲警視總監にて坂口流なり。川畑種長士は消防隊司令官にて柴田流なり。故上田良貞士は方面監督にて野村流なり。永谷常修士は警視本署長にて先代の高弟なり。又た當時參謀の釜瀬邦介士は今茲聯隊長にて鈴木流なり。鮫島頑雄士は近衛參謀長にて深見流なり。一に皆な、流藝の系統を同ふし、古郷を共にす、一個私人の資格を以て云へは、昔しは皆な剣道の友なり。剣道の友に、抜刀を提けて相會す。實に道場に入る如く、氣分を健淬し、健淬極つて

今昔の感、意氣の壯、殆んと言ふへからさりき。

此の役賊を斫る數級、而して再戰再傷し、尙は戰ふて止まさる等、當日の健鬪、概ね斯の如し。然も亦た一朝の二大血戰にして、詳況は髣髴として夢の如く、絕へて談すへからす。

再たひ、創の未た癒へさるも、强て請ひ、水俣口に出て、新徵募隊六番小隊長を以て、各地進戰す、凡そ十四餘合（小戰は除く）敵、苟しくも鬬けハ、斫り込み。少しく亂るれは、突き込み。接戰を試みるに、一も目的を遂けさるはなし。就中六月十二日の役、朝日岳（肥薩の境にて鬼ヶ嶽の前面）に疾驅して、壘下に彷徨る、賊壘上に出て丶、全身を顯はし、瞰下し、急射す、廣野一目蔽障なく、僅に草根を掩護とし、青木東作（松尾上原の役に先登し頭を斬て勇名を揚はす）を右し、本山金三を左し、實道正面に當り、乃ち斫り込を令す。本山金三、先發し跳て壘に入る、辷り倒れて斫らる。兵の田村初五郎、之れに續く、賊之れに背す、初五郎、之を刺す、賊刺し貫かれなから、振返つて、初五郎の右額を斫る。（田村初五郎は今も生存せり）此の時遲し、彼の時早し、青木を始めとし、左右

正面一齊に壘中に闖入し、奮鬪血戰賊數十人を斫り、殘賊を擒す。

川路長官は、親しく此の接戰を目擊し、實道を召して、曰く、只今の斫り込みは、子が平日に於ける、劍術の試合ひを、見るか如くなりしと。因に記す、後ち十五年目に、奮隊青木來る、道々商習中なり。青木は、實道か兵字搆へにて、驅け込ひ所ろを見て、聲を放ち、曰く、嗟彼の時此の如くなりしが、今昔の感至るなり云云。

却說、當時此の戰捷を布達す、其の文に、隈元圓之進の隊と書す。（此時は鹿兒島分遣隊の武山攻擊前即六月二十二日に出つ）圓之進とは實道か幼名なり、幼名劍術を以て聞ゆ、故に云爾すと云へり。實道に取ては、武門の名譽、何にをか之れに加へん。中川大山川路參謀等亦、陣頭に立ち、相語て、曰く、其れ今に、斫り込ひそ、待て其の試合ひ（兵語を用ひす術語を用ゆ）を見よと、謂ひしこと、屢々之れありしと云ふ。隨て、軍友等、本隊を隈元圓之進の隊と、綽號し、本隊員も、綽號を以てハ名譽となす、而して非常なる、劍客の如く思はれしは笑止なれ。併しなから、修業最中の頃ろ、人に巧美なり、上手な

りと、云はるゝを耻ち、逃者なり、元氣なりと、云はるゝを歎ひしなり、之れか爲めに、氣負け過きて、負くると、戒められし事亦、屢々之れありき。然亦、平生の試合ひには、頓着なく、一に眞劍に比し、健腕健歩ならんことを期せり。是れそ、圖らずも、舊名を以て、軍中に綽號とせらるゝ素因とはなれり。

最後の負傷は、七月二十四日都之城攻撃に先鋒とし、進んて斫り込んとす、壘前に堀割り路あり、渡るへからす。是に於て、白刃を提けたるまゝ、其の壘前を横きるとき、左足内踝部を狙撃せらる、賊は熊本共同隊にて、バッテンバッテンと云ふ、聲さへ聞ゆるに進む能はす、遺憾極まるに、青木原田等慷慨して實道に暫らくと請ひ●ゝ、刀を揮て壘を斫る、快哉賊忽ち潰走す。此の新徴募隊は、舊各藩士族より成立せし者にて、無慮千五百人なりしが、其の内の一小隊(一百二十人也)は、到る所ろ切り込みを行ひ、切り込みを以て始終すること、斯の如し。而して他の新徴募各小隊は、如何と顧みるに、一人として切り込みを行ひしことなし。左れは、綽號も亦た事由なしとせす、蓋し兵は率ゆる者に依れとなり。

嗚呼此の前役田原の坂に於ては、先登血戰者と稱せられ、此の後役肥薩の野に於ては、圓之進の隊と稱せらる。畢竟、劍撫其の者が、遂に此の名實を、全ふし得せしめたるのみ。是れ深く、先師先輩に、謝する所ろなり。而して實戰には、試合ひを想はれ、試合ひには、實戰を思はる、蓋し、偶然にもあらさるへき乎。

惟ふに、擔任は膽力を生し、負恃は勇敢を生す。是れ、自明の數なり、自信の力なり、猶は、泳術に熟練したる者は、渦まく急流を意ともせさるか如し。然るに、前後十六合の、接戰に於て、刀刃に鮮血淋漓たるも、尚は詳況は談すへからす。是に於て、唯た一言、以て之を蔽ふ、曰く、無念無想是れなり。嗚呼、愈々詳況の談すへからさる所ろは、益々無念無想の味ふへき所ろなるを信す。故に曰く木の葉散る田原か坂の太刀風は無念無想の試合ひなりけり

抜刀隊軍歌(一片の熱誠は經歷する所の地名を事實に交へるに在り 綴りつゝけと書きの句は琵琶の崩れに和する爲にす)

碎けと散らぬ人の和に——抜けと陷いぬ地の利を得　吉次山鹿(劍道の達)に跨りて——天險無比の田原坂　數萬の精兵死を極め——堅く守りて動かねば　切て

落せと太刀を取る——六千人の其の中に　劍きの技の達人を——撰ひに撰び百餘人　慷慨悲壯死を誓ひ——南の關（舊關所也）に血を歃り　戀て身輕く打立て——玉名（地名）の春の霧に　高瀨（地名）の浪に皷みうち——死出の山路よ分け入れは　木の葉（地名）散り果秋の夜の——霜は凍りて骨に浸み　黑白も分かぬ暗らの闇夜——辿り辿りて二俣（田原坂に對し砲戰せし村也）に　腰打ち懸けて見渡せど——彈丸雨注絶へ間なく　數限りなき胸壁は——漁とる船に左も似たり　嗚呼三尺の劍きも容易の業になき命ち——君に捧けて深きよく思ひ切てと堅唾呑み——枚を銜んで横合ひに　旋り出れは好機會——天の與へと喜ひつ　忽ち鞘を打拂ひ——玉散る劍き拔き連れて　煙りの中に切て入る——矢呼火の聲閃の聲　天地も崩す計りなり——園田安賢之れを見て大音聲に呼はりつ——實に斯くせよと期せし圖に　當る必死の隈元（ソレガシ）（自身の名を出す謙ひあるも之を敵へは事實を失ふ故に在の實に依り來の實を述ふ讀者之を諒へし）は——早や斫り込みしそ（つゝけや）物共と　指揮も烈しく摩まねき——眞葛邊地に壘を斫る　二た手の短兵相合し——鋭氣日頃ろ

に百倍し　血を蹂み屍ね踏み越へつ——追ひつ返へしつ火を散らし　斫字薙りに斫り旋る——太刀の早技目覺まし　太刀打つ聲の烈しさに——瀧石の敵も（おとろき）舌を卷き　崩れ立ちたる機に乘りて——諸ろ手の味方一ッ時に吶々（ドヤー）と攻めいる砲聲は——四方に轟き（戰地村名）巷霞み　植木（敵の牙營）の花も何のその——今宵一揉みと短兵を　顧れは無慘や斃れ盡き——無疵は僅か二三名　是れさへ戎衣に玉疵や——しのき削りて鋸の刄を　剥み立たる如くにて——息も絶へなん計りなり　左は去りなから幼けなき——頃ろより學び習ひ得し　劍きの技や柔ら手に——恃む武勇の甲斐ありて　先登血戰殊死しつゝ——血汐に染みし紅葉山　しかも二度さへ手負ひつゝ——血狂ひ猛けたる猪の　牙の刄先きの鋭どさは——摩利支天の加護ならん　吾れと吾か身の怪し程——顧みは無念無想既　劍きの技も柔ら手も——至れは無念無想なり　劍きの技も柔ら手も——

近時、拔刀隊を設備せんと欲する、議の要領を聞くに、實設の有無は、暫らく論

せず、一論尚武の元氣を、振作するに足るものあり。曰く、本邦は、往古より武國なる上へ、殊に、短兵接戰を長所とす。維新の際、一度外國と交通せしより、本邦固有の兵式を、一變して、一も二もなく洋式に摸倣したるは、彼の戰術器械其の者が、我より精巧なる故なれは、素より至當の事なれとも、本邦固有の短兵接戰に至ては、歐米各國にも比類なく、我か帝國獨得の戰術なるに、之を廢して用ひさるは、千載の遺憾なり。之を明治十年、西南の役の實例に徵するも、拔刀隊なかりせは、一擧賊の鋭鋒を挫くに至らさるへし。畢竟、洋式を用るは、彼の長を取り、我か短を補ふに、過ささる者なれは、我に固有の長技ありなから、之を棄て、用ひさるは、得策ならす、加之短兵接戰は、彼れ等の短所なれは、異日我か長所を以て、彼れに當らは、必勝の策なるへし。云々嗚呼、吾人は、此の精神あれはこそ、朝な夕なに修業するなれ、亦た一身上の戰歷を述ふるも、日本刀の威力あるを證明し、以て異日に俟たんと、欲する精神の獸止すへからさるに出るのみ。讀者亦幸ひに、樹下の風なきを咎むる勿れ。

第十五章　入死地

論よりは死地に入る身と覺悟せよお面小手とか叫ふ遑なし

夫れ、霜刀閃電相擊つに當てや、危機千萬、嚐た踏込み踏込み、先制するの外なし、

然るに、世の劍客なる者は、板間裡の虚用を知るも、種々の口實を設け、以て喋喋す。畢竟、死地に入る身と覺悟し、眞劍に比して、研究せさるが故なり。苟しくも、死地に入ると、覺悟したらんには、口實も附會もなき筈なり。唯一死地に入る、覺悟の終始一徹する者、必らす善く、眞正の劍法を啓發すへし。

彼の巧美を板間裡に衒ひ、少々觸れ當れは、輕くも、太刀筋も、顧みす。輙ち、引揚け。雨に山羊の鳴く如く、おめんーと、假聲を作て、逞ましく長くし、且つ、種種形容ぶるは、自他を欺きて、瞞着せんとする者なり、好しや、瞞着せんとするに、在らすとするも、斯の如きは、華法を馴致する弊端なりとす、豈に大に戒めさるへけんや。

人々、至誠に到るの要訣は、他人を欺むかさるよりも、自已を欺むかさるを先務とす。歌に人間は丶あるをなしとも云ふへきが心ろに問はゝ如何答んと云へり、即ち自已の良心は、明かに、其の所爲の眞劍に、戻るを知るも、板間裡の虛用なるを知るも、因襲又は技辯等に蔽はれて、本意ならすも、巧美を板間裡に衒らひ、自他を瞞着せんとするに、至るものなり。畢竟、死地に入る身と覺悟し、眞劍に比して、研窮せさるか故なり。眞劍は如何なるものそ、理想を推すも、分明ならん。故に論よりは、死地に入る身と、覺悟せよ、お面小手とか、叫ふひまなし、とは云ふなり。

併しなから、奈何に眞劍に、比すと雖とも、亦た荒唐無稽に渉るへからす、法は法とし、以て、其の弊に流れさるを要するのみ。敵掛け聲を放ち、引揚けたるときは、好しや輕くも、跡打ちすへからす。其の輕重、及ひ勝敗は、審判官に一任し、去て吾れは其の次の、勝負に勝つことを、心ろ懸くへきなり。決して負け惜みがましく、口上にて、喧爭すへからす。敵の太刀は、輕くも重く受け、已れの太刀は、重くも輕く卑下するは、武夫淳厚の風習たり。

凡そ、掛け聲を要する所以は、往古に在ては、素面素小手なるか故に、面を打そ、小手を打そ、と注意を惹き、打ち込みしと云ふ。中世道具を着用するに至ては、一に氣勢を助け、二に偶然無意の所爲にあらさるを證し、三に一勝一敗を分ち、亂撃を防制するか爲めなりとす。又た、掛け聲は、敵に氣を焦燥たゝせ、又は、周章打損せしめ、或は、誘出して返撃し、以て勝を制するにも、亦た一手段なりとす。

第十六章　會得

会得して忘れましきは敷島の大和劍きの道や栞りて

凡そ、武道は、演習さへすれは、足れりとするものにあらす。技藝は、演習さへすれは、進歩せさるにあらさるも、武道の奥を極めんには、道理に暗らくして、偏り演習のみにて、立ち得へきものにあらす。故に先つ、工夫を凝らし、思慮を彈し、萬と尋思考窮すへし。西郊に、散讀するはと、惰なる者はなしと云ひ。

一讀未た要領を得さるに、他を思ふ者は、讀まさるに同しと云へり。故に讀み來り、讀み去る、毎に、一々善く其の要領を咀嚼し、自家の腦底に融化するを、會得と云ふなり。

敷島の大和劍きの道たるや、

伊弉諾尊伊弉冊尊、瓊矛を執りて、八洲を畫し玉ひ、尙武の象顯はる。

天祖皇孫に命して、下土に君臨せしめ玉ふ時、寶劍を傳へて、天位の信となし玉ふ、尙武の道明かなり。

神武天皇、中州を平定し、靈命を受けて、人皇の始となり、尙武の訓定まる。天降の諸神に於て、健雷齋主の烈は、云ふに及はす、

素盞嗚尊の蛇を斬り、

大巳貴尊の國を平け玉ふ如き、三千年來武を以て本となす、外寇畏れて以て蹤を遠さけ、邦家顯て以て堵を安んし、其間或は、敵國外患なきに狃れて、文華を尙ぶ餘り、奢靡風流に陷いり、弓馬刀槍は、一の儀式の如く視て、風流嫻雅に、袵席に、沈溺して、以て劍道は、武門武士の業のみと、なせし、跡ありと云ふと雖とも、尙武の調は、萬古一徹にし、

天子躬ら寶劍を佩ひ玉ふ、御制之れあり。隨て、上下好武の稟性は、國體に基つきて、以て國光を發輝しつゝ來れり。是に於て、國史を繙とけは、我か大和劍きの道、發しては、大和魂となり、又は武士道となり、世界無類の、光華を培養したる所以を、觀るへし。乃ち、之を自家の腦髓に、栞りせすんはあらす、故に大和劍きの道や栞りて、と云ふになん。

此の章の終に臨み、眞影流の歌を告けん、其の歌に、我か流は行術も知れす果もなし命ちと限り勤めなりけりと云ふ、即ち是れなり。夫れ、文武の道は、廣大にして、上達すれは、上達するほと、高遠なり、終身之を講習するも、猶ほ、蘊奥を極め難きに困しむ。左れは、古人も、學藝に拓期なし、死を以て、之れが終りとなすと云へり。今や一校舍を出てゝ、一業務に服するときは、忽ち小成に安んし、優遊の弊に陷いるは、滔々たる天下一般の風潮なり。然るに適れなる哉、嗚呼、遠かに、將校は、軍事鞅掌、夜を以て、日に繼くにも拘はらす、寸暇あれは、必らす、赤幟銀鞘旭日に相映して、輝やき弊館に來らる。是れ弊館の歴史に、光輝を添ゆと謂はんより、寧ろ、天下一般の風潮に、矯正を與ふと謂はすんはあらす。

是を以て、國家の爲めに、其の德を頌せざるを得ざるなり。而して、當流の系統に係はる、此の歌の意も、亦た玆に至て、益々味ひ深きを觀るへし。

第十七章　劍術基本

夫れ、古人は、本を務む、本立て道生す。乃ち基本に熟練せゞ、變化應用は、一ゑ習なん。

熟練より生す。本を務めすして、末を求ひる如きは、焉んそ善く、豁達自在なるを得

擊劍神通錄事理問答に、曰く、事とは何そや、答て曰く、大と强と速と輕との、四を以て、根本とす。然れとも、大なるものは、遲く。强なるものは、固く。速なるものは、小く。輕なるものは、弱し。此の四弊なくして、大强速輕なるを、四訣とす。又た曰く、未熟者へは、大と輕とを、教へて、强と速とを禁す。即ち太刀筋を正ふする爲めに、太刀捌きを大きくし。太刀捌きを、大きく導く爲めに、遲く振り廻はし。手心輕快打ならしむる爲めに、弱く（大も弱も亦た程合ひあり）打たしむへし。問ふ曰く、理とは何ろや、事の上に於て、表裏あり。正を以て合せ、奇に勝つ。奇を以て戰ひ、正に勝つ。正を奇とし、奇を正とす。之を上達の地位に、進んて、事理一致と云ふ。問ふ曰く、間際、權際、氣際とは如何や。答ふて曰く、彼れよりも來るへく、我れよりも往くへき、之を間合ひと云ふ、間際是れなり。彼れに氣あり、我れに氣あり、機をなさんとす、之を氣合ひと云ふ、氣際是れなり。又た曰く、妙は熟するに在り、熟すれは、心ろ善く手を忘れ、手善く心に隨ふ。動は靜なるに在り、靜なれは、神善く智を使ひ、智善く機に應す。と字々句々、痛切極意の問答なり。

基本演習第一教　打込

總へて、整頓法は、步兵操典を適用す。猶ほ柔軟演習に於けるが如し、

太刀の操法は、拔き納めすることなく。肩へ劍　及ひ捧げ劍、改め劍等とす。

肩へ劍は、刀の柄を右手の拇指と食指中指との間に保持し、他の二指を柄の外に附し、其の手を右腹骨の稍下方に接着し、刀身を垂直に立て、刀背を肩の凹部へ托し

倣しく臂を屈し、肘を後方へ出す。捧け劍は、刀を垂直に上け、其の及(ヒラ)面を顏の中

央に割せしめ、鍔を肩の高さに齊しくし、肘は自然に體に近接す。其の第二節は右臂を全く伸はして刀を斜に下け、爪を上にして拳を右股より少しく離し、受禮者に注目す。受禮者答禮し、劍を肩へ取れは、下級者も亦た再たび刀を擧けて、之を肩にす。此の捧け劍は、號令を用ゆへからす。

改め—劍は、此の劍の令にて、捧け劍の第一節の動作をなす。檢査官、己れの面前に來る時、拳を外方に轉回し、刀身反對の面を顯はす。檢査官通過する後ち、肩刀の姿勢に復す。

右八相に構へ——劍　（初心は右のみ小手を用ひ熟すれは全道具を用ゆ）

各左足を前方へ踏出すと同時に太刀を右肩の上に取り左拳の甲を己れの右耳の邊へ接する如くし左手の人指を伸はし小手を細め右手は稍々之れに反し輕く掌握鷄卵の心ろ持ちにし刀尖高く後方へ四十五度に捧持し氣當りす

打込め——一、二、三、四、五、六、七

第一擧動　武士は一の令にて右足を充分前方へ踏込ひと同時に右肩より敵手の左

側面へ矢筈に打込み幾分か跡の足を右足へ引き寄せる

敵手は左足を引くと同時に我か右肩より兩拳を左脇へ卸ろし太刀を我か左脇へ竪立して武士の打込み來るを受留む但し間合ひを見計り歩度を加減す以下準之

注意　總へて敵手は之字形に跡退りて武士前進の習慣を誘致す初心の武士には豫行として第一擧動より第七擧動まて素振りせしむへし

第二擧動　武士は右足を踏込みたるまゝよし太刀を已れの右側後方へ轉旋しつゝ兩拳を頭上へ冠ふり兵字に構へ二の令にて左足を踏込ひと同時に敵手の右側面へ矢筈に打込み幾分か跡の足を左足へ引き寄せる

敵手は右足を引きつゝ太刀を左脇へ竪立したるまゝ右脇へ移して武士の打込を受留む

第三擧動　武士は左足を踏込みたるまゝにし太刀を左側後方へ轉旋しつゝ兩拳を頭上へ冠ふり兵字に構へ三の令にて右足を踏込ひと同時に敵手の左側面へ矢筈に打込む敵手は右足を右外へ移しつゝ刀尖を左側へ垂下し深く兩拳を頭上に冠ぶり左の臂を伸へ稍々腰を捩りて刀尖は拳を左腕に沿ひ勾形に置れ左足を右足へ引寄せつゝ武士の

矢筈よ打込み來るを左腕の上に勾形に受留ひ之を垂柳と云ふ垂れ柳の体なれバなり

注意　初心の武士には第一第二擧動の如くするを導ひき易しとす何となれは敵手に於て垂柳の體になれは初心は忽ち惑ひて太刀筋を狂はせ逆撃せんとすれどなり

第四擧動　武士は第二擧動の如くす

敵手も第二擧動になせし如く左足を左外へ移して右足を左足の後方へ引きつゝ兩拳を右脇へ卸ろして太刀を竪立し武士の打込を受留ひ

第五擧動　武士は第三擧動の如くす

敵手は右足を右外へ移して左足を右足の後方へ引きつゝ太刀を右脇へ竪立したるまゝ左脇へ移して武士の打込を受留ひ

第六擧動　武士は第二擧動の如くす

敵手は左足を左外へ移し右足を左足の後方へ引き寄せつゝ刀尖を右側へ垂下し深く兩拳を頭上に冠ぶり刀尖は右腕に沿ひ勾形に垂れ右手は小指より次第に緩め稍々左拳を握ふ如く左拳へ接しつゝ稍々腰を割りて武士の打込ひ太刀を右腕の上に受留ひ

第七擧動　武士は第三擧動の如く打込み直ちに其の打ちたる反動を利用して爲し得る丈け遠く後方へ飛ひ退り左足を後へ引き通常の如く兵字に構へ氣當りす

注意　初心へは前進する習慣を誘致すへきものとす然るに武士をして後方へ飛ひ退るを敢ゆるは場所の廣狹あるに依れり尤も終には元の地位に引き退くへし（以下準之）

敵手は右足を右外へ移し左足を右足へ引寄せつゝ刀尖は拳を右腕に沿ひ勾形に垂れ居るまゝ後方へ轉旋し稍々刀尖を頭上に一直線に立てゝ其の刀尖を稍々前方へ垂れ左側へ振り廻はして太刀の峯を左腕に沿ひ左臂を伸へ稍々腰を割りて武士の打込ひ太刀を左腕の上に受留ひ此の太刀筋を天上より見れは恰も羅馬數字の8を頭上に横に書く如く刀尖にて右左へ輪形を畫く心持ちにす而して稍々一節を保ち兵字に構へつゝ幾分か左足を踏出し直に深く右足を踏込ひと同時に茶巾しぼりに刀尖は武士の眉間へ兩拳は我か乳通りへまて下ける心持ちにて切り込み氣當りす終には元の地位に引き退く

基本演習第二教　打込

左り八相に構へ——劍

繼へて第一敎に同しくして左右の違ひあるのみ尤も各右足を踏出し居りて劍の令にて右手の內側は柄に稍々沿ふ如くし左拳は右肘に並ふ如くし左肩の上に太刀を取る

打込め——一、二、三、四、五、六、七

全く第一敎にして左右の違ひあるのみ終て互に太刀を精眼に搆ゆ

基本演習第三敎　繼打込

兵字に搆へ——劍

各右足を踏出し太刀を頭上に冠ふる所謂兵の字體の如く搆ゆ以下準之

繼き打込め——一、二、三、四、五、六、七、一、二、三、四、五、六、七、一、二、三、四、五、六、七、一、二、三、四、五、六、七、一、二

第一敎の右八相に搆へ打込めの第一擧動より始め第七擧動に至り第二敎の左八相に搆へ打込めの第一擧動に移り其の第七擧動より復た第一敎の第一擧動に移るか如くす

尤も敵手は武士に前進の習慣を誘致する爲めに之字形に跡退りしつゝ道場を廻はるものとす唯た打込稽古に異なる所ろは體當りせさるのみ

基本演習第四敎　互打込

兵字に搆へ——劍

各右足を踏出し兵字に搆ゆ且つ各片足を軸にす

互ひ打込め——一、二、一、二、一、二、一、二、一、二、一、二、一、二

第一擧動　武士は右足を軸にし左足を踏込むと同時眞直く切り込む

敵手は左足を軸にし右足を引くと同時に×字形に切り結ふ

第二擧動　敵手は刀尖を左側後方へ轉旋し右足を踏込むと同時に切り込む

武士は刀尖を左側後方へ轉旋し左足を引くと同時に眞直く×字形に切り結ふ

幾度も繰り返へすへし是れ武士に取ては左足の働らきを自在にす終て引分れ精眼にす

基本演習第五敎　延ひ打ち

兵字搆へ——劍

各右足を踏出し兵字に搆ゆ以下皆な奇數の敎は右足偶數の敎は左足を踏出すものとす

右小手に延ひ打ち込め——一、二、三、四、五、六、七

第一擧動　武士は左足を踏込ひと同時に眞直く敵手の右腕へ延ひ込み打つ
敵手は左足を左外へ移し右足を左足へ引寄せつゝ刀尖を一字形に右方へ横たへ武士の打込む太刀を右腕の上に受留む

第二擧動　敵手は刀尖を右側へ垂れ後方へ轉旋し上段より武士の頭上へ打込む
武士は刀尖を引上けつゝ右足を右外へ移し左足を右足へ引寄せつゝ太刀を一字形に左方へ横たへ敵手の我か頭上へ打ち來る太刀を賺して受留む

注意　武士は右小手へ打込まゝ太刀を我か左の方へ横たへて受留む敵手は右小手を防き受留むれは其の太刀を武士の左の方へ切り返へす稍々反對なりとす

第三擧動　武士は太刀を左側後方へ轉旋しつゝ上段より眞直く打込む
敵手は右足を右外へ移し左足を右足へ引寄せつゝ左手を伸べ太刀を一字形に左方へ横たへ武士の我か頭上へ打込み來る太刀を賺して受留む

第四擧動　敵手は太刀を左側後方へ轉旋しつゝ上段より眞直く打込む
武士は左足を左外へ移し右足を左足へ引寄せつゝ太刀を一字形に右方へ横たへ敵手の我か頭上へ打込み來る太刀を賺して受留む

第五擧動　武士は太刀を右側後方へ轉旋しつゝ上段より眞直く打込む
敵手は左足を左外へ移し右足を左足へ引寄せつゝ太刀を一字形に右方へ横たへ武士の我か頭上へ打込み來る太刀を賺して受留む

第六擧動　敵手は太刀を左側後方へ轉旋しつゝ上段より眞直く打込む
武士は右足を右外へ移し左足を右足へ引寄せつゝ太刀を一字形に左方へ横たへ敵手の我か頭上へ打込み來る太刀を賺して受留む

第七擧動　武士は太刀を左側後方へ轉旋しつゝ上段より眞直く打込み直ちに其の反動を利用し爲し得る丈け後方へ飛ひ退りつゝ兵字に搆へ左足を後へ引き精眼に卸ろす敵手は右足を右外へ移し左足を右足へ引寄せつゝ左手を伸へ太刀を一字形に左方へ横たへ武士の我か頭上へ打込み來る太刀を賺して受留め直ちに多少左足を踏出しつゝ太刀を左側後方へ轉旋し兵字に搆へて稍々一節を保ち深く右足を踏込ひと同時に茶巾しぼりに刀尖高く手元低く切り込み互に氣當りし精眼に取る

基本演習第六敎　延ひ打ち

兵字に搆へ——劍

各左足を踏出し兵字に搆ゆ

左小手に延ひ打ち込め——一、二、三、四、五、六、七

總へて右小手に延ひ打ち込めに同し但た左右の違ひあるのみ

基本演習第七敎　押へ打ち

兵字に搆へ——劍

各右足を踏出し兵字に搆ゆ

右小手を押へ打て——一、二、三、四、五、六、七

總へて第五敎に同し但た此の押へ打ては互に衝突する途端に應用する技なるを以て敵手より乘り懸る心ろ持ちにて兵字に搆へたるまゝ多少進み出つ武士は幾分か手元を下けて稍々刀尖を立て押へ付け打つ心ろ持ちにす以下第五敎の通りす

基本演習第八敎　押へ打ち

兵字に搆へ——劍

各左足を踏出し兵字に搆ゆ

左小手を押へ打て——一、二、三、四、五、六、七

總へて第七敎に同し但た左右の違ひあるのみ

基本演習第九敎　引き打ち

兵字に搆へ——劍

各右足を踏出し兵字に搆ゆ

右小手を引き打て——一、二、三、四、五、六、七

總へて第七敎に同し但た此の引き打ては敵の起り頭らを待て引き打つ技なるを以て武士は多少跡退りつゝ矢筈懸けに敵手の右小手を鋸斷す

基本演習第十敎　引き打ち

兵字に搆へ——劍

各左足を踏出し兵字に搆ゆ

左小手を引き打て——一、二、三、四、五、六、七

總へて第九敎に同し但た左右の違ひあるのみ

基本演習第十一敎　面を打ち胴を留む

兵字に構へ——劍

各右足を踏出し兵字に構ゆ

面を打て——右胴を留め——一、二、三、四、五、六、七

第一擧動　武士は多少左足を踏込ひと同時に眞直く敵手の額上へ打込む

敵手は左足を左外へ移し右足を左足に引寄せつゝ太刀を一字形に横たへ武士の我か頭上に打込み來る太刀を賺して受留む

第二擧動　敵手は兩足を踏み切て武士の右側へ飛ひ込みつゝ趾跟を地につき體は腰部を支へ膝は左右へ開き左手の爪を上にし兩臂を伸ばし武士の右胴を斫る

武士は左足を左外へ移し右足を左足へ引寄せつゝ腰を割りて其の腰を左側へ捻ち寄せ兩拳は頭上へ冠ふりたるまゝ右肘を右乳の邊へ卸ろし寄せ太刀の峯は頭上より右肩を

經て右腹骨に垂直に接し敵手の我か右胴へ打込ひ太刀を受留む

注意　此の敎以下は皆な第四擧動迄は同一の片方へ切り返へす感ふ勿れ

第三擧動　武士は右胴を受留めたる太刀を右側後方へ轉旋し上段より眞向へ打込ひ敵手は武士の右胴へ飛ひ込み斫りたるまゝにて起ちつゝ右足を右外へ移し左足を右足へ引寄せつゝ兩拳を頭上へ冠ふり太刀を一字形に左方へ横たへ武士の太刀を受留む

第四擧動　敵手は太刀を左側後方へ轉旋しつゝ上段より武士の眞向へ打込む

武士は左足を左外へ移し右足を左足へ引寄せつゝ太刀を一字形に右方へ横たへ敵手の我か頭上へ打込み來る太刀を賺して受留む

第五擧動　以下は第五敎の第五擧動以下に同し

基本演習第十二敎　面を打ち胴を留む

兵字に構へ——劍

各左足を踏出し兵字に構ゆ

面を打て——左胴を留め——一、二、三、四、五、六、七

總へて第十一教に同し但た左右の違ひあるのみ

基本演習第十三教　脱け面

兵字に構へ――劍

各右足を踏出し兵字に構ゆ

脱け面打て――右肩を留め――一、二、三、四、五、六、七

第一擧動　武士は眞直く敵手の額前へ打込む

敵手は兵字に構へたるまゝ飛び退き武士の打込む太刀を外つす

注意　此の技は平日の試合ひよりは寧ろ眞劍に多し何となれゞ實戰は刀尖屆かす土を斫るものなれり

第二擧動　敵手は武士の稍々右肩の上へ眞直く打込む

注意　此の擧動は理想の上にては易きか如しと雖とも熟練するにあらされは瞬速に施し難き技なり所謂目に見て手足應せす心に感して技倆出すと云ふ場なりとす

武士は左足を左外へ移し右足を左足へ引寄せつゝ太刀を一字形に右方へ横たへ敵手の

我か頭上へ打込み來る太刀を賺して受留む

第三擧動　以下は第十一教の第三擧動以下に同し

基本演習第十四教　脱け面

兵字に構へ――劍

各左足を踏出し兵字に構ゆ

脱け面打て――左肩を留め――一、二、三、四、五、六、七

總へて第十三教に同し但た左右の違ひあるのみ

基本演習第十五教　押し返へし

精眼に構へ――劍

各右足を踏出し柄頭は己れの小腹より少しく離して兩腕は寛かに張り刀尖は交叉して眼に注き氣當りす

押し返へし右側面打て――一、二、三、四、五、六、七

第一擧動　互ひに太刀を順に交叉す即ち敵劍の右側に於てす敵手は武士の太刀を

武士の右方へ打ち落す必ろ持ちて押へ遣る

武士は其の押し遣らるゝを利用して其の太刀を右側後方へ轉旋し兩拳にて頭上へ冠ふり左片手にて柄頭を握り將さに打込まんとす右手にて押し遣るときは刀勢快速なり

第二擧動　武士は左片手にて敵手の右側面へ矢筈に打込むと同時に左足は左外側へ踏み込み右足は左足の後方へ引き披らき全く側身となる

敵手は右足を後方へ引くと同時に右拳は太刀を握りたるまゝ己れの右肩の高さに上げ其の太刀を立てゝ武士の左片手にて我が右側面へ打込み來る太刀を受留む

第三擧動　武士は右手を添へて兩拳に太刀を左側後方へ轉旋し頭上に冠ぶり右足を踏込むと同時に敵手の左側面へ矢筈に打込む

敵手は右足を右外へ移し左足を右足へ引寄せつゝ刀尖は兩拳を上げなから左方へ一字形に横たへ左腕へ沿へ武士の我か左側面へ打込み來る太刀を受留む

第四擧動　以下は第五敎右小手に延ひ打ち込めの第四擧動以下に同し

基本演習第十六敎　押し返へし

精眼に構へ——劍

各右足を踏出したるまゝにて摺り出てゝ刀尖を変叉す

押し返へし左側面打て——一、二、三、四、五、六、七

第一擧動　敵手は武士の太刀を組み換へたるとき（初心へは組み換へと合す）武士の太刀を武士の左方へ打ち落す必ろ持ちにて押へ遣る

武士は其の押し遣らるゝを利用して其の太刀を左側後方へ轉旋し兩拳を頭上へ冠ぶりつゝ右片手は添ゆる迄にし左八相の如く構へる

第二擧動　武士は全く左片手のみにて左足を踏込むと同時に敵手の右側面へ打込む以下敵手武士共に第十五敎第二擧動以下に同し

基本演習第十七敎　押し返へし半は轉旋打ち

精眼に構へ——劍

各右足を踏出し太刀を交叉す總へて精眼の構へは第十五敎に示す如し

半は轉旋左側面打て——一、二、三、四、五、六、七

第一擧動　敵手は武士の太刀を武士の右方へ打ち落す心ろ持ちにて押へ遣る
武士は其の押し遣らるゝを利用して半ば其の太刀を右側後方へ轉旋し兩拳共に頭上へ
太刀を冠ぶりて右八相の構への如くす

第二擧動　武士は右八相の高く構へたる如く構へたるまゝ全く左片手のみにて太
刀を握り右片手にて押し遣る心ろ持ちにし敵手の左側面へ矢筈に打込ひと同時に我か
左足は敵手の左側の左外へ踏み込み右足は左足の後方へ引き披らく
敵手は左足を引きつゝ兩手にて太刀を立て右拳を左肩の高さに左方へ上げ拳留ひ

第三擧動　以下は第二數左八相の第三擧動以下に同し

基本演習第十八敎　押し返へし半は轉旋打ち

精眼に構へ——劍
各右を踏出したるまゝ太刀を交叉す

半は轉旋右側面打て——一、二、三、四、五、六、七

第一擧動　敵手は武士の太刀を組み換へたるとき武士の太刀を武士の左方へ打落

す心ろ持ちにて押へ遣る
武士は其の押し遣らるゝを利用して半ば其の太刀を左側後方へ轉旋し兩拳共に頭上へ
太刀を冠ぶり左八相の構への如くす

第二擧動　武士は左八相の高く構へたる如く構へたるまゝ全く左片手のみにて太
刀を握り右片手にて押し遣る心ろ持ちにし敵手の右側面へ矢筈に打込ひと同時に我か
右足は右外へ移して左足は敵手の左側の左外へ踏み込み右足は左足の後方へ引き披ら
く敵手は右足を引きつゝ兩手にて太刀を立て右拳を右肩の高さに右方へ上げ受留ひ

第三擧動　以下は第一數右八相の第三擧動以下に同し

基本演習第十九敎　卷き小手

精眼に構へ——劍
各右足を踏出し太刀を交叉す

右小手を卷き打て——一、二、三、四、五、六、七

第一擧動　武士は敵手より押し返へしの如く押し觸れたるとき兩拳共に劍尖を下

げ敵手の太刀の下を經過せしめ反對の刀側へ振り上げ刀尖にて輪形を畫く心ろ持ちにて卷き込み敵手の右小手を打つと同時に左足を踏込み右足を左足の後方へ引き拔らく敵手は充分に臂を伸べ右拳の第二節を外へ出す心ろ持ちにて右手の拇指を捻り締め込みて武士の打込み來る太刀を鍔際にて受留めつゝ幾分か右足を引く

第二擧動　武士は太刀を左側後方へ轉旋し頭上より敵手の左側面へ矢筈に打込むと同時に右足を踏み込む

敵手は右足を右外へ移し左足を右足へ引寄せつゝ太刀を左方へ垂れ左腕へ沿へ受留む

第三擧動　武士は太刀を右側後方へ轉旋し此の第二擧動の反對に打込む

敵手は第二敎左八相の第六擧動より第七擧動に渉る如く刀尖にて8字を畫き太刀を右腕へ沿へ武士の我か右側面へ矢筈に打込む太刀を受留む

第四擧動　以下は第六敎左延ひ打込みの第四擧動以下に同し

基本演習第二十敎　卷き小手

精眼に構へ——劍

各右足を踏出したるまゝ常法の如く順に太刀を交叉す

卷き小手を賺せ——一、二、三、四、五、六、七

第一擧動　敵手より先つ第十九敎に於て武士のなせし如く武士の右小手を卷き打つ武士は太刀を握り居る右手を放ちて空を打たしむると同時に多少兩足を引きつゝ左片手にて左八相の構への如く高く太刀を捧持す

第二擧動　武士は左足を踏込むと同時に右拳を後方へ振り出し釣り合ひを取りつゝ左片手にて敵手の眉向へ打込む

敵手は右足を右外へ移し左足を右足へ引寄せつゝ太刀を一字形に左方へ横たへ武士の眉直く打込み來る太刀を賺して受留む

第三擧動　武士は太刀を左側後方へ轉旋し頭上より敵手の左側面へ矢筈に打込むと同時に右足を踏込み右手を添ゆ

敵手は第二敎左八相の第六擧動より第七擧動へ移る如くす

第四擧動　以下は第五敎右延ひ打ち込みの第四擧動以下に同し

基本演習第二十一教　前進賺せ

武士兵字に搆へ——剣

武士は兵字に搆へ敵手は精眼に搆ゆ

突きを右へ前進賺せ——一、二、三、四、五、六、七

第一擧動　敵手は先つチョッと刀尖を振り上げ投り込ひ心ろ持ちにて踏爪を上へ向け兩肘をしぼり寄せ兩拳を上げ刀尖を頸窩へ落し込ひ心ろ持ちにす

注意　試合に臨めバ竹刀尖の切斷せし鋭角を打ち付る心ろ持にすへし

武士は右足を右外の前方へ飛ひ移し左足は右足の後方へ引き披らくと同時に右手の掌にて敵手の太刀の平らを我か左腋の外へ拂ひ除ける

注意　突きは後方へ避れは敵に繼け突きを入れる餘地を與ふる不利益あり

第二擧動　武士は左足を踏込ひと同時に左片手にて眞直く打込ひ

敵手は右足を右外へ移し左足を右足へ引寄せつゝ太刀を左方へ一字形に横たへ受留ひ

第三擧動　武士は太刀を左側後方へ轉旋し頭上より眞直く打込ひと同時に右足を

踏込み右手を添ゆ

敵手は第二教左八相の第六擧動より第七擧動に移る如くす

第四擧動　以下は第六教左廻ひ打ち込りの第四擧動以下に同し

基本演習第二十二教　前進賺せ

武士兵字に搆へ——剣

搆へて第二十一教に異なることなし

突きを左へ前進賺せ——一、二、三、四、五、六、七

第一擧動　敵手より先つ刀尖を振り上げ投り込ひ心ろ持ちにて突く擬勢をなす

武士は左足を左外前方へ飛ひ移すと同時に右手は拳を固めて敵の太刀を我か左腋より我か右腰の外方へ拂ひ除ける

第二擧動　武士は左片手にて左八相の如く搆へたるまゝ左足を踏込ひと同時に打つ敵手は第二十一教の第二擧動の反對にす

第三擧動　以下は第二十一教の第三擧動以下に同し

基本演習第二十三教　隨意切り返し

兵字に構へ――劍

各右足を踏出し兵字に構ゆ

隨意切り返し――一、二、三、四、一、二、三、四、一、二、三、四、一、二

第一擧動　隨意切り返しは第五教の第一擧動より第四擧動迄を幾回も繰り返し行ふ敵手は武士の氣息疲れ若しくは刀尖縺れたるとき爲し得る丈け後方へ飛ひ退き兵字に構へ稍々一節を保ち徐かに第七擧動の終りの如く曳と切り込む

武士は敵手の飛ひ退きたるを相圖に第七擧動の終りの如く後方へ飛ひ退き兵字に構ゆ而して肩へ劍の合ある迄は兵字構へにし繼て隨意切り返しの令あれは之を行ふへし

第十八章　打込稽古

夫れ、打込稽古は、氣息を永續し、歩法を自在にし、以て、健腕健歩ならしむるものなり。

武士は、基本演習第三教の如く、左右より矢筈に烈しく、打込みつゝ、間合ひの離れたるときは、體當りし、其の體當りを外つされたるときは、小速歩にて、板壁に迄も、突き破る勢ひにし、又た延ひ込み、又た體當りす。體當りの要領は、第八章に就て見るへし。

敵手は、武士に前進の慣習を誘致する爲めに、之字形に跡退りつゝ、ホイ、ホイ、ヤホイ、ヤホイ、と相接應し、一人の武士、體力疲れて引き込めと、他の一人を引受け、復た、氣息盡きて引込めは、復た他に及ぶ。武士は、順次に並列し、控へ居りて間斷なく、直に續くへし。尤も前者、未た引き込まさるも、鈍ふしと見れは、後者直ちに打掛りて、前者に替はるへし。要するに、一人の敵手と、數人の武士と、體力氣息の競爭なりとす。斯の如く間斷なくして、幾十人も引受けるは、先進の先進たる所以にして、斯道の名譽たり。是れ一面を一本とする所以なり。

打込稽古は、敵手武士共に、體に根さして、體より大きく働らくへし。先つ敵手は、刀尖を垂直に立てゝ、兩肘を張り、肩の根より押し廻はし、押し廻はし、兩肩の端より端へ、擧にて8字を横に畫く、必ろ持ちにす。武士は四十五度に、頭上より矢筈に、打込

ひへし。尤も頭上より四十五度に、打込みたる太刀を、頭上へ引き戻して、復た頭上より、矢筈に打込み、一々臂を充分に伸はすへし。彼の額前にて、兩手首を轉回する者は、刀を上へ向け、平らにて敵手の肩の邊へ、打込技癖を生す。元來初心は、速小の技癖を生し、易きものなれは、先進に於て、之を戒め、以て成るへく丈け、遲大に誘致せん爲めに、時々に、大きく大きくと、注意を惹き、尚ほ悟らすんハ、遲く打てと、敎ゆる等、其の人に依て、其の法を說くへし。

打込稽古の終りには、基本演習の各數を活用せしむへし。即ち、世間普通に云ふ、三本勝負の下た稽古なるもの是れなり。是れ併しなから、必すしも行ふには及はす。

問ふ、曰く、術の期す所ろは、勝を制するに在り、敵に勝を制せんと欲せと、常に三本勝負を、專務とせすんはあらさるか如し、請ふ之れか利害を聽かん。

答ふ、曰く、常に三本勝負を專務とすれは、害ありて利なし。是れ、彼の俗流劍客が、コセッイヲ分を、掠めるに長する所以なり。彼の相撲を見よ、相撲は何にか爲めに、勇壯活潑なるか、相撲取りは、生涯土俵の上のみの、勝負專門者にして、一勝一敗給金に

關す。定めし地取りにては、勝負の研窮のみなるへしと、思ひの外に、絕へて勝負をなさす、唯た唯一の打當りてふ稽古のみなり。相撲の日進新歩せる所以は、茲に在り、以て我か打込稽古の、必要なるを知るへし。適々勝負を試みるは、進歩の程度、及ひ技倆の優劣を、比較するに過きす。吾人の勝負は、一旦緩急に、臨みたる眞劍の上に在り。故に平生は、打込稽古のみにて、烈しく矢筈に打込み、左右兩足交互前後し、激に体當りし、以て、体力を練り、膽力を鍛ひ、置けを足れり。

問ふ、曰く、或る流にては、左右より矢筈に、打込みつゝ、左足を踏込み打ては、敵に體當りせられたるとき、危脆なりと云へり、果して然るものか、否や。

答ふ、曰く、其れは未熟の人の敎へと、竹刀の柄の長さとに、依るに過きす。先つ初心に左方より、矢筈に打込むときは、左足を踏込み打てと、敎ゆるも、左足を踏込み打つことは、容易に爲し能はさるなり。己れ之を因襲して、人に迄も、右片足のみを踏出し居て、打込めと云ふは、未熟の人の敎へたるや、知るへきなり、維新以後の、劍術使ひと呼はるゝ、連中に、此の類最も多し。且つ竹刀の柄の長さが故に、左足は踏込み打ち

にくゝ、而して左足を踏込み、慣れさるを以て、體當りせられたるとき、危弱なる如く思ふならん。若し夫れ、左足を踏込み打ちたる爲めに、體當りを防止するに、危弱なりとせバ、敢て問ふ、銃槍薙刀の如きは、如何、皆な左足を踏出し居なから、却て、善く防止し、善く衝突するにあらすや。故に、所謂體と太刀一致に連れて、左右兩足を交互に前後すへし。當に縱横自在の技倆は、之れより生すへきなり。

問ふ、曰く、平生に狎れ合ひの、人に對して勢ひ善く强擊し、晴れなる試合ひに臨めバ、存外にも跡退りて、未練の舉動ある者あり、斯の如きは、心膽未練なるに出る乎。

答ふ、曰く、然り。心膽未練者は、忍容の量なきか故に、平生は初心者の爲めに、肩肘など打たるれバ、忽ち、憤怒して强擊するも、晴れなる試合ひに臨めバ、未練の舉動あり、斯の如きは、堂々たる武人の、恥つへき事にして、劍道の背德者となす。尙ほ、第一篇無位ひの要領に參照すへし、

元來初心は、無我無心に、知らす道具外に、打込む者なり。之を防き得さるは、先進者の油斷なり、己れの、油斷を反省せすして、初心者に咎むるは、劍道の背德と謂はすして、何にとか云はん。

併しなから、奈何に初心と雖とも、道具外に打込みて、可なりと云ふにあらす。故に其の道具外なるを知らた、速かに謝すへし。復た之れに心ろゞかさるときは、先進は温言に、曰く、眞劍なら降參たと、諷諭する位ひよ止め、擊つも、擊たるゝも、愉快の心ろを以てすへし。

第十九章　太刀生死之辨

凡そ、太刀に生死あり、兵字搆へは、生の太刀なり。互ひに精眼にて、刀尖を合せたるときも、亦た少しにても、上へなるは生の太刀なり。打て打ち棄てにし、刀尖の地下に落るは、死の太刀なり。左右へ散り離れるは、死の太刀なり。要するに、打ち棄て打ち放ちにするは、死の太刀として、嫌ふ所ろなり。一たひ打ては、繼て、打出し易き樣にするは、生の太刀なり。竹刀尖を竪立し、胴を防く如き類は、受限りになり易く、無理にも打出んとすれは、小技に過きす、是れ皆な、死の太刀として嫌へり。我が劍術基本を應用するは、卐字の本領にして、打繼き打繼き、底止する所ろなく、所謂放ても、尙ほ

放ても尙は、生氣、最も盛んなるへし。眞劍は、次第々々、重くなりて小技になり易し。故に、平日大技に習慣せは、眞劍に臨み、大ならす、小ならす、中を得んとす。

參照に、回天五輪の卷を抄す、曰く、敵を斬るときも、手の内に替りなく、手の痞まさる樣に持つへし。若し、敵の刀をハル事、受る事、當る事、押ゆる事、あるとも、斬ると思ひて、太刀を取るへし。試めし物なと、斬るときの手の内も、兵法にして斬るときの手の内も、人を斬ると云ふ手の内に、替ることなし。總て、太刀にても、何にても、居着くと云ふことを嫌ふ。いつかさるは、活る手なり。いつくは、死ぬる手なり。常用の我か差す刀を、指二本にて振るときも、道筋を能く知りては、自在に振るものなり。太刀を早く振らんとするに依て、太刀の道筋に逆らひ、振り難し。太刀は振り能き程に、靜かに振る心ろなり。或る扇子や、或る小刀なと、使ふ樣に、早く振らんと思ふに依て、太刀筋狂ひ振り難し。太刀は打下けては、振り上げ善き道へ上げ、横に振りては、戻り善き道へ戻し、如何にも、大きく臂を伸べ、强く振る事、是れ太刀の道なり。我れ若年より、兵法の道に心懸けて、劍術一通りの事に、手を枯らし、身を枯らし、色々樣々の心ろに成り、他の流々をも、尋ね見るに、或は口にて云ひカコツケ、或は手にてコマカなる技をなし、人目に能き樣に、見すると云ても、一つも實の心にあるへからす。勿論、カヤウの事を仕習らひても、身を利せ、心を利せ、附る事と、思へとも、皆な是れ、劍道の病ひとなりて、後々迄も失せ難くして、兵法の直道は、世に朽ちて、道のすたる基ひなり。劍術の實の道になつて、敵と戰ひ、勝つこと、此れ聊かも替る事あるへからす。我か兵法の智力を得て、直なる所ろを行ふに於ては、勝事に疑ひあるへからさる者也。

新免武藏、正保二年五月十二日、寺尾驗亟殿參、とあり、以て太刀の生死を鑑ひへし。

第二十章　劍術試合審判

審判定義は、第一篇第十五章に掲く、就て見るへし。得勝點數表は左の如し

面（眞向又は左右側面若しくは切り返し打込みの類）	十點（稍々輕く又は反り仰く者の面金に探く打ち込みたる類）	九點
兵字小手（延ひ押へ引き又は切り返へし打の類）	八點（稍々輕きものゝ類）	七點

胴（左右飛ひ込み又は離れ際引き胴若しくは切り返へし胴の類）	六點（稍々輕く又幾分か胴の垂れに觸れる類）	五點	
面の垂れ（双手又は片手にて撃突するものゝ類）	四點（稍々輕く又は面金に觸れる者の類）	三點	
精眼小手（巻き込み又は掠め撃の類）	二點（稍々輕く又は中柄若しくは拳を撃ちたる者の類）	一點	

一　相打ちは、各自へ各點數を附與すへし。又た打消して、共に點數を附與せさることもあるへし。術語に、剣木周捨と云ふことあり、是れ、木刀にては、勝ちても、眞剣にて思ひの外なる事あり。又た木刀にて、不出來なるも、眞剣にては存の外なる事あり。例せは、敵は兵字に搆へ、我は精眼に搆へ、先を懸けて敵を突くに、敵の胸は突き貫くも、敵の太刀は我か眞向へ來るへし。面と胸との相打は、面を打たれたる者の負けなり。又た、敵の片手を打つも、敵は他の片手にて、我か左側面へ、打込み來るへし。縱ひ、前後あるにもせよ、突くと、撃つと、手と、頭まとは、孰れか急所なるを、必らすや後れたりとも、頭まを撃つに如かす、之を點數表に照らすも亦た然

り。故に面を取る事に心懸くへし、

二　面は、面金に觸るゝも、刀尖布團の上に、達すれは充分なりとす。竹刀越しに打込みたるときも、亦た可なりとす。但し、確實に受け留められたるときは、勿論無効たるへし。

術語に、茶巾搾りと云ふ、是れ手元低く、刀尖尚く、眉間に打込むものとす。然るに、面の布團の上に迄も、打込ひへしと云ふ理由は、眞剣に臨んて、爲し難き所ろを、平生に於て爲し慣るれは、眞剣に臨み、爲し易きを以てなり。即ち眞剣は、額を割けは充分なるも、平生は深く打込めと云ひ、眞剣は胸を突くへきも、平生は胸より高くして、突きにくき面の垂れを突けと云ひ、眞剣は斫り易き、精眼搆へのの腕を斫るへきも、平生は兵字搆への腕を、嘉みする等、總へて打ちは、眞剣に比して、打ち易き所ろを打たす。突きも、突き易き所ろを突かす。修業するものなり。之を知らすして、長柄竹刀者は、强て面布團の上へ、打込まんとするか故に、華法にも諸爪を上へ向け、恰も三寶を神棚に捧ける如く、吹矢を口邊へ擡ける如く、柄頭を額上へ上けて、敵の

而金に觸るゝを避け、摺り込ひ、決して傚ふへからす。但し、熟練に依て、眞直く延ひ打込むは、格別なりとす。基本演習に熟すれは、自然に茲に至るへし。

三　掛け聲を放ち、引き上げたる場合ひは、假令ひ輕くも、跡打ちすへからす。

四　平ら打ち、峯打ちは、居着して臂を伸はさゝる者と、右拳より左拳を高く上け、拳の逆に轉回する技癖者に多し、一々眞劍に比して審判すへし。

五　劍術の試合ひは、決勝點數を貳十點と規定す。即ち二十點に先登するを、以て優勝となす。但し平日普通の勝負法に依り、三本若しくは五本勝負を行ふとも、圓點の中に、此の點數を記入するものとす。蓋し、面なり、胴なり、數字を見て、了然たれとなり。

第二十一章　野試合規典

夫れ、野試合ひは、武技を野外へ演習し、短兵接戰術を講究する所以にして、平常の演習に比すれは、層、一層、實戰に適切なりとは、第六章に於て述へたり。今茲に其の規典を掲く、

凡そ、野試合ひの綱領は、軍令に基準すへし。夫れ、軍の主とする所ろは、戰鬪なり。術の要とする所ろは、制勝なり、故に、百般の事は須らく實戰に擬すへし。

但し實戰は、危急に處して、談笑平生の如くなるは、却て、大に餘勇を示して、以て、部下の恃頼心を惹くに、足るものなりと雖とも、平日の演習に於て、苟しくも談笑すれは、忽ち戲戰に流れ、眞に迫らす、頗ふる軍紀にあり、故に務めて、紀律を嚴守し、失容雜談すへからす。

因に實例を擧けんに、眞劍は、平日の反對に出る事、往々之れあり。未た太刀を合はせさるに、赫怒し來る敵は、左迄に意とせさるも、微笑を含みたる敵は、凄ましく爲めに氣を呑まれ、自ら危うく思ひしに、他の助太刀を得て、漸く敵を斫り倒したりと、云ふ實話は、屢々戍辰の役に聞く所ろなり。又た、士君子は人を以て、言を廢せすとすれは、俠客の言も、採るへきは採て、以て、參考となすに妨けさるへし。左れは、近頃ろ、死して各新聞に傳ふる、清水の次郎長とかん、呼へる者は、壯年より、眞劍鬪爭、幾回なるを知るへからす、刀痕滿身一癖あるは、一目判然たる者なりしが、老後に人へ語て、

曰く、敵の強弱を試むるには、立合ひたる初めに、我か切先きにて、相手の切先きを動かし見よ、其の切先きの、固くして動かさるは、氣の上すりて、全身の力を腕に集めたる、臆病者なれは、之を切るは、苦もなけれとも、我か切先きの觸るゝに隨ふて、動くは氣の落ち着きたる、強膽の者なれは、要心すへしと、戒しめたりと云ふ。前者の赫怒し來るは、氣の逆上したる者なり。後者の微笑し來るは、氣の沈着したる者なり。茲に剛膽自ら判然たりと雖とも、尙は俠客か、語に參照せゞ、益々、分明ならんとす。然り、平生は、殊に紀律を嚴守すへし。

編制　劍士は二軍に分つ之を源氏平家と號す但し其の親友を双方へ分配し朋黨の弊なきを要す而して一伍に伍長を置き二伍に什長を置き四什長の上に小隊長を置き四小隊長の上に中隊長を置く大隊聯隊準之

徽章　源氏は白旗とし平家は赤旗とす各一旗の軍旗を建て中軍たるを標示す統監及ひ審判官は紅白布を左上腕に纏ひ各部隊長は其の味方とする色布を片襷きに右肩に懸け戰兵は源氏白毬平家赤毬各面の上部に約す

始終試合　試合ひの始終は統監號笛を以て告知す各指揮官普く之を傳呼すへし戰鬪準備は一聲長く一聲短く戰鬪開始は二聲長く一聲短く戰鬪終決又は中止は三聲長く一聲短く號笛す若し砲を用ゆる塲合ひは臨時に其の符號を定ひへし

勝敗判決例　勝敗は各個脫毬者の多寡に依り且つ寨旗斬將等の數項に照らして判決す一に脫毬者の各個點數○二に軍旗を倒される者は其軍の二分一の脫毬者に均しき敗となす○三に首將を脫毬せしめられたる者は其の軍の三分一の脫毬者に均しき敗となす○四に部隊長脫毬胸壁陷落は各々其の軍の四分一の脫毬者に均しき敗となす○五に急射擊（記號を高擧すべし）を被りたると見認められ塲合ひは其の軍の五分一の脫毬者に均しき敗となす○六に斥候を擒とられたる者は其の軍の六分一の脫毬者に均しき敗となす○七に竹刀及ひ道具を破損し戰ふへからさる者あれは其の幾人なるに拘はらす其の軍の七分一の脫毬者に均しき敗となす以上七項に當る者を初項より遞減し兩軍の勝敗を決す

有階者心得　統監は一般方畧及ひ特別方畧を與へ試合ひの始終を指揮す○審判

曰く、敵の强弱を試むるには、立合ひたる初めに、我か切先きにて、相手の切先きを動かし見よ、其の切先きの、固くして動かさるは、氣の上すりて、全身の力を腕に集めたる、臆病者なれは、之を切るは、苦もなけれとも、我か切先きの觸るゝに隨ふて、動くは氣の落ち着きたる、强膽の者なれは、要心すへしと、戒しめたりと云ふ。前者の赫怒し來るは、氣の逆上したる者なり。後者の微笑し來るは、氣の沈着したる者なり。玆に剛慰自ら判然たりと雖とも、尙は俠客か、語に參照せゞ、益々、分明ならんとす。然り、平生は、殊に紀律を嚴守すへし。

編制　劍士は二軍に分つ之を源氏平家と號す但し其の親友を双方へ分配し朋黨の弊なきを要す而して一伍に伍長を置き二伍に什長を置き四什長の上に小隊長を置き四小隊長の上に中隊長を置く大隊聯隊準之

徽章　源氏は白旗とし平家は赤旗とす各一旗の軍旗を建て中軍たるを標示す統監及ひ審判官は紅白布を左上腕に纏ひ各部隊長は其の味方とする色布を片襷きに右肩に懸け戰兵は源氏白毬平家赤毬各面の上部に約す

始終試合　試合ひの始終は統監號笛を以て告知す各指揮官普く之を傳呼すへし戰鬪準備は一聲長く一聲短く戰鬪開始は二聲長く一聲短く戰鬪終決又は中止は三聲長く一聲短く號笛す若し砲を用ゆる場合ひは臨時に其の符號を定むへし

勝敗判決例　勝敗は各個脫毬者の多寡に依り且つ審旗斬將等の數項に照らして判決す一に脫毬者の各個點數○二に軍旗を倒される者は其軍の二分一の脫毬者に均しき敗となす○三に首將を脫毬せしめられたる者は其の軍の三分一の脫毬者に均しき敗となす○四に部隊長脫毬胸壁陷落は各々其の軍の四分一の脫毬者に均しき敗となす○五に急射擊（記號を高擧すべし）を被りたると見認められ場合ひは其の軍の五分一の脫毬者に均しき敗となす○六に斥候を擒とられたる者は其の軍の六分一の脫毬者に均しき敗となす○七に竹刀及ひ道具を破損し戰ふへからさる者あれは其の幾人なるに拘はらす其の軍の七分一の脫毬者に均しき敗となす以上七項に當る者を初項より遞減し兩軍の勝敗を決す

有階者心得　統監は一般方畧及ひ特別方畧を與へ試合ひの始終を指揮す○審判

官は各部隊に跟隨し判決の記號をなす理務官之を筆記す○各部隊長は權限及び演習の目的を體認し以て其の任務を盡すへし○理務官は試合上の經過を筆記し統監講評の材料に供ふものとす○終りには各整列し敗將は旗を捲き恭しく勝將へ捧呈すへし

第二十二章　當流劍法之形（中古の陣太刀にて假したる今の軍刀を用ゆるを可とす）

敵手武士各太刀を左手へ提け登場口に並立し首座へ對し敬禮す（此時一同起立すへし）敵手は首座の左方へ武士は首座の右方へ就く敵手武士九尺以上を隔てゝ相對し各太刀を帶へ差しつゝ蹲踞し左手は鯉口へ右手は右膝へ置き體勢を整ひ氣當りつゝ目禮す

注意　我か眼は敵の眼に注くへし○二に氣は充滿し一擊は稍々輕くすへし○三に太刀筋正しく茶巾搾りにし打込ひと同時に曳又は矢曳と掛け聲をなすへし○四に太刀を上段に冠ふるには踏出し居る足の方へ太刀を轉旋すへし即ち右足を踏出し居れは太刀を右側後方へ轉旋し左足を踏出し居れは太刀を左側後方へ轉旋すへし○五に步法は體と太刀と一致し跨かり過きさる樣にすへし

敵手武士互ひに右手拇食兩指の股を柄の下より矢筈に當（アッ）る樣に右肩を下げ右肘を寄せてスラリと拔き懸け刀尖四五寸位ひ鞘の內へ殘りたるとき際疾く腰を捻引くと同時に左膝を後方へ引拔らき右手を後へ廻はし鞘の釣り革の外より入れて鞘を右肩より背に負ふ左手を添へ柄頭を握り立上りつゝ右足を踏出し太刀を精眼に取り刀尖を右側後方へ轉旋して兩拳を上段に冠ふり兵字搆へにす但し距離の遠近を見計らひ步法を伸縮すへし

一本目　矢筈切合

互ひに兵字搆へのまゝ武士は左足を踏込ひと同時に敵手の右側面へ矢筈に切り込ひ○敵手は上段より矢筈に打下げて武士の太刀を打ち受留めつゝ右足を引く○武士は刀尖を左側後方へ轉旋し右足を踏込ひと同時に敵手の左側面へ矢筈に切り込ひ○敵手は刀尖を左側後方へ轉旋し上段より矢筈に打下げて武士の太刀を打ち受留めつゝ左足を引く○武士は刀尖を右側後方へ轉旋し稍々一節を保ち左足を踏込ひと同時に敵手の眞向へ眞直く切り込み稍々氣當りし徐ろに左足を引きつゝ太刀を左八相に引揚る○敵手は刀尖を右側後方へ轉旋し兵字に搆へたるまゝにし武士より眞直く切り込み來る途端に爲し得る丈け後方へ飛ひ退く乃ち基本演習の脫け面是れなり○互ひに徐々太刀を中段より卸ろして退却し元の位地を越へて止まり彼我九尺許を見計らひ進止す終は

皆準之

二本目　垂柳打込

敵手武士同時に刀尖を右側後方へ轉旋して多少前進し兵字に構ゆ○武士は左足を踏込むと同時に敵手の右腕へ矢筈に打込む○敵手は基本演習第一敎の第六擧動の如くし右足を引く○武士は刀尖を左側後方へ轉旋して右足を踏込むと同時に敵手の左腕へ矢筈に打込む○敵手は基本演習第一敎の第七擧動の如くし左足を引く○武士は刀尖を右側後方へ轉旋し眞直く延ひ打込み體に觸れんとするとき右へ回はれし向きを變して兩手首を交叉し刀柄を腹下へ擁し刀尖を地に垂れ氣當りす○敵手は體當りを賺し避ける如く左足を左外へ遠く飛ひ移し右足を左足へ引寄せつゝ太刀を右腕へ沿へ武士の太刀を受留め復た前方へ左足を踏出し其の左足を軸にし右へ回はれしつゝ右足は左足の後方へ移し全く反對の地に入り替はる○互ひに太刀を下段へ卸ろし氣當りし元に復す

三本目　常山之蛇

敵手は中段より前方へ太刀を振出し懸けて刀尖を上げ兩拳は右肩の上を經過せしめ右足を引拔き半右向きをなし頭は正面にし太刀を後方へ斜傾にして卜字形に構ゆ○武士は刀尖を低く地に垂れ左足をチョッと進め右足を踏出すとき刀尖を敵手の胸部の高さに擡げ左足を踏出すとき尖を下げ右足を踏出すとき刀尖を敵手の胸部の高さに擡げる即ち長蛇の波上をウネリ往く心ろ持ちなり○敵手は武士の二三度目に刀尖を擡けるとき我か左足をチョッと進めて右足を踏込むと同時に武士の擡ける刀尖を我か左方へ打拂ひつゝ體は左半向きし頭は正面にしなから上體を傾け刀尖を地に垂れ眼を武士の眼に注き居る○武士は敵手に我か太刀を打拂はれたる葉津美に刀尖を右側後方へ轉旋し深く左足を敵手の右側外へ飛ひ移し敵手の首へ切り懸ける擬勢をなす○敵手は武士に切られたるまゝ兩拳を轉回し左八相に構へ左足を踏込むと同時に武士の左足の內脛を薙り拂ふ○武士は刀尖を左側後方へ轉旋しつゝ飛ひ違ひに飛ひ揚つて敵手の薙り來る太刀の上へを飛ひ賺しつゝ右足を前にし敵手の左首へ切り懸ける擬勢をなす○敵手は武士の內脛を薙り拂ひたるまゝ跡へ退きつゝ太刀を右八相へ取り稍々踵を上げて輕身浮體にす○武士は刀尖を右側後方へ轉旋し左足を踏出し兵字に構ゆ○敵手は左足をチョッと踏出し深く右足を踏込みつゝ稍々屈みて武士の左胴へ切り込む○武士は右足を

右外へ移し稍々左膝を屈め上げ刀尖は頭上より左肩を經て左腰へ垂下し我か左胴を防く○敵手は武士の左胴へ打込みたるまゝ爲し得る丈け後方へ飛び退き刀尖を地に垂れ引く○武士は左胴を防きたる太刀を後方へ轉旋し左足を踏出し敵手の眞向へ切り懸ると同時に右足にて蹴り懸ける○此の理由は率然應變を象とるものとす其の首を擊ては尾至る其の尾を擊ては首至る其の中を擊ては首尾俱に至る是れなり

四本目　眞劍相打

敵手は精眼に搆へ左足をチョッと踏出し右足を踏込ひと同時に武士の心窩に對し空に突き出す○武士は兵字に搆へ左足を踏込ひと同時に眞下たへ敵手の太刀の峯を打ち落す○互ひに前方へ踏出し居る方の片側後方へ刀尖を轉旋し兵字に搆ゆ○敵手は右足を踏込ひと同時に武士の左腕へ切り付ける勢ひにて引き小手の如く其の太刀を引き落ちつゝ兩足を摺り引く○武士は右足を踏込ひと同時に右片手にて敵手の眞向へ切り付け左腕は切られたるまゝ左肩と共に引き披らきて右片手に釣り合ひを取り左半向きをなす○敵手は刀尖を右側後方へ轉旋し右足を引きつゝ右膝を地につき武士の右胴を薙る○武士は刀尖を右側後方へ轉旋し右足を引きなから敵手の眞向へ切り付る心ろ持ちにて切り懸る○此の理由は眞劍は間合ひを引き離れ易きものなるを以て踏込み踏込み餘拳を以て擊つへき所以を示すに在り○武士は刀尖を左側後方へ轉旋し稍々一節を保ち右足を踏込ひと同時に眞直く切り結ム○敵手は刀尖を左側後方へ轉旋しつゝ立ち上りて左足を引くと同時に切り結ム

五本目　手心之鎬（シンナ）

敵手武士互ひに兵字に搆へ各右足を踏出し武士は右足を軸にし敵手は左足を軸にし切り結ひ一離一合を疾速にす猶ほ基本演習第四敎互打込の如し故に手額きを畧す○終りに敵手は多少退却し而して武士と互ひに太刀を中段に取り太刀先きを合せ武士は徐ろに寛（ユッ）かに兩手を高く額上へ上げて刀及を上へ向け刀尖を左方へ横たへ左手は拇指と中指を輪形にし人指を伸はし兩手は稍々交叉し左足を右足へ揃へ奏陽の體にて兩手を大輪形に右左りへ開く○敵手は兩手を交叉し胴部へ寄せ刀及を下へ向ける樣にし地下へ開く○此の理由は天地清濁陰陽を象とる少しくも曖昧に通せすんは解せさるへし○復た互ひに太刀を中段に取り徐々退却し元の位地にて太刀を血ぶりし太刀を鞘に納め初の如く躊躇し互ひに目禮し右手にて鞘を戴き左手へ移し徐ろに立ち上り初め

登場せし如くす○此の血ぶりとは兩手の掌裡にて太刀を轉回せしひるを云ふ而して太刀を室に納ひるには右手を逆にし柄を握り刀尖を垂れ左手は鯉口を握り其の拇食の指頭にて太刀の峯を受け鯉口へ導きつゝ鯉口へ注目し室に納め右掌にて柄頭を押ゆ

古流十之形（大き穀ろの撓ひを用ゆ）

一本目　龍尾　敵手武士共に當流劍法之形の如く目禮し徐ろに立上りつゝ武士は右足を踏出し敵手は左足を引き各左半向きをなし兩拳は腹下へ擁し刀尖は前方へ垂れ氣當す各太刀を右側後方へ轉旋し武士は左足を踏込み敵手は右足を引き互ひに×字形に切り結ひ繞て各左側後方へ轉旋し武士は右足を踏込み敵手は左足を引き互ひに×字形に切り結ひ武士は太刀を右側後方へ轉旋し左足を右足の一線上に進め稍々敵手を眼下に見る敵手は右足を左足の一線上に引き刀尖を右方へ垂れ左拳の小指の方を半上へ向け稍々膝を披らき屈めて低くなり機を見て刀尖を己れの左方へ振上げつゝ兩手首の內側と內側を合はせる樣に交叉したるまゝ太刀を横たゆ武士は眞直く之を打つ是れ基本演習第四敎なり是れより基本演習第四敎の第一動より第七動迄を行ふ以下皆準之

二本目　鐵破　敵手は眞向きに衝精眼に構ゆ武士は兵字に構ゆ敵手は刀尖を武士の胴間の高さに上げ進み往く武士は敵手の進み來るを待て上段より稍々左方へ斜めに敵手の太刀先きを打拂ひつゝ拳を轉回し及を敵手に向けて柄を左腰へ寄せ刀尖は後方へ伸べ左足を踏込ひと同時に敵手の右胴へ切り付る敵手は兩拳を頭上へ冠ぶりなから刀尖を垂れて右胴を防き徐ろに一本目の終りの如く敵手武士共に終りは一本目の通りすへし

三本目　風　敵手は體を右き半ば向きにし兩手は兩膝の如く左右へ披らき右手にて太刀を握り之を大きく頭上の上を經て其の切先きの峯を左手へ受け右拳を高くす即ち吹き卸ろしの形容なり武士は兵字に構へたるまゝ進みて稍々右方より左下へ空に薙き拂ひつゝ拳を轉回し及を敵手に向けて柄を左腰へ寄せ刀尖は後方へ垂れる此の時に敵手は刀尖を左側後方へ轉旋し右足を踏込ひと同時に左手を添へ兩手にて切り込む武士は敵手の切込み來る切先きを己れの右方へ打拂ひ兵字に構ゆ敵手は打拂ひ落されたるまゝ一本目の如く太刀を横たへ直に前記の如く切り返へしを行ふ

四本目　早船　敵手は右き半は向きにし太刀をト字形に構へ多少輪形に刀尖を潛

き回はし居る武士は兵字に構へ太刀先きを地に垂れ下段に構へんとす敵手は右足を踏込ひと同時に眞向へ打込む武士は基本演習第三敎の如くし直ちに切り返へしを行ふ

五本目　氣當　敵手は左半向きにし柄を目の上通りに擡げ刀尖を武士の眼に注き霞みの構へにて左踵を右趾へ進めて右足を伸はす歩法に取り進み往く武士は兵字に構へ待て敵手の突き込み來る太刀先きの平らを拍て己れの右方へ拂ひ除けつゝ左足を左側前方へ飛び移し右足を引く敵手も武士に拍ち拂はれたるまゝ刀尖を垂れて入り替り右半向きし左掌は峯に沿ひ伸はし柄を右腰へ取り擡く體をなし右足を引披らく武士は兵字に構へたるまゝ左膝を上げて稍々上體を反り一節を保ち右足を踏込ひと同時に眞向へ打込む敵手は推く體のまゝ捧けて受留む敵手は左手を柄頭へ戻して精眼に構へ武士は太刀右側後方へ轉旋し兵字に構へ互ひに突け打てと云ふ氣位ひを取て相迫る敵手次第々々に跡退りつゝ元の地位に復し左膝を地につき刀尖を地に垂れる武士は切り聲掛けて右足を上げて其の右足を敵手の柄の邊へ踏込み切り落さんとす敵手降參りと叫ふ武士少しく寛ろく敵手立上り一本目の如く太刀を横たゆ武士之を打つ是れより隨意切り返へしとなる終り

には當流劍法之形の終の如くすへし

劍舞

惟ふに當流の形なる者は、概ね美觀的に組織せられ、華法の譏りを免れす。寧ろ之を劍法と稱せす、劍舞となさは、却て、眞正の劍法、往々其の劍舞中に存在するを見て、驚きを之れに置かんとす。蓋し、劍舞は、遊戯に屬すと雖とも亦た、武夫の餘興なり。特に精神を込めて、一擧一動、苟しくも規矩を離れす、枯霜烈日、假りにも媚ひを買はす、泰陽として之を勵ひれは、我か氣位ひを練り、體勢を整ひ、歩法を嫻らひ、太刀筋を正ふし、所謂體と太刀と一致に連れる、本領を習得するに、補益あるのみならす、人をして覺へす、肅として襟を正さしむるに足るへし。亦た以て、尚武の一端たらすんはあらす。元來、劍術は素振りせさるへからさること、猶ほ槍術の素擦き、射術の素矯めに於けるか如し。未た素振りせすして、劍術に達し、素擦きせすして槍術に精し、素矯めせすして、射術に長したる者なかるへし。然り而して、素振りの必要を知ると雖とも、倦怠し易き恐れあり。劍舞の如きは、人々樂んで面して倦怠するく

となく、知らず識らず熱練し、熱練するに從ひ、得々快樂を增加して、以て、素振りを巧くするは、自然の勢ひなり。是に於て戒詩に擬するに、劍法之形を以てし、以て劍法の初步に供すと云ふ。

文能治內武威外　文はと云ふとき徐かに左足を踏出すと同時に右手を襟の內へ摺り入れる○能くと云ふとき右足を踏出し左手にて左襟を摺りて帶に至る○內をと云ふとき稍々兩膝を披らきつゝ兩手を兩乳の邊へ摺り上げる○治しと云ふとき腰を割り兩手にて腰を矢筈に押へる○武はと云ふとき右手にて左肩衣を捲き上げつゝ左手は鯉口を握る○外をと云ふとき左肩より右手の掌を外へ向け右腰の方へ引き回はしつゝ腰を割り右足を上げ右掌を順に戻し握け居る○威すと云ふとき力足を踏む

兩道相持四海泰　兩と云ふとき兩肘を張りて腰を押へ右肩と共に右足を引く○道と云ふとき左肩と共に左足を引く○相と云ふとき兩手を兩脇へ摺り上げ踵を浮へ○持しと云ふとき腰を割り据へて兩手を兩腰へ押し下ける○四海と云ふとき右手の甲を上にし左肩より右肩の後方へ波狀を形容しつゝ右足を引く○泰しと云ふとき左手の甲を上にし右肩より左肩の後方へ靜かに水平に引回はしつゝ右手は腰へ付け其の肘を張り釣り合ひを取て左足を引く

吾邦尙武冠萬國　吾が邦のと云ふとき左手は鯉口を握り拇指を鍔に掛けて左足を踏込むと同時に右手の人指を伸はし高く上げ天を指さし眼を之れに注く○尙武と云ふとき右足を踏込むと同時に右拳を固めて活潑に吾か胸を打つ○萬國にと云ふ時吾か胸通りの前方へ右手を伸出し五大洲を數へ指折る○冠たりと云ふとき右足を引き右手は右腰へ托して其の肘を張り左手は鯉口を握りたるまゝ天涯を仰視す

日本刀利天下最　日本刀の利と云ふとき柄に眼を注く○天下の最と云ふとき復た天涯を仰視し稍々後ろへ反る

誰道劍是一人敵　誰れか道ふと云ふとき意外なる形容にて右足を踏込むと同時に右手を柄に懸けつゝ上體を傾け左手にて刀刄を下へ捻ち向る○劍は是れと云ふとき半分位ひ拔き出す尤も逆拔きの法に依る○一人の敵と云ふとき刀を室に納め右手にて柄頭を押ゆ

畢竟此語屬冥頑　畢竟此の語と云ふとき右足は左膝を經て後方へ踏移し其の膝をつく○冥頑に屬すと云ふとき腕組みし上體を欹傾し愚鈍の狀を示す

請看高祖提三尺　請ふ看よと云ふとき立上りつゝ右足を踏込み右手を打伸ばし指さしつゝ左手は鞘を順に戻し鯉口を握る○高祖と云ふとき左手は鯉口を握りたるまゝ其の拳の第二節を鳩尾の左邊へあつる樣に抱込ひと同時に右手を柄に懸く即ち及は敵の耳を横に斫る方向に向ける○三尺をと云ふとき徐々拔出しつゝ切先き半分許鞘の内へ殘りたるとき左手にて鞘を拂ひ眞直く左足を踏込み鞘の振り出さる樣に右臂を打伸ばしつゝ左手は髮と音する樣に柄頭を拍ち握る續て太刀を左側後方へ轉旋し右足を踏込みつゝ手元低く刀尖高く切り落す○提けと云ふとき精眼に搏へ從容たるへし

戡定區夏及夷蠻　區夏を戡定しと云ふとき太刀を右側後方へ轉旋し兵字ふ搏へ鞘々一節を保つ○夷蠻に及ふをと云ふとき左足を踏込ひと同時に手元低く刀尖高く切込み柔弱として武德を表示す（軍刀ならは此の間に鞘を右肩より脊に負ふ）

劍乎々々君須學　劍乎々々と云ふとき右手の兩指にて再度柄を叩きて且つ其の

叩きたるまゝに他の二指も添へて柄を握り左手は放ちて其の右拳を轉回し更に左手の掌上に拳を受けて左足を右足へ引き太刀は鞘通りへ横たへる○君須らく學ふへしと云ふとき新田義貞か海神に祈る如く恭しく太刀を額前へ捧け瞑目す

護身鎭國比華嶽　護身と云ふとき捧け居る柄を右手の小指より締め握りて左手は拳を放ち右拳を轉回しつゝ右腋へ拳を捲き込み刀の峯を脊に接し柄頭を下け右足を引き右半向きす○鎭國と云ふとき自若として多少天涯を仰視す○華嶽にと云ふとき柄頭と左手の人指とを額上へ高く伸ばし突き合せて富士山を形ち造る○比すと云ふとき富士山を形容したるまゝ右足を左足の後方へ移し趾踵のみ地につき右膝をつきつゝ富士山の裙を形ち造り稍々仰視す

潛龍躍生掌　潛龍と云ふとき左手にて柄頭を握り右手を順に握り替へる○躍てと云ふとき右膝を踏み立て出すと同時に刀及を下に向けたるまゝ掬ひ上げに切る劍法にて切り出す○掌ろより生すと云ふとき太刀を右側後方へ轉旋しつゝ左足を踏込み立つと同時に頭上より切り込み稍々腰を割り据へる

流星閃發握　流星と云ふとき右片手のみにて太刀を握り高く頭上を經過せしめ右股より離して後方へ横たゆ○閃きてと云ふとき少しく刀尖を動かす○握より發すと云ふとき右足を踏込むと同時に兩手にて切り込み稍々腰を削り据へる

魑魅魍魎皆逃避　魑魅魍魎と云ふとき右片手にて柄を右腰の邊へ引付け左手にて左袴を取り鍾馗か赤鬼を壓倒する勢ひに擬しつゝ兩足の趾踵を軸にし左へ回はれし全く向きを變す○皆な逃避すと云ふとき右足を踏込ひと同時に突く

爽氣拂空清如濯　爽氣と云ふとき右拳を左肩へ寄せ刀尖を垂直に立つ○空をと云ふとき右足を軸にし左足を踏込むと同時に及を右へ向け目通りに切り伸せす○拂ひと云ふとき左足を軸にし右へ回はれし全く向きを正面へ復し右手の四指の爪を上に向ける○清きことと濯ふ如しと云ふとき左足を引き左片手に柄を持ち右兩指にて刀を拭ふ

君不聞劍之動靜有陰陽　君聞かすやと云ふとき右手を左乳の邊へ引寄せて直に打伸はし眼を其の人指に注く○劍之動靜と云ふとき右手の人指にて刀側を叩く○陰と云ふとき兩手にて柄を高く頭上へ擡け及を上へ向け刀尖を左へ傾け左手は拇指と中

指を輪形に人指を伸はし兩手を交叉し左足を右足へ横へる陰は結ぶ形ちなれはなり○陽わりと云ふとき頭上より左右へ大輪形に開き兩拳は腰より離して帶通り迄垂下し氣當りす陽は開く形ちなれはなり

陰陽各々提三綱　陰と云ふとき圓相に開き居る兩拳を心窩の邊へ寄せ刀尖は左肩の方へ左手は人指を伸はしたるまゝ柄の内面へ接し交叉す陽の反對を示す○陽と云ふとき兩手を地下の方へ向け左右均しく開き前の陽の如く帶通り迄上け氣當りす是れは武の道奥にして禪の深意も亦た加味す○各々三綱をと云ふとき左足を踏出し右片手にて太刀を牽輪形に高く頭上へ上け横たへて右足を左足へ横へ左手は人指を伸はし腰より離して帶通り迄垂下し氣當りす○揺ぐと云ふとき小早く左足を踏出すと同時に頭上より・右腰の邊へ卸ろし右拳の甲を右股へ接する位ひにし左手を柄頭へ添へ體は右向きし頭は正面にしト字形に拂ゆ

陰白背擊掠與刺　陰に白くと云ふときト字形よりナヽッと翻く振り出し精眼に據へつゝ左足を引く○背擊と云ふとき右拳を左肩の邊へ引上げ稍々刀尖を立てゝ右拳

の甲を外へ向ける樣にし刀の峯にて敵の面を打つ形容をなし打つと同時に右足を前にしたるまゝ摺り込ひ是れ刀の背にて擊つへからさるは辨を待たす然るに之を爲すは陰の陰たる所以にして損斥する所以なり○掠と云ふとき背擊し居る太刀を引卸ろしつゝ拳を戻しつゝ敵の精眼に搆へたる小手をチョッと掠め打ちし兩足を跡へ摺り引く○刺と云ふとき兩手にて敵の咽喉を突く心持ちにて突くと同時に右足を前にしたるまゝ摺り込ひ是れ掠と云ひ刺と云ひ共に陰たることは本篇を一通讀せは明了ならん

陽曰左右又中央　陽に曰くと云ふとき素陽として勝の象を顯はし徐かに刀尖を右側後方へ轉旋し兵字に搆ゆ○左と云ふとき左足を踏込ひと同時に敵の右側面へ矢筈に打込ひ心持ちにて切り込ひ○右と云ふとき刀尖を左側後方へ轉旋しつゝ右足を踏込ひと同時に敵の左側面へ矢筈に打込ひ心持ちにて切り込ひ○又た中央と云ふとき刀尖を右側後方へ轉旋し稍々一節を保ち左足を踏込ひと同時に兵字搆へより眞直く敵の眞向へ打込ひ心持ちにて切り込ひ而して左足を引きつゝ太刀を左八相へ引上け搆ゆ

六綱錯綜變化　六綱と云ふとき左八相より刀尖を右側後方へ轉旋して右足を引き稍々刀尖を頭上へ立つ○遽かに變化すと云ふとき刀尖を右側後方へ轉旋しつゝ左足を前方に飛ひ移し其の左足を軸にし右へ回はれし右足を左踵の後方へ移し全く背面へ向き兩手首を交叉し柄を腹下へ擁し刀尖を垂れ續て左足を引きつゝ左向きし頭は正面にし兩拳を轉回し柄を腹下へ擁し刀尖を垂れる

千闘萬搭不可量　千闘と云ふとき刀尖を右側後方へ轉旋し左足を踏込ひと同時に敵の右側面へ矢筈に打込ひ心持ちにて切り込ひ○萬搭と云ふとき刀尖を左側後方へ轉旋し右足を踏込ひと同時に敵の左側面へ矢筈に打込ひ心持ちにて切り込ひ○量るへからすと云ふとき刀尖を右側後方へ轉旋し左足を踏込ひと同時に敵の右側面へ矢筈に打込ひ心持ちにて切り込み其の左足を軸にし右へ回はれしつゝ右足を左足の後方へ移し正面へ向きを復しつゝ兩手首を交叉し柄を腹下へ擁し刀尖を垂れ氣當りす

一刀疾電再刀急霰　一刀電より疾しと云ふとき刀尖を左側後方へ轉旋し眞直く切り込ひと同時に右足を踏込ひ○再刀霰より急と云ふとき刀尖を右側後方へ轉旋し左

足を踏込ひと同時に眞直く切り込ひ

三刀復四刀　三刀と云ふとき一刀疾電に同し○復た四刀と云ふとき再刀に同し

刀々應機變　刀と云ふとき右足を右外へ移して左足を引くと同時に刀尖を左側後方へ轉旋しつゝ敵の左側面へ矢筈に打込ひ心持ちにて切り伸ゝす○刀と云ふとき左足を左外へ移して右足を引くと同時に刀尖と右側後方へ轉旋しつゝ敵の右側面へ矢筈に打込ひ心持ちにて切り伸ゝす○機に應してと云ふとき頭は正面にし體は右向きにし其の右向きしたるまゝ右足と右の方へ移して左足を右足へ引寄せつゝ兩手を交叉する樣に柄を吾か目通りへ擡け刀尖を敵の眼に注く心持ちにて發ひ○變すと云ふとき刀尖を右側後方へ轉旋しつゝ兩踵を浮へ軀幹を左へ回はれに捻ちれは左足の後脚と右足の前脚と交叉し兩足の外踝を向き合せると同時に刀尖は頭上より前方へ打込ひ勢ひにて左拳は左乳の下邊へ右拳は右乳の上邊に接する樣に柄を胸へ抱き込ひ是れ扇要の體と云ひ八寸の延曲と云ひ由來ある形なり（眞影流小笠原金左衛門鹿源治磨に入り眞貫が丸之巻を得て傳納し元和年に發流丸米藏人に之を以て勝ちしと云ひ傳ふ）

格長縮斫腋　格してと云ふとき扇要の體のまゝにて刀尖を前方へ突き出す格は間

合ひと云ふ○長くは縮んて腋を斫れと云ふとき突き出し居る刀尖を右側後方へ轉旋しつゝ扇要の體を拉ち戻しつゝ屈みて敵の右胴を斫る

讓短伸割額　讓つてと云ふとき屈みたるまゝ爲し得る丈け鳥の横飛ひに飛退く○短くはと云ふとき刀尖を左側後方へ轉旋しつゝ立上り兵字に搆ゆ○伸ひて額を割けと云ふとき左足をナット進め右足を深く踏込ひと同時に敵の眞向へ切り込ひ

不問刀利鈍　刀の利鈍を問はすと云ふとき兩腕を寛かにし刀尖を垂れ柄を腹下へ引き寄せつゝ刀身に注目す

唯審刀順逆　唯た刀のと云ふとき右足を引き復た左足を引き太刀扱法の通り血振もす○順逆をと云ふとき右手を逆にし柄を握り刀尖を垂れ左方へ回はしつゝ左手は拇食兩指頭にて太刀の峯を鯉口へ導きつゝ徐ろに注目し刀を室に納ひ○審ひらかにすと云ふとき右掌にて柄頭を拍ち押ゆ

嗚呼勝負機在此不在彼　嗚呼と云ふとき左足を踏込み右手にて左肩衣を捲きつゝ左手は鞘端を鍔に離けて握る○勝負の機と云ふとき右手を右方へ打伸ゝし指さす

○此に在りと云ふとき右拳にて胸を打つ○彼れに在らずと云ふとき復た右手を伸す

彼此須見非乎是　彼れ此れ須らく見るべしと云ふとき右足を踏出しつゝ右手を額上に上げ透かし見る形容をなす○非か是かと云ふとき兩腕を組み左足を右足へ捕へる

一團浩氣能不餒　一團の浩氣と云ふとき兩手を徐ろに高く頭上へ伸はして左右へ開き大輪形を畫く○能く餒へすゝと云ふとき兩手にて兩腰を強く揉み押ゆ

雖千萬人吾往矣　千萬人と雖ともと云ふとき左手は拇指を銜に懸けて握り右手は右肩衣を捲き更に右の袴を捲き上げ○吾れと云ふとき左足を高く踏込み腰を割る○往くと云ふとき右足を高く踏込み腰を割る○矣と云ふとき左足を高く踏込み腰を割る面して左足より跡退り徐に去る曾子が裏に聞て曰く子は勇を好むか吾れ嘗て大勇を夫子に聞く自反して面して縮ならずんは褐寛博と雖とも吾れ惴れさらんや自反して面して縮くは千萬人と雖とも吾れ往くと縮は直なり往は往て敵するの聞ひなり

第三篇　振氣流練體柔術

第一章　やわらの體意

夫れ、大極動ひて而して陽を生し。靜にして而して陰を生す。陰陽源是れ一氣なり。全く其の一氣を得る者は人なり、故に知覺運動至らさる所ろなし。然りと雖とも人生、學はすんは知らす、習はすんは至らす、知らす至らずして、勇ありと雖とも、亦た成功甚た難し。是れ、武敎の由て起る所以なり。凡そ、やわらは虛弱を轉して而して强靱と爲し、强靱を轉して而して剛毅と爲し、剛毅を轉して而して始めてやわらと稱す。やわらは、毅然として而して萬化に應するものなり。初め、形を以て技を敎へ、技を以て體を練り、體を以て氣を修め、氣を以て勇を養ふ、氣充つれは鬪ふ、氣奪はるれは奔る、故に斯の勇を恃みて、以て敵に當る者は、勝機を機先に握れり。夫れ善く戰ふ者は、利を見て失はす、時に遇ふて疑はす、英雄神速の機、深く思はすんはわらさるなり。所謂形なるものは、制勝の氣、悉待の度、奇正の變、應用の術、壹是皆な、收めて形の中に在り。是れ

即ち當流は、形を以て主とする所以なり。

凡そ、必氣力一致すれば、隨機應變自在なり。而して理氣自然の妙合を要す。水能く大木を浮ふと雖とも、細石を浮ふる能はず。風能く堅木を折ると雖とも、柳枝を損する能はず。是れ、柔克く剛を制する所以なり。天下の至柔は、天下の至堅を馳騁すと云へるも、蓋し來れは、萬物の精理、悉く我かやわらの體意に外ならざるなり。

第二章　練體柔術の辨

古來、漢文に認めたる傳書には、劍道柔道並ひに之を稱す。而して兼て道義を意味する場合は、柔道と云ひ、單に技藝を指稱する場合は、柔術と云へり。故に諸流を通して、柔道と云ふへし。且つ最古の卷物には、やわらと書きたるを以て、復たやわらとも稱すへきなり。然るに當流は、特に練體柔術と稱す。是れ當流は、教範第一篇に於て武道を敘し、其の第二篇に於て短柄劍術を編し、其の第三篇に於て練體柔術を緝す、以て道術を區分せしのみならす、他に混するの、屑きよしとせさるもの在て存す。或者業已に柔道を以て、流名の如く唱へるあり、又は、漢の光武は、吾れ柔道を以て、天下を治むと聞

へるあり。若し此れ等の語意を取て、柔術の應用に据へ、以て治國平天下を謀せんか、是れ豪强附會のみ。物の極致を云へは、藝技遊藝の末と雖とも、尤らしき理窟なきよはあらす。然れとも其の實は嚴誠なり、偶々之を寓言す、知識の度に於て、之を妄信する程の幼稚に向ては、或は壯語とせさるにあらさるも、豪强附會の結果は、必らす陰陽五行なとゝ云ふ、模型的の動作に陷いるにあらされは、能狂言に類する所作に流るゝものとす。彼のミユース（古代十二人の處女）が、奏樂洋々の中に舞踏し、或は合し、或は離れ、或は進み、或は退き、其の輕跳なる調子に依て、巧みに衝突を避ける所ろ、觀物として興なしとせす、運動として益なしとせす、然れとも斯の如きは、堂々たる武藝として、苟しくも爲すへき業にあらさるなり。

夫れ世には似て、而して非なるものあり、鄭聲の雅樂に於ける、輕佻の眞摯に於ける、是れなり。教範第二篇に、劍客の弊を擧けて、騎將軍と曲馬師を比較せしが、奈何に騎將軍と雖とも亦た、頑然武骨のみなるにあらす、御法の輕快なりと云ふは、馬術上の稱譽に用ゆる定語たり。我か練體柔術に於ても、動作の輕快なるは、素より稱譽する所ろな

も。其の輕快なる調子の内に、調あれは、外に顯はるゝものなくんはあらす。而して當に其の顯はるへきものは、如何なるものなるへき歟、今之日に辨明すへからす、筆に形容すへからす、左れは彼の琵琶は、何ゝか爲めに、士人の好尚する所ろとなるか、彼の鄭聲は、何にか爲めに男子の擯斥する所ろとなるか、茲に考、一考し來れは、均しく調子と云ふ、調子の内に、判然區別する所ろあるを知るへし。乃ち動作の輕快なると、輕佻なるとの、彼我を厚界して、紛亂すへからさる所以を諒せん。

抑々武藝は、吾人の精神を鍛錬する所以のものなるを以て、道場に入る毎に、氣分を健淬し、剛氣奮發、以て技倆を闘はすに、眞の敵に打克つと云ふ、觀念を終始一貫して、闘して道藝相衆れ、德才相備へ、以て武道の蘊奥を究めは、縱令ひ壘の上には、左迄の場來を得さるも、庶幾くは一旦緩急に臨むに及ひて、必勝の得あらん。然るに世間は、往々ミニュースに類するにあらされは、角技者流のみ、皆な以て本領を得さるなり。是に於て當流は、特に線體柔術と稱す。蓋し彼れ線とは、其の樹ふ所ろを異にす、隨て其の名分を正さすんはあらさるなり。

元來やわらは、賢良なる爲政家とし、勇强なる保護官とし、治者顯達の間に行はれ、高尚特立の目的を有せしものなりと雖とも、事政の末路に當りては、被治者の手に墜ち、遂に社會に地位ある者は、稍々之を學ふを恥るよ至らしめたりき。其の因は、澆季の世に伴ふと雖とも、第一に價値もなき活法を行ふと云ひ、賤業がましき折骨挫傷を治すと云ひ、次第々々に勿体を付けて、藪醫者の假面を裝ふより、來ると開はさるか得す。慶長十年に陳元贊と云へる漢醫が、亂を逃れて、福野七郎右衛門磯貝次郎左衛門三浦與次右衛門等の浪人へ、拳法殺法活法整法の圖解を傳へて、江戸町道場に（今も其の圖解めり）之を行ひしより、次第々々に、之をやはらの本來に於ける、極意秘訣の如く、誤認せられしこそ柔術の不幸なれ。其の不幸に乘して、以て一は自慢の種となり、一は恐怖の端となり、斯道、未學の者は、長れて之れに遠さかり、半熟の者は、誇りて殺活を擅まゝにする如く唱へ、遂に抱腹忠臭今日の有様とはなれり。然れとも尚は幸ひに、遠國諸藩の間には、武士道に於ける線體柔術と稱するもの、短柄劍術に附屬して、行はれ來れり。即ち是れ、曾滿の測深也矣。

此の故に當流は、活法も知らす、整骨も知らす、捕縄も知らす、純粹なる武士道に於ける練體柔術の外は、絶へて何にも知らさるなり。顧ふに知らさるを明言するは、知らさるを以て榮譽とする、理由あつて存す。乃ち我か武士道に於ける練體柔術は、俗を離れて高尚簡潔にし、彼れ聖の奥味以外に、超然卓立するものたるを知るへし。尤も効もなき活法を空頼みに、咽喉を絞め合ひなとするは、生理學の發達せさる以前の舊夢なり。假死の境界に在る者は、背中二つ三つ叩くか、引起して氣を慥かにせよと、呼ふ位ひにて蘇生すへし。何ぞ素々敷く活法なと、云ふを要せん。又た咽喉に棒を横たへ、兩端に人を乘せるなとは、力持ち興行の類にして、我か堂々たる武士道に於ける、練體柔術の爲すへき業にあらさるなり。

東京に行はれる所ろの、天神眞揚流なるものは、多く接骨業にて、慨ね人に是れ見よがしに、座窓にし。安政年間に江戸於玉ケ池に住せし、磯又右衛門と云へる者の末流なるへし。東京は火事の多くして、四肢を挫く者も隨て多く、其の挫きたる局部を引き伸はすに、柔術の體勢を以てすれは、便利なるに依り、此の社會に行はるゝものならん。

我輩は、柔術教授場挫骨治療所の標札を見る毎に、嫌として以爲らく、此れと世人に、同一視せられて堪まるものにあらすと。實に我か武士道に於ける、練體柔術は、彼れ等の奥味以外に、超然卓立せすんはあらさるなり。

蓋て之を聞く、詩は、無形の畫なり、畫は、無言の詩なり、而して詩家と畫家とは、相柴遊ならす雖とも、詩家と詩家とは、相親睦せす、畫家と畫家とは、相懸和せすと、是れ驍敵の妖懸にあらす、事ろ見識の衝突と云ふへし。然らは、劍家と劍家の相下らす、柔家と柔家の相容れさるも、亦た明かなり。我は眞摯を主とすと云ひ、彼は輕佻を事とすと云ひ、彼我相排するは、止ひを得さるへし。蓋し虚心平懐に、之れが得失を比較するに遑まあらす、否な虚心平懐に、比較すれば、比較するほと、我か先師の敎を是認するは、當然の事理なりとす。故に他流の事は、冷淡に見聞するも、口論すへからす。他流の者は、眼下に睥睨するも、試合ひすへからす。若し敢ひて試合ひを盟はば、眞剣勝負するのみ。是れ、當流古來の掟なり。斯く云はゝ、頑固に流義立てすと云はん、流義立てして武夫立つへし。維新以後、流義立てする氣力を失ひしより、諸流混淆蕪雜の弊を蒙

り、規矩なく、機軸なく、勝負是れ事とするに至れり。故に當流は、他流試合ひを嚴禁す。

問ふやわらは、治者謁述の間に行はれしと云ふ、諸侯中、誰れか善く之れか蘊奥を究めしや。

答ふ世に發刊せられ、人の普ねく知れる白川侯（樂善公）が、柔術を學ひしを抄して、貴問を滿足せしめん。夫れ公が、柔術の稽古日には、鈴木某必らず藩邸に來り、其の業を授くるを常とせり。然るに、一日鈴木は病と稱して來らず、門弟中、此の術に長したる某々二名をして、己れに代はらしめたり。當日の稽古には、二人替はる替はる、立合ひて遠慮會釋なく、公を投け付け、起きも立たゝりければ、公は種々工夫を凝らし、再三立合ひたるも、毎回烈しく投け付けられたり。元來、鈴木は立合ひ中に、彼れは暴しく、此れは無理なりと、一々敎示しければ、公は、例に依り、二人に向ひ、質問を試みたるも、一言の答たも爲さず、唯た已れが技倆を誇ふするのみなれば、公は、日頃の業も氣合施し難く、頗る不興氣にて、其日の稽古は休みけり。二人は、さてこそ

師の言に的中したりと、心ろ密かに笑を含みて退きたるか。公は、即時水野左内を召し、稽古場の頓末を落ちもなく語り、予か術の未熟なるか爲めとは云へ、餘りの事と思はるれは、此より鈴木の宅に赴き、同人に就て、親しく事の次第を尋問せんと欲すと云ひ欲るに、左内は大に驚ろき、君にして駕を枉けられなば、鈴木に於ても迷惑すへし、臣先つ面會して、此事を問ひ質さんと、直ちに座を起ちたり。然るに公は、日頃の沈着なるにも似はす、左内の歸るを待たす、近臣數名を從へて、鈴木を訪はれたるに、門弟出て來り、折惡しく不在なるを告く、公曰く予は先生に、面談せんか爲めに來れり、故に暫らく待合はさんと、座敷に通り待つこと、一時間許ならんかと思へる頃ろ、鈴木出て、恭しく座に着き、先つ茅屋に駕を枉げられたるを謝し、次に本日の稽古に、門弟二人に代はらしめたるは、心中に思ふ仔細の在りてなり。其の理由を云へは、門弟中に理と法とに長して技に拙き者と、技に長けて理と法に短なる者とあり。然るに後者は、多く其の業を卒へるも、前者は概ね中途にして廢す。公の如きは即ち其の前者の一人にして、卒業の程も覺束なければ、故らに門弟二人に命して、手

強く感らしめたるなり。公にして、此の業を卒へんと欲せは、今より一層術に長せんことに勉めさるへからすと、傳る所ろなく述べたるに、公の述雲忽ちに散したるにや渾面笑みを含まれ、先生の厚志に報ひんには、只た此の業を卒へるの、一あるのみと、深く謝して、歸邸し、夫れより專ら意を技術の研窮に用ひられたれは、其の業大ひに進み、遂に其の蘊奥を極むるに至れり。公も亦た、柔術に劍術に附屬せしめ、新たに傳授書をも、編輯したりと云ふ。之を以て柔術は劍術に附屬して、武闘藩士の間に行はれし、事實明瞭なるへし。

其の他、大名小名諸侯伯も亦た躬行せさるにあらさるも、執袴者流の事は、論するに足らさるのみならす、柔術は劍術に附屬せしものなるを以て、劍術に練達すと云へは、柔術は其の理面に立て、表面には顯はれさるも、其の實は劍術に兩達したるものと見て可なり。

柳生は劍術を以て稱すと雖とも、將軍に初謁するとき、伏兵不意に飛び付く、之を右へ拋け左へ倒して、矢叫火も焚ら怒く浪も何のその柔ら取る身は心ろ泰かにと口吟せし

と云ふ

却説、鈴木の所謂理と法とに長して技に拙き者と、技に長けて理と法に短なる者あり て、後者は多く其の業を卒へるも、前者は概ね中途にして廢すとは、我か教範第二篇に述へし、二十日熱心者の意義を詳悉すと謂ふへし。

元來、柔術は、理科にあらす、化學にあらす、要するに、理を後にし、業を先きにすへし、業に熟すれは理、自ら通す。若し之れに反せは、鈴木の所謂前者にして、概ね中途に廢せん。左れは術歌に、業藝は業を意るそのひまに理のみ長して下手となりぬると云ひ、理は業の中にあるこそ實の理よ理業二つの物にてはなしと云ふ、玩味すへし。

第三章　體勢

夫れ、やわらの體勢は、小兒を模範とすへし。小兒は、思ひ無邪なり、常に小兒は、人の眼に對して物を云ふ、其の語氣も素なり。而して常に腹力を充實せしめて、以て正しく立ち、以て鋭と歩み、以て少しく體を浮へ、以て大きく胸を開き、以て天然にやわ

ちの體勢を保持す。此の故に小兒は、日々幾度となく、或は墜落し、或は轉倒し、而して打撲擦傷することなし。是れ小兒は、體勢善く整ひ、鋭氣善く充ち、決心勇往眞に善く無念無想なるの致す所ろなり。

體勢、既に小兒を摸範す。中心も小兒の如く、無念無想ならざるへからす。中心の無念無想なるへきは、事ろ體勢より必要なりとす。其の例を擧け來れは、思ひ半ゞに過きなん。夫れ、彼の醉漢を見よ、容體は崩れて、歩々蹣跚たりと雖とも、絶へて心に怯怖する所ろなく、敢て物に抵抗する所ろなく、唯た自然の成り行きに、打ち任せるか故に、平常の人の誤ちて墜ちたり、辷り倒れたりなとする者に比すれは、案外に挫傷せさるなり。

要するに終始膂力の、脱けさる様に注意すへし。演習中に往々氣絶する者あるは、失笑放言する際に於ける、虚に多し。是を以て、笑を洩らし、物を云ひ、或は外を見し、又は油斷する等は、一切厳禁す。是れ生理上の過失を禦防すると、武道上の尊嚴を保持するに、基つくものなり。

第四章　融和

夫れ、やわらは、必らす、やわらならさるへからす。故にやわらは、凝硬を融和し、有無相通して、以てやらわの本體を、得るを專一とす。

尊しくも、肢體に、凝硬なる所ろあれは、夫れ丈け脆くして、枯木の如く、挫折し易し。術歌にやわらとは殺ふにしのふたゝへなり力身强きは弱くなりぬると、云へり。乃ち柔らと稱す、剛は其の中に在り、猶は天と云へは、地は自ら其の下に在るか如し。然り柔剛强弱の別あるを知て、之を融和せすんはあらさるなり。

夫れ、强は枯木の如く、弱は軟草の如し、共に利用するに足らさるなり。剛も柔を以て和せされは、强に近し。柔も剛を以て翼けされは、弱に似たり。體意に所謂剛毅を轉して、始しめて柔らと稱する所以是れなり。之を例せは、彼の鎧冑は、投礫を包み流して破損せさるも、編帆風を孕ひものは、小礫の爲めに、裂破せらるゝか如し。是れ正に力身强きは弱くなりぬると、云へる的例たり。猶は名刀も剛一片にては、缺る憂ひあり、柔一片にては、曲る憂ひあり、柔剛兼ねて全し。

概して年長けてより、始めたる者は、剛一片にして、勝負にこそ、左迄の大差なくも、年少の時より、修練せし者の如く、圓滑自在なる能はざるなり。又た演習するにも、幼少の如く、虚心平氣なる能はず、種々の妄想を惹き、様々の癖目を起し、斯くせば勝たりと、笑はれん、斯くせば力なしと、嘲られん、吾が體勢は正しきか、吾が姿勢は見苦しくはあらざる歟、などゝ顧慮して、以て益々力身張る、幾分か逆上の氣味あり。而して世の人々は、之れか罪を骨の堅きに歸す、骨は堅からざるへからず、唯た關節筋を柔軟ならしむる迄なり。然るに筋張つて、圓滑ならざるは逆上の致す所ろなり。故に年長けたる初心に對しては、取組まざる前に於て、懇ろに說明するにあらざれは、取組みたる上は、逆上して、禁なり、軸なり、揺めき揺みたるまゝ、握れは握りたるまゝ、容易に放さゝるなり。之れに反して、年少の時より修業せし者は、其の圓滑自在なること、其の虚心平氣なること、逆も年長けてより、始めたる者の、稜骨不圓滑なるの、比にあらざるなり。然り人として、血性男子たる者、多少の神經なきを得ず、多少の剛硬なきを得ず、是に於て猫回へりするを要す。猫は、低きより投るも、高きより落すも、地線

上に接着せんとする途端に、軟々回へり起るに依て、猫回へりと名つくと云ふ。又た一說には、猫疊と云へる疊の上に、回へるを以て名つけしとも云ふ。要するに、前へ回へり。後へ回へり、身體を地に打付けざる樣に、回へり起るを云へり。此の猫回へりに、習熟するに隨ひ、體勢は必らず整ひ、剛硬は必らず融れ、身體は自ら圓滑に取扱ひ、仰倒するも、反動を取て後頂を打付ることなし。

反動は、仰倒するに幾分か片肩を下たにし、其の手臂を縮々に伸ばして、疊を打拍すると云ふ。反動の音響、冴へて高きは、熟達せし証とす。

總へてやわらは、やわらにして、狠らく吾が精神を沈着し、以て臆せず迫らず、事乃悠悠として、而して活氣を失はず、練習すへし、之を泰陽の體と稱せり。

第五第　中心

凡そ中心は、重力を有する物體を倚立せしむるには、必らず鼎足三點以上地線上に支持する所ろなかるへからざると、同一の理にして、人の軀體を支持するは、兩足と兩手との働らきに依て、直立し、且つ歩行するものなるは、辨を俟たずして、何人も知了する

所ろなるへし。是れ兩足と兩手の働らきに依て、中心を取れとなり。故に、兩足と兩手の働らきに注意すへし。

惟ふに、流水の急流激湍の間に、停滯して、其の存在を保つは、渦紋の作用に由らさるはなし。獨樂の一足點を以て、直立するに、疾轉急廻の均衡に由らさるはなし。故に渦紋は、苟しくも範圍外に出れは、忽ち押し流され、獨樂は假りに一瞬間も停むれは、忽ち倒るへし。彼の圖らすも、石に躓つき倒れんとする場合に於て、烏に翼ある如き心ろ持ちにて、ナヨンチヨンと釣り合ひを取るは、急流に於ける渦紋の如く、獨樂に於ける急廻の如き、働らきにして、其の働らきの或る範圍外に出て、又は一瞬間も停むれは、忽ち轉倒す。是に於て、ナヨンナヨンと釣り合ひを取らんと欲すれは、何處迄も、ナヨンナヨンと釣り合ひを取らさるへからさるなり。若し其のナヨンナヨンを停止すれは、氷上に辷へる如く、敵に倒さるへし、即ち其の中心を取り失へとなり。術歌に引は付け來らは逆れ乎ちとは彼にたゝよふうつろ舟哉と、剛して以て、敵より我を引かゝ、我れは其の引かるゝに乎はす、付き從ひ往くへし。敵より押し來らは、我れは之れに逆はす、

之を避け勝して、逆り進るへし。敵に引かるゝも、押さるゝも、倒さるゝも、投けらるるも、繁廻轉起す、是れうつろ舟哉の意味なり。然れとも亦た、此の應用は、輕身浮體に失して、泛虛に過き、敵に釣り出されて、調子に乘せられ易し。調子に乘せられるも其の調子を何處迄も、取續けは格別なれとも、苟しくも調子を停止すれは、獨樂の如く倒され、假りにも跨がり過きる等、或る範圍外に出れは、渦紋の如く押し流さるへし。故に始めより、自衛沈體なるには若かす。自衛沈體は、輕身浮體の反にして、先つ角力搆への如くし、其の搆への固きことは、城郭の如く、其の腰を据へることは、盤石の如くす、是れ自衛沈體の體勢なり。

殊に自衛沈體と云ひ、輕身浮體と云ひ、極端に固執すへからす。之を要するに、當流は、自衛沈體を常體とし、輕身浮體を腑心とし、以て時機の宜きに應用す。

他流の事は、云ふに及はすと雖とも、他流は形を初心へ教へす、亂取りより始むるが故に、一種の約束對抗法とも、名つくへき仕向けにて、亂取りを習はしめ易き樣に、乙に調子を取て、泛虛に導くは、止むを得さるに出るものなり。然るに熟達して、尙ほ乙に

調子を取る、辨を存して動作輕佻にし、恰も彼のミューズが、踏舞の如く、躊躇し、躇躇し、巧みに泛虛波狀し、柔らの本領を得たるものゝ如く思へる者あり、是れ柔らの本領を、誤解するにあらざれば、柔らの本領を、外形に衒ふと謂はずんはあらず。抑も亦た、敵は、釣り出して調子に乘せ、其の調子に乘るを待て、掬ひ倒し、掬ひ投げ、せんと欲するものなり。其の調子に乘せられ、氷上に辷る如く倒れて、尙ほ柔らの本領を得たりと謂ふべき歟。

嗚呼我が流盲五首に、風に柳の訓あり、輕身浮體は、柔らの妙所なりとは聽とも、柔らの妙所は、胸中に收めて、時に圖らす應用するも、好んで常に之を外形に、衒ふべきものにあらず。藤洵子も曰く、吾が短所は、吾れ抗して、之を暴はし、之をして疑はしめ。而して却て、吾が長所は、吾れ匿くして、之を養ひ、之をして其の中に堅いらしむ。是れ、長短を用ゆるの體なりと、善哉言乎。

第六章　懸待

凡そ、守るに攻勢を取り、攻むるに守勢を固くして、以て全勝を期すべし。敵の守る所ろを攻るは、愚なり。敵の守らざる所ろに出るは、智なり。智善く右方を假搏して、左方を實搏すべく、虛實表裏の智略なかるべからず。術歌に右と見せ左を攻めよ虛々の實實の虛々知れ虛々の實知れと云ふ、是れ意右側に在れは、眼は左側に注き、我れ强なれは、弱を示し、若し我れにして弱ならんには、務めて强を張り、以て勝を制す。即ち時機に處するの韜畧に、富まさるべからず。

敵より懸り來らんとする萌しあれは、我は知らぬ似ねして、態と其の狙ふ場所を明けて見せ、而してゝ心ろにて、其の場所を閉塞すべし。是れ我知て知らぬふりなれは、敵も既に悟られたりと、悟つて、懸り來るを止むるものなり。若し强ひて懸り來らは、得たりと其の裏の手に出て、應し逐へすのみ。然るに敵より懸り來らんとする、萌しあれは、慌てゝ、我か明き場を閉ちんとし、驚ひて隙き間を、塞んとする調子に付け込んで、其の調勢を搏んと欲するものなれをなり。故に敵の狙ふ所ろは、明けて我か心ろにて閉塞し、敵の疎る所ろは、其の疎る所ろに就て疎りことを施さすんはあらざるなり。

我れ今此の手を施せは、敵はゝらす彼の手に渉るべし、彼の手に渉れは、我れは復た何

の手にて、勝を制せんと胸算し得るは、上達の地位に進みたるものなり。

胸算、既に立つ、務めて精神を沈着して、以て機會の到るを待ち、又は挑みて機會を誘ひ出すのみ。更に換言すれは、優勢の地位を占めて、心手一致し、夫れから夫れと、行き渉るに在り、然るに胸算、既に立つも、精神の沈着せさる者は、心迫り、氣逼り、却て已れ自ら惑ひを生し、懸るかと見れは、待つ色あり、待つかと見れは、懸る色あり、遂に疑惑の爲めに、調子に乘せらるゝを知りなから、調子に乘つて敗す、故に氣を練り、懸を据へ、調子に乘せられさるの、修行を專一とす。

却説、敵の虚は、多く取組む始めと、離れ際とに在り。彼我共に施術適當と思料する頃ろには、互ひに油斷なくして間隙なし。故に取組む途端に、敵の足の未た定まらさるを捕つへし。術歌に心ろをは廣く大きく張く持ち氣氣みちみち先取るそよしと云ふ所ろ、即ち是れなり。

亂取りは、成るへく敵をして、我か襟袖を取らしめさるを要す。既に之を取らるれは、之を振き離し、実き離し、直ちに施術すへし。若し確實に襟袖を取られたるときは。何

處迄も、待て敵の足の動く途端を捕つへし。又た之れに反して、我れより懸るにも、我か兩足に注意して、後ちに懸るへし。而して敵の心ろ倦みて、他に移らんとする、心ろの動く途端を見て、仕懸くへし。總べて何等の機會なきに、仕懸るは無理なりとす。

但し仕懸るにも、眞實決心して仕懸るものと、挑み誘ふか爲めに、仕懸るとあり。一概には定むへからすと雖とも、左まて見定めたる理由もなきに、屢々手出するは、失敗の基ひなりとす。

特に逃すへからさる好機會は、敵が兩足の狹縮なる面積上に乘りたるとき。又は兩足の跨がり過きたるとき。或は押し來るとき。等是れなり。

要するに懸待は、其の待を三分の二とし、其の懸を三分の一とす。若し此の比例を失ひ、待に過くれは、猶豫に陷いり。懸に過くれは、無謀に陷いるへし。而して待を三分の二に、懸を三分の一に、比例すと雖とも、亦た懸待は、終始心裡に離るへからす。術歌に懸るにも待を忘れと待間にも懸る心ろを忘れさりきと調す、以て懸待の要領を知れ。

第七章　順彼制勝

凡そ順彼と云へるは、彼れにしたがひて、彼れの力を借り、以て勝を制するの謂ひなり。夫れ立合ひの始めや、敵の意向は、驕るか、待つか、未た輙く知るへからす。故に吾か身は、敵に打呉れて、思ひなく、巧みもあらですらすらと、吾が身を扱ひ居る内に、敵の意向は、自然に顕はれ來るへし。其の顕はるゝに、順ひて轉化し。先に先を懸け、裏に裏を施す、是れ順彼制勝の術なり。然るに敵の意向は、未た顕はれさるに、我れより生中に手出するが故に、順彼制勝の術に戻て敗す。術歌に敵こそは獅子奮迅ふ怒るとも吾か身やわらに心ろ鍬鍵と云ふ、要領を履行して、精神を沈着すへし。尤も錬磨の功を積ひにわらされは、敵に釣り出され易きものなり。然れとも、双方共に錬磨の功を、積みたる者に至ては、唯だ精神を沈着し、擧動も落ち付きたる者の。勝と見て大早計ならす。故に上達する丈けに、捗とり遲し。但た故意に、捗とりを遲くすへからす、故意に、捗とりを遲からしめんと欲する者は、間脫けするを措ろはんとし、種々様々の囈を交へて、聞き苦しきものなれは、遲速は自然の成り行きに打任せ。何等の言語をも交ゆへからす、尚は一時間に平均したる、遲速を知らんと欲せは、敢箕第一篇第十六章を見るへし。

し。

第八章　決心

夫れ、金翅鳥王と云ひ、蕃面不容疑と云ふ、是れ皆な、決心克きの謂ひなり。

金翅は、當初に精察し、事を苟しくもせす、一旦其の意を了すれは、決斷流るゝが如くなるを云ひ。蕃は眼ましろかす、一面ふらす、一心亂さす、決心最も克きを云ふ。

人は決心惡しきが故に、離れたる技をなす能はす、偶々決心の克き者あれは、技の熟せぬか、敵の掛らぬか、何にかに不足ありて、充分なる能はさるなり。

宙回へりの如きも、決心と踏切りの作用に在り。猶は、鳥は翼の作用に依て、翔飛すと雖も、地を離れんとする時は、必らす兩足を縮めて彈ねあがる、其の証には、鳥の足を縮れは、地に羽敷きする迄にて、飛ひ立つ能はす、飛魚も鰹然として尾を曲けたるまゝ、飛ひ上るを以て知るへし。故に決心は、彈ねる、拋ける、と云ふ如き働らきを爲す、主動者たり、指揮官たり。

奈何なる精兵も、精兵のみにて、勝利は得へきものにわらす。必らす之を指揮する者の

決心に依て、始めて鋭利なるへし。然らは、何等の機會に於けるも、之を行ふに決心乏しく、或は躊躇し、或は不純氣なる如きは、皆な其の利を鈍ふうし、其の機を失ふへし。見の故に始めを慎重することは、金翅の如くし、以て機茲そと、見切りたる時は、躍而不容疑と云ふ、決心なくんはあらす。之を要するに、仕懸るも、仕け懸けられ應し返へすも、決心最も克くして、決行速力最も瞬速なる者に、勝利は歸すへし。真剣は、勿論平生の試合ひと雖とも、勁敵に對しては、必らす已れの最も熟練したる、得手の技にあらされは、克つ能はす。畢竟、我が得々たる得手の技は、極めて純氣に決心し、極めて瞬速に決行するか故に、敵に於て、之を防くに遑まあらされはなり。

術歌に氣や至る技や鋭とく身や迫る習ひし性を嗜た克ちにけりと云ふ、即ち真剣は、平生に習熟して、心手自然の性を成せる者、獨り能く其功を奏するは、古來の格言たり。

第九章　矢富曳

失れ、一聲以て決心を鋭とくし、以て敵膽を拉く。術歌に矢と懸る雷とたへつ曳と切る烈しき聲は敵を拉けりと、訓して、勁健なる活音を嘉奬し來れり。（矢は開口首にやあに響くいーやー又はやいな

（とゝひびくかな嬢へり）

凡そ、亂取試合の際に、審判上に於て、偶然、無意の僥倖か、抑々無念無想の所爲かを判斷するに、掛け聲の有無を以てすることあり、猶ほ劍術試合に於けるが如し。然るに或流は、默然嘿々悠長の體を裝ひ、靜かなる所ろに、何にかの意味ある如く、容體ぶると雖とも、熟察し來れは、其の流の創業者が、吃訥若しくは低聲なる等より、後進者は殊勝にも、斯の如くせさるへからさる如く、思ひなすこともあり、又た我か決心せし通りに、出來ぬ場合ひもあり、遂に禪家が、手を舉けて、月を指せは、人は其の月を見ずして、唯た其の手を見ると、嘆嗟せしと一般に、誤了亦多し。勿論初心は恥しがりて、聲出ぬ者なり。熟練すれは、精神沈着して、如何なる場合ひに處するも、敢て臆せす、迫らす、悠々として餘裕あり、故に事に臨みて、必らす活音を發す。之れに反して、膽寒はれ、氣呑まれたる者は、鈍ふし。故に人の音聲は、必氣の脈なり、壁を隔てゝ、之を鑑診するも、其の人の精神氣力の、充分不充分、及ひ、技倆の熟練不熟練は、分明なるものとす。

第十章　分任心妙

夫れ、分任とは、分業なり。一身の上に於て、一心は配り様にて、如何にも分割し得らるゝ道理を云ふ。彼の千手觀音は、心を千手に、分ち配るか故に、千本が千本の働らきをなせり。若し一本の手に、心ろ行き切りになれは、九百九十九本は、遊手となつて、用をなす能はさるなり。故に手は手に任し、足は足に任して、而して一身總體の所ろは、一身總體に任すへし。斯の如く公平にして、我か心ろの明かに治り居る時は、天地神明、物と推し移りて、物に滯滯せす、夫れから、夫れと、心ろ廣く行き届きて、轉變自在なり。

演習中に、誤つて關節を脱臼することなきにあらす、一たび脱臼すれは、再たび之を脱臼せしめすと思ふ、一念其の局部に傾注するが故に、復た輙く脱臼す。之を矯るに、捻紙の類を患部へ約し置けは、患部防禦の注意は、患部其の者に、任するの道理あるを以て、全心は廣く行き渡りて、更に一局部に偏頗せさるなり、故に復た脱臼することなし。是れ符呪にはあらす、全く分任の道理ありて存す。畢竟内に顧みて疚しき所ろなく、外

に備へて缺くる所ろなく、無念無想なれはなり。是を以て、分任心妙の深味を知るへし。

却説、分任心妙を約言すれは、睡眠中に痒き所ろに、手の届く如く、三度の食事に、箸を取て、何に心ろなく口に入れて、鼻なとを突く者もなき如く、心手自然の働らきをなするの、是れなり。

第十一章　名人慣事

夫れ、名人は、事を慣しひものなり。之れか裡面より云へは、事を苟しくもせさる所ろ、名人たる素養のある所ろなり。獅子は、氣猛き者なれとも、冬蟲を取り喰ふに、尚は勁敵に向ふ如く、牙を噬み、身搏へをなすと云ふ、人若し我れより小腕の者なりと、侮つて何程の事やあらんなとゝ、呑み込み過て油斷すれは、忽ち意外の敗を取るへし。証に小兒を侮とる心ろある者は、鬼神を恐るゝ心ろある者なりと、云へり。尉繚子も、慣は小を恐るゝに在り、智は大を治るに在りと云ふ。今主旨に、試合ひぜんとするに際し、同士凛然として、知らす識らす顫慄するに至る者あり、之を武者の勇震ひと稱美せり。

畢竟、事を慎ひの餘に出て、夏尙は寒きが如く、寒からさるに、慄する必ろ持なり。此の時は、必らす克勝を得へし。汗の出るに從ひ、氣舒ひて陽々とし、我れを忘れ、敵を忘れ、眞の無念無想となる、其の勝敗の如きは、頓と意に介せす、唯た壯に、唯た快に、是れ覺ふのみ。剛士登場の頃ろ、勇震する程にあらされは、進歩せさるのみならす、常に人を侮とりて、常に敗すへし。莊子も曰く、巧を以て力を鬪はす者は、陽に始り、常に陰に卒る、泰至るときは奇巧多しと。此に云ふ泰は、甚たしきの謂ひにして、至は過るの謂ひなり。奇巧は、失敗の基ひと知るへし。故に勇震ひする程にあらされは、所謂奇巧多くして必敗すへし。

武者の勇震ひに次て、何度となく放尿したき心持ちあるへし。古來試合大會に於て、顚動放尿等は、名人の素ありと稱し來れり。

大岡越前守は、百を二つに割れは、何程になるやと、算家野田文蘭に問はれしに、文蘭は、算盤に二一天作と置き、五十にて候と答へしかは、越前守は、案を拍て感歎し、曰く、三歳の小兒も知りたる事を、算盤にて答へしは、事を堅くして、輕んせさる所ろ、適れなる名人哉と。稱美せしと云ふ、何事に就ても、人に抽んする者は、人の及はさる所ろの、注意ある者なるを知るに足らん。

アルナルヘルプ曰く、人に教育を加んと欲せは、須らく先つ主として、其の思想を緻密ならしむへし。思想苟しくも緻密ならは、其の他の教育方法如何を問はすと、旨ある哉。

人は、常に思想緻密にし、善く注意工夫せすんはあらさるなり。然れとも試合ひは活機なり、餘り重念に失すへからす。是れ劍撲は、業を先にし、理を後にする所以なり。之を例せは、晴れなる試合ひに臨みて、某に克ちを得さしめんと欲すれは、諷して甲は乙より強かるへしと、揚言する迄にて足れり。然るときは、乙某は必死になりて、必らす克ちを得へし。吳子の所謂生を欲すれは死す、死を必すれは生る、の道理あつて存す。

第十二章　九觀

古來やわらの道を學ふ者は、早晩禪諦に通曉するを要せり。然れとも禪門に入る如きは、一般諸士に望ひへきものにあらす。茲に古師の意手に成る、九觀は、禪

味ふ比して說き來れり。之を詳かにせんとすれは、大冊をなさゝるを得す、之を省畧すれは、半解にして益なし。是を以てやわらの九觀は、先つ斯の如きものなりと云ふ、初步に於て摘記せんとす。

九觀の初步を摘記するに先たち、正成及ひ時宗の禪に通せしことを示さん。夫れ楠正成朝臣は、淺川に戰死するの前日に、廣嚴寺に入て明極楚俊禪師に見へ、問ふ生死交謝之時如何と。是れ生を謝して死に入る時如何用心すへきやと問へるなり。禪師曰く兩頭俱截斷一劍倚天寒と。是れ一劍閃電を振ふ時は、生も截斷し、死も截斷し、唯た一劍の電光のみ、蒼天蓋地なりとの答示なり。朝臣は此の答示に依りて、豁然悟る所ろありしも、尙ほ語脉裡を撥轉する能はす。更に進て曰く、畢竟如何と。禪師震威喝一喝す。是に於て朝臣通身流汗す。禪師曰く汝徹せりと。是れ朝臣の生死に於て、決定する所ろあるを證明せるなり。朝臣曰く、若し來て和尙に見へすんは、安んそ向上の關捩を超出することを得んや。禪師曰く、公の問對は、古參の者に下らす、曾て他の禪匠に見へ來れることありやと。朝臣曰く

昔日南都に遊ふ、途に一禪者に逢ふ、行くゆく語つて談論快活なり、仍て心要を聽かんと請ふ。禪者曰く名は何そと。曰く正成と。禪者さらに正成と呼ふ。予應諾す。禪者曰く是れ何そと。予時に脫然として契悟する所ろあり、招きて家に請し、總懃に教を受く、爾來戰に臨み、兵を用ゆること、自在なるを覺ふと。又た北條時宗は、元寇の我か筑紫を襲ふや、軍裝して禪師に見へ、曰く大事到來如何用心と。禪師曰く葛直進前而已矣と。時宗震威喝一喝す禪師曰く眞獅子兒能哮吼すと。時宗拜謝して出つ。是れ時宗の爲めに劈腹剜心の答示なれはなり。凡そ事に處するもの、葛直進前の氣概なかるへからす。況んや軍事の機要に於けるをや、大事に臨んて、生死に屈托すれは、葛直進前にあらす。自他を回顧すれは、葛直進前にあらす。念想分別に涉れば、葛直進前にあらさるなり。

一儀則

是れ、ノリと訓して行儀作法を云ふ。又た儀は、威儀の儀にて、劍劇のタイを云ふ。

凡そ、心氣を修練するには、先つ己れが肢体骨節行儀作法の正しく、法則の立つ所

より、其の外の形ちに連れて、自ら内も整ふことは、天地自然の道理なり。所謂儀則は、儒にては、清座と云ひ。佛にては、結跏趺座と云ふ。結跏趺座は、右の足甲を左股の上に揚け、左の足甲を右股の上に揚け、蟻の戸渡りを疊に附着せしむる是れなり。

我かやわらの儀則は、本朝の行儀の通りにして、兩足の大趾指の爪と爪とを突き合せる位ひに座し。尻を足の裏にて抱く心ろ持なれは、蟻の戸渡り疊に附着す。其の兩膝は、一盃に拔らき。兩手は、臍の下へ印を結び。頂骨より尾骶骨に至る、二十六個の椎骨少しも歪かます、ひつます、すつと胸を張り、鼻より下垂して臍と同し通りになる如ぐし、觀すれは、自然に心氣備はれり。

我かやわら服を、附け帶ひにし褊襟を綴り閉つるは、儀則の體勢に慣習せしむるか爲めなり。若し之を窮屈なりとする者は、未た儀則の要領を得さるものなり。但し町道場などにては、亂取服とて、褌寛博にして蠻衣に似たり、蠻衣を着すれは、心意も蠻人に似ると云ふ。故に我かやわらの儀則は、外部より整頓して、中心至高の觀念を發揮せしむるに在り。凡そ達觀すれは、尊ひへきものは、形而上に屬する心術の存養のみ。氣韻の保持のみ。形而下に於ける、又た何にかあらん。然れとも普通其の瞻仰敬服の觀念を、惹く所以のものは、先つ有形的容儀言語の如何に據て、之を決す。豈に思はさるへけんや。

二　實腹

是れ、氣を練り出す大本にして、老子亦實其腹虛其心と云へり。禪にては、息をフゥと吐けは、自然と腹下に力を覺ゆ、其の力を次第に修用して、充實ならしむれは無念無想となる。然るにやわらの道は、活氣發勢を根本とする道なれは、禪とは少しく表裏にして、一息一盃に、臍下に呑み込み、氣海丹田を充實ならしむ。是れ息を吹き出すと、吸ひ込むの差はあれとも、其の腹を實にし、其の心を虛にし、無念無想なるに至ては、其の樞必らす一なり。但し投けられて、腹の鳴る如きは、腹力のの脫けたる證とす。

三　融和

是れ、はぐれやわらくと云ふ義にて、何事にても不馴染の業には、凝り硬ゑり出て、少しも手に入らす、其の凝り硬ゑりの爲めに、天生の器用と

閉塞して、得手不得手判然相隔つるなり。然るに儀則の正しく素直なる所ろより善く實腹虛心なるときは、聊かも不馴染なることなし。武藝に達したる者が、高藝に渉つて、何處にか微妙き所ろあるは、本業に立歸て、肢體心氣の融和を應用すれバなり。

四 盈滿

是れ、盈ち滿つるにて、肢體の融和を得たる以上は、毛髮よりに爪先きにまで活氣盈滿して、天地一盃に充塞す。故に自ら精神沈着して、心氣を純にす。併しなから、耳にて聞き、目にて見るやうにては、未た心意轉々するか故に、缺ける所ろあるへし。

五 識心

是れ、吾か心にて、吾か心を識るの謂なり。禪は、さとりを尊ひ、智識とは稱せり。然り道義内に積めは、英華外に顯はれ。德性内に修むれは、氣韵外に高し。道士の風骨自ら俗を拔く所以茲に在り。

六 無住

是れ、其の觀想を住止すれは、本來の妙用を閉塞するに依り、幾千萬の中に往くも、晴れなる大試合に臨むも、念慮に渉らす。勝負に臨めハ、先々之先と心ろ掛け、左右へ開くも、後へ退くにも、氣を覆ひ懸けて、住まるなと云ふ義なり。歌にとまるなと思ふ心ろはとまるなれとまるな行くな行くなとまるな、と云ひ無念無想を謂へり。

七 眞空

是れ、晴れたる空を見て合點すへし。一旦雲霧に蔽はるゝに及んては、人間忽ち暗黑界に迷ふと雖とも、之を凌き通して見れは、日月は、毎も晴朗として吾人を照らせり。左れは世人か物の曲折に依り、瑣末の事より不平を起し、生涯の桑蓬を自棄する等は、忍耐力の乏しきのみならす、慾情の域を脫出して、眞樂生死の上に、超然たる能はさるの致す所ろなり。歌に雲霧は唯た宙空の轉變と上は常住澄める日月と、云ふ眞空を味ふへし。又た、晴れてよし曇りてもよし不二の山元の姿はかわらさりけりとも云へり。

八 妙用

是れ、たへなる所ろにして、其の應用は、吾れも知らす、人も知らす、心手自然の自然なる所ろを云ふ。熟練して玆に達すれは、復た元に歸つて、聊か念が入り、情が起りても、妙用を害せす。是を以て德は得なり。已れに得す

んは、徳と稱すへからす。妙も亦た已れに得すんは、妙ならす。故に修業錬磨して、之を得れは爲す所ろ妙ならさるはなし。歌に嗜と功上手と三つくらぶれは嗜きこそ物の妙に上手そ、と云ふ以て妙を知れ。

九　圓相

是れ、圓滿自在の地位なり。之を云へた言葉に惰し、之を書けた文字に澁し、盈滿迄は、言語文字も屆くに似たれとも、識心以上は、胸と胸とに於て許可をなす所ろなり、敢て言語文字の及ふ所ろにあらす。歌に聞みの夜に鳴ぬ鳥の聲聞かは生れぬ先のちゝの戀しさ、と云ふ玄は玄なり、言語文字の及ふ所ろにあらさるも、亦た瞭了して可なり。

古賢アリストートルは、眞理の爲めには、肉を殺け、血を洩け、吾聲の職分なり。故に親友は、愛せさるにあらすと雖とも、此の眞理を愛するは、親友を愛するより甚たしと云へり。

又た昔し亞典國の演武場は、國民の少年絶へす出入せる所ろにして、實に又た哲學と美術との本圓なりし。角力せし者は、浴湯して其の體力を恢復するの後ち、行きてソクラット及ひデモステーヌの尊尚なる教を學へり。故に希臘の歴史は、滿卷悉く赫々たる武勲、及ひ不朽なる勝利を以て、滿たされたりと云ふ。我か尚武國の少年即ち天下有爲の學生は、必らす旗れを勉むへし。圓相の觀念も、亦た其の中に在り。但し體驗に當て、本體を認めす。徒らに枝葉上に奔るを、古人は空鐺を煮ると戒む。孟子も學問の道は他なし、放心を求るのみと云へり。自已の良知反省を猛にせすんはあらさるなり。

第十三章　天道不爭而勝

凡そ、九觀を會得し來れは、目に見るの早きにもあらす、耳に聞くの速かなるにもあらす、靈魂疾く之を感得す。故に變を見て而して防き、隙きを見て而して搏つ如き、迂をなさす、無形無聲の間に勝を制す。隨て我か心を以て、敵の心を塞き。我か氣を以て、敵の氣を壓ふ。故に敵は、先を越す能はすして、釣り出され。敵は、平地を行く能はすして、高きに向はされ。常に疑惑生して、早く呼吸迫り、早く氣力盡きるに至る。是れ、天道の爭ふへからさる所ろなりとす。

天道は爭はずして而して勝つとは、是れ直なれは、勝つと云ふ義なり。蓋し天道は、萬物の自然を云ふ。即ち我れに敵懸けたる修業自然の功あれは、我れに必らす自然の勝あり。我れに修業不足の過あれは、我れに必らす自然の負けあり。是れ優勝劣敗とも云ふへき、自然の數にして、俄かに如何とも、爲し難き所ろなりとす。

又た、我れに敵懸けたる修業自然の功あれは、逸して而して勞を待つの德あり、逸して而して勞を待つとは、兵語に聞き慣れて、左迄の深味なきか如しと雖とも、實際試合の上に於て、逸して而して勞を待つとは、錬磨の功を積むにあらされは、善く之を爲す能はさる所ろなり。

夫れ、錬磨の功を積みたる者は、愈々爭ひの長さに渉り、愈々奮ひ。益々戰ひの激するに隨ひ、益々技倆を顯はす。是れ逸して而して勞を待つに、餘裕あれとあり。若し未た錬磨に、不足ある者は、持久對抗する能はさるなり。乃ち初心若しくは中絶せし者の癖として、當初は鋭氣頗ふる風發して、其の勢ひ猛烈なるも、二三回賺さるれは、氣魂忽ち衰へ、呼吸忽ち急き、忤は引き込み、拳は出でず、逸せんと欲して、逸する能はす、

強ひて逸せんとすれは忽ち敗す。

要するに、我れに敵懸けたる修業自然の功ある者は、優勢の地位を占めて、精神を沈着し。以て敵の來鋭を避け、或は披らきて之を賺し、或は曳くに付けて之を脫け、意中窃かに、敵を弄ひする心ろ持ちにし、好機は茲と見切て、捨身に彈ね、當流特得の技倆を顯はし、其の他は之を補ひ、之を導く迄にし。若し亦た敵に先んせらるれは、後之先にて勝を制す。然るときは、敵は、自ら氣張り合ひも失ひ、屈托も生し、遂に何程迫るも駄目なりと悄歸になる。是に於て、更らに復た眞横捨身なり、大小く字なり、意表に出てゝ、技倆を逞ふす。敵は、悄歸を回復せんと欲して、故らに勇を皷し氣を張り、回復を謀れは、謀る程に、故意に渉つて、我か待つ所ろの術中に陷いるへし。嗚呼、天道不爭而勝とは旨ある哉矣。

第十四章　增信保信

凡そ、威力を逸ふするは、威信を增す所以の手段なり。然れとも敵をして心服せしひるには、未たし。故に飽迄も技倆を闘はし、七擒七縱して、眞心服從せしめすれはあらさ

るなり。

併しながら、增信の要領は簡單なり。夫れ事を容易にせず、又た半途にせず、一たび我れより仕懸けたる事は、頑固一徹何處迄も、必貫するを要するのみ。此慣習を固有すれは、成信の餘光として、未た充分に懸けさるも、早や既に敵は慄倒するに至るへし。夫れ、保信は前項に反して、稍々繁雜に渉るも、亦た約言すれは、負を釀つて成信を保つに在り。是れ他なし、敵に仕懸けられ、到底避け得へからすと思慮せは、早く見切つて負け吝みがましく爭はす、冷淡至極に見せて、敢て爲さるの風を裝ひ、吾れ好んて反動を取るか爲めに拋けられたる如く、美事に反動を取り、活音に降參すと叫ひ、却て敵を褒めて遣るへし。然るときには、敵に於て眞に勝ちなからも、却て眞に勝ちたりとは思はす、何にか爲めにする所ろあるへしと、種々の妄想を起し、疑惑を抱くとも、結局眞に勝ちたりとは自信せさるなり。

却説、術語に期を知るを要すと題して、早き期を知り、遲き期を知り、逃るゝ期を知り、逃れさる期を知り、其の期に處するは、武士道に於ける練體柔術の、主眼たりと云へり。

日新齋の詠歌にのがるまじところ愛て思ひ切れ時そ至りて涼しかるへし、と云ふ。實に楠廷尉の湊川に於けるは、全く、のがるまじ所ろを愛て思ひ切りし、故に大節に臨み從容として義に就けり。我々が、學問するも、武藝するも、皆な之れか爲めなり。

所謂期を知るには、のかれる期を知りて、逃れる場合ひあるへし。のがれさる期を知て、逃れさる所ろ、大節なり。曾子も曰く、大節に臨み而して奪ふへからす、君子人乎君子人也と。君子は、法を行ひ、命を俟つのみ。造次顚沛の間も、茲に於てす。武士道に於ける練體柔術の本領は、既に立ちたりと謂ふへし。若し大節に奪はれ、最期に未練ありては、武士道に於ける練體柔術の本領は、決して立たさるなり。然らは、之を立るものは、何そ曰く信是れなり。勝敗は運に在り、生死は命に在り、丈夫信なくんそ、亦た何をか爲さむ。

夫れ、此れ等の高尙なる要領を、平生に研窮し、以て試合ひに應用するは、吾れ柔道を以て、天下を治むと云へる、類の牽强附會にあらすして、最も嘉奬すへき所ろなり。隨て他流試合を禁絕し、俗流亂取を擯斥し、以て一流一派立てゝ、貫く所ろなくんはあら

す。關口澁川諸流も玆に見る所ろありて、他流試合を禁せしものなりしが、澆季の今日は、俗流亂取に化し去りしか如し、當流は、微頭微尾必貫する所ろ武士道に於ける練體柔術の、本領を發揮するに在り。故に他流人は、他用を以て出入するさへも拒絶せり。但し、玆に保信の手段として、昔日回國武者修行に出る者の、秘訣を述ふるは、無用の業にあらさるへし。取て以て、同流試合の上に用ひて可なり。先つ何れの道場と雖とも、回國武者修行の到るときは、其の技倆を見屈ん爲めに、目錄約束位ひの者を、棄物として試合ひせしひへし。此の時に、回國武者修行其の者は、僞つて目錄約束位ひに見せて、危ふくも僅か一本丈け勝ち殘る。滿場之を見て、是れでも回國者歟と、笑はん計りに侮とり。目錄の者出て、試合ひす、又た辛ふして漸く一本丈け勝ち殘る。滿場之を見て、回國者の僥倖となし、尙ほ乘り氣になつて、吾も吾もと競ひ出つ、回國者は、相手相應の手心ろを以て、皆な一二本つゝ勝ち殘り、次第々々に上級に向ふに隨ひ、蟄龍奮飛捨身に彈れ、慄悍慓憤く字に拋け、勢ひ天を震はし、地を動かすが如し、而して汗は滿身に溢れて、拭ふに遑さあらすと雖とも、呼吸は平緩たり、心氣は泰然たり。是に至ては、

滿場唯た茫として聲なく、當初の意氣は頗ふる挫折し、當初輕侮せし反對に、鬼神視するに至る。世に名人と稱せらるゝ者は、概ね斯の如き、手段を遂ふし得たるものと知るへし。若し、始めより强くは、强しと云ふ迄にて、人の感歎を惹くに足らすと雖とも、始めは處女の如く、終りは脫兎の如く、意表に出る時は、怡も敵は、兜の緩みたるを、打たるゝ心地すへし。

第十五章　審判

審判定義は、第一篇に掲けたり、左に其の表を示す。

一	捨身	我身を捨てゝ敵を制するもの 横斜横轉等總て捨身の類	十點	全上稍々不充分	九點
二	く字	我腰を利せて敵を制するもの 大腰背負絹搦見雲內股の類	八點	全上稍々不充分	七點
三	掬足	我足にて敵を制するもの 掬ひ拂ひ掛け掬ひ戻しの類	六點	全上稍々不充分	五點
四	雜技	前三項外の種々なる手を云ふ 又は他流の輕佻なる技風の類	四點	全上稍々不充分	三點
五	組打	裂裟固胸刺切主門咽喉かための類 又は組敷かれて一分許を過くる者	二點	全上彈れ返へす毎に	一點

凡そ、勝つも勝つへき、理由あるにあらされは、虚喪なり。負くるも負くるの、止むを得さるに出れは、耻辱にあらす。勝敗は兵家の常なり、試合ひは日々の稽古なり、勝つて跨らす、負けて悔ひす、人の技は、輕くも重く受け、己れの技は、重くも輕く卑下して、中心には勇猛人を呑む、是れ丈夫の所爲たり。抑々丈夫たる者、一勝驕慢し、一敗落膽する如き、卑劣の者ならんや。術歩に負けてこそ眞の克もさとりなん勝ちて驕るな負けて耻るなと、訓せり。負けてこそ眞の克ちもさとりなんとは、負くれは更らに一層の熱心を以て、工夫を凝らすへきを云ふ。

夫れ、機會の仕懸くへきに、仕懸るは、假令へ結果を得さるにもせよ、技倆は既に備はりたるものなり。之れに反して、機會の仕懸くへからさるに、仕懸るは、假令へ結果を得たるにもせよ、無理なり。又た保信の手段を取て、負を讓るへきに、讓らさるは、假令へ抗拒し得たるにもせよ、諦觀は未たなり。是れ等を見て、以て技倆の優劣は、判然たるものなり。但た勝つた負けたと云ふ如きは、僅かに奬勵の一助たるに過きさるものなり。

却説、試合ひは抛けを專らにすへし。昔は甲冑の敵を組み敷き十々滅を刺す、最後の必要に依り、虚んに組打を行ひしが、今は生理上より、之を減却せさるへからさるに至れり。何となれは、組打は、互ひに上へを下へと揉み合ひ、腹にて彈ねつ彈ねられつ、腹力を激張するか故に、或は膈管を害し。又は烈しく咽喉を締めて、窒息を致し、尤も袈裟かためを脱けんとして、耳瘤を生する等の憂ひあり。耳瘤は、矮小なる者に釀し易しとす。彼の相撲取りも、比較的に矮小なる者に耳瘤は多しとす。要するに、我々が武士道に於ける練體柔術は、抛けのみにて足れり、是れ組打を貳點とする所以なり。平生は、組打を行はす、遇々練れ、搦み、倒れたるとき組打を命することあり。而して組打は、組み敷かれて、六十秒を經過すると、思惟するときは、認定法に依て、勝敗を決すへし。之を詳言すれは、時間の經過より、寧ろ氣力の如何を見て、決するに在り。

一、何種の技たるを問はす、抛けられたる者善く猶回へりし起るときは、之を抛けたる者へは、稍々不充分なる點數を與ふ。又た應し返しは捨身と同一の點數を與へて嘉奬す。

一　抛げは、綾を切て投げ放つを第一とし。綾を切らす投げ逐るを次とす。而して投げ逐るとは、投げ逐るにあらずして、敵に曳き付けらるゝことを、分ち。充分不充分の點數を與ふ。

三　横捨身を掛けしにあらずして共倒れし、又た力餘りて倒れる者等は、無意の所爲なるを以て無効とす。此れ等の場合ひに「組み打ち」と命令するを例とす。

四　決勝點數を拾五點と定め決勝點數に先登したる者を優勝とす

五　源平試合ひの勝殘り法も此の決勝點數法を以てす又た總得點を以て兩軍の優劣を決す

六　點數は、點數表に規定すと雖とも、地位及ひ年齢等に關して斟酌せさるへからす。即ち此の人にして、此の功をなす奇特なりと、感賞する場合ひ。例せは壯者が幼者を抛けたりとて、左迄に喝采を得さるのみならす、或は無理なるを咎められんとす、然るに幼者が壯者を抛けたらんには、大喝采を得へし。故に甲と丙との差ある者にして、丙か甲を抛けたるときは、乙が甲を抛けたる手際と、同一なるも、丙に充分の點數を與ることあり。之れに反して、甲か丙を抛けたるときは、乙が丙を抛けたる手際と同一なるも、甲には稍々不充分の點を與ることありとす。

七　大試驗は、先進五人に勝殘るを以て、大試驗及第者とす。尤も受驗者は、其の先進者に依りては、恭の目を置く如くし、平均を得さしむへし。例せは、受驗者へ、先進者壱二十一條乃至二十四條なれは、貳點を置き。仝二十五條乃至二十七條なれは、四點を置き。仝二十八條乃至二十九條なれは、六點を置き。而して決勝點數十五點に、先登するを以て、勝敗を決す。

第十六章　振氣流練體柔術基本

夫れ、當流は形を以て主とす。而して制勝の氣、進退の、度奇正の變、應用の術、一に皆な、敢めて形の中に在りと、體意に云ひし如く、然り。故に形より學ひし者は、其の固備自在なるや、敵の亂取より習ひし者の比にあらす。但た、書は以て馬を御すへからす、之を活用するの功は、熟練に在て、之を運用するの妙は、人に存す。此の故に基本より學ふは、正則なり。亂取より習ふは、變則なり。其の上達期に至て、得失大差違あり。之

を例せば、甲乙兩名相約して、同時に甲は正則に入り、乙は變則に入り、各均しく修業して、一ヶ年目に比較せんに、甲は乙に劣るべし。之を二ヶ年目に於てするも、尙ほ甲は乙に及はさるべし。之を三ヶ年目に於て試合ひせば、甲は、少なくも乙の五年以上、修業したる技倆に均としき、技倆を備へ。乙は、漸く三ヶ年丈けの働らきに過きすして、いつも生々敷く、未た甲の如く圓滿自在なる能はさるなり。是に於て、甲は、乙に對し、所謂、天道不爭而勝の上位を占ひ。是れより加倍法に依り、四ヶ年目に至れは、六七年の技倆を備へ、五ヶ年目に至れは、十年餘の技倆を備ふ、乙の企て及ふ所ろにあらさるなり。是れ即ち當流は、形を以て技を敎へ、技を以て體を練り、體を以て氣を修め、氣を以て勇を養ふ所以なり。

但し、傍ら亂取を交へるは、正變一擧兩得の便法のみ。故に、形を措て、亂取のみ、演習するを禁す。且つ、白帶生は、黑帶位の敵手たるときにあらされは、亂取の稽古を許さす。

亂取は、黑帶位に於て、大小强弱の取振ひ、臨機應變の練り廻はしに、誤り顚つくことなき樣に、油斷を戒しめ、且つ、白帶生をして少しく脇指に力を入れ、中心點に注意させて、押しつ曳きつする機會に、眞捨身の辷り込ひと、脇骨を彈ね、曳くと、三呼吸一致の具合ひを會得せしひる樣に、之を反復し。次に、く字と掴ひ足は、敵手より仕懸けて、武士に際疾く應し返へす、技に熟せしひる樣に、夫れ夫れ說明を與へて、注意を促かし、稽古せしひへし。

問ふ、正變兩則の差違は、知了せり。玆に長大の人と、矮小の人と、同日に入門して、以て三四年後の勝負は、如何や。答ふ、長大は、多幸なり。然れとも、力を恃み、技に鈍ふき、短所なきにあらす、故に意外の敗も多しとす。矮小は、不幸なり。然れも、機智敏捷に虛實表裏の技を運ふし、滑脫奇變に、鋭鋒を避けて惰歸を搏つ、故に意表の勝も少なしとせす。畢竟得失は、機敏と熟練とに在り。尤も長大にして、機敏と熟練とを併有せば、是れそ鬼に鐵棒を與ふる如くなるへし。今ま玆に小說に似たるも、一讀の價値あるを以て、抄して參考に供す。

彼の海我東藏となん呼へる人は、秋月の藩士にて、柔らの達人ありしとそ。其の驅

幹は、短にして之を見れは、衣にだも勝へさるものゝ如く、哀れ男一匹の數に入るへくは覺へさりけり。或る時東藏が用事ありて田舍に往き、夜ふけて歸りしま、但或森林を過る折りしも、一人の大男躍り出てゝ立塞り、金を渡せと、脅嚇しけるに、東藏は、呵々と打笑ひ、好しや泥中に拋棄つへき、金ありとも、汝等に施すへき金はなしと云ひけれは、彼の大男は、赫として口の横に裂けるまゝ、言へる言はるゝ廣言哉、好し其の儀ならは、先つ汝の命ちより取り得さすへしとて、東藏の帶際を取るより、早く輕々と目よりも、高く差上げゝり。東藏は、尙は悠然として差上げられなから、咄此の城下に在りて、海我東藏を知らさるかと叫ひけれは、盜人は、斯くと聞きて驚き一方ならすと雖とも、奈何せん、東藏は、睨みて放ては蹴るそ、卸ろさは當身するそと云へるに依り、放つことも卸ろすこともならす、到々、其のまゝ、東藏を城下まて、擔き往き、芝生の上にそつと置き、後をも見すして逃け去りしとかや。又た東藏か、家に暫て出入りの、相撲取りありけるか、或るとき東藏に向ひ、如何に主君か、柔らの術を極めおはせしとて、若し不意に出て、背後

り抱きすくめは、詮術なかるへしと言ひけるに、東藏は、之れに答へて、柔術てふものは、さほかり淺墓なるものにあらす。然れとも汝若し虛言と思はゝ、論より証據。今ま一より後ち、一ヶ月餘りの間は、吾れ夜な夜な出歩くへきに、汝ち如何にもして見よと言ひ聞け置きたり。然れは相撲取りは、遂に來らす、左れは、一時の戯言にてやありしならんとて、其のまゝに止みぬ。然るに、東藏が、太く酒に醉ひ、火鉢に凭りて、うとうとゝ眠を催し居たる所ろへ、彼の相撲取りは、不意に出てゝ、背後より力の限り抱き締めけれは、東藏は、悠然として、今ま一としめと、叫ひしよと見へしが、相撲取りは、二三間彼方に投け飛はされ居たり。是れには、力ら自慢の相撲取も、閉口し、如何なれは、斯く神速なるものにやと、問ひけれは、東藏は、打笑ひつゝ、是れと云ふ譯けはなけれとも、今ま一と締めと、叫ひしとき、汝の手に少しく緩みの出來しかは、其れを利用せし迄なり。武藝の奥意は、總へて斯の如きものそがしと語りしに、相撲取りは、心外に堪へすやありけん、更らに此の度は、正面より神妙に立合はんと乞へり。東藏は、それこそ易きことなり、いざ來

れと立向ひしかは、相撲取は例の金剛力に全力を籠めて、東藏の胸倉を押し來る、東藏は、又々聲を放ちて、今ま一と押しと叫ふに、相撲取りは、勃として何に小癪なと押し懸る、東藏は、得たりと、眞捨身に彈ねて、五六間彼方へ逆脊打ちに拋け棄たり云云。又た昔し或る人は、小天狗を以て、自ら居る。一夕途中に悍馬を見て、其の馬尾に接して過く、危ふくも馬蹄に蹴殺せられたりと、見るまに八九歩先きにひらりと飛び避けたり。高弟等は、之を見て大に歎賞し、師に告くるに事實を以てし、以て皆傳あらんことを請へり。師は以ての外に怒り、曰く斯の如き不心得の者には許し難し、畜生と肥桶は、避けて近つかさるへきものなるに、之を避けさるは無勇なりと、痛く斥けたりと云ふ。

東藏が、相撲取りに於ける、或人が悍馬に於ける、皆な以て角技者流の事なり。角技者流の事は、又た何を堂々たる武夫に取る所ろそ。徒らに此れ等を以て激賞するは、却て堂々たる武道を侮慢するものたるを斥せすんはあらさるなり。

昔し源信齊は、或問に對へて、曰く、武藏は名人なりと、修心齊は、宋廣より進み出て、、唯た今の御答へは、不審に存するなり。門人の嘖らきを明らめさするを名人と云ひ、誘引して達人ならしむるを上手と云ふ。然るに、武藏は左にてはなく、手頃ろの者を打挫き、投け倒し、云ひ倒し、力の剛强に恃む所あり、中々以て上手名人の位ひにあらす、一體武藏は、巖柳か慢損に比すれは、遙かに謙遜あれとも、心直を叩けた、覇者なり、鄉原なりと云ふ。源信齊、殊の外に、此の言を稱美し、斯の如く、武道の本領を得たる人に讓ること本意なれとて、極意及ひ印授を授け、五百の門人も讓り、自身は伊豆の奥山に引籠り、仙境に入りしと云ふ。極意は、求めて得へきもの乎と、疑問の起るも屢々聞く所ろなり。是に於てか、先師は、吾人をして憤悱啓發の精神を喚起するが爲めに、術歌の秘を示し給へり、曰く、極意とて外そに求めな明け暮れに學ひつ習ふ數の積果と、而て、之を銘肝し、以て、朝な、夕な、數懸けて、千返萬返して、復習の功を積めは、極意は自得すへきなり。

振氣流練體柔術初段之形

凡そ初習は先入主となる正邪の岐路なるを以て其の邪辨と矯め正道に導き以て他日の

大成を期すへし而して黒帯位は其の初心へ一通り武士の技を教へるや直に入り替りて
假りに武士となり叮嚀に敵手の技を習はしめ復た入り替て亂取を豫行せしむへし
尤も入り替る時は總へて互に後ろ向きせさる樣に轉回しつゝ跡退りし形は必らす眼を
眼に着して正視し亂取りは先つ敵の足に注目するものとす
夫れ熟練するに從ひ階級を逐ふて相應に抗爭し利不利を研窮して以て一段演練し終れ
は汗滴珠を流す迄に精神一到せすんはあらす但し一本左右の終る毎に元の地位に引分
るゝは早技と混せさるか爲め且つ態度を沈着ならしむるか爲めなりとす最後に目禮を
行ひ挨拶して席に復するも尚は口を結ひ徐ろに鼻息して態度を亂さす須らく九觀儀則
を準守して從容たるへし澳江武科の受驗者が巧みに拳法を演し滿場の人を驚かしたる
も其の終るや否や忙かはしく汗を拭ひ扇を使ひしかは試驗官大喝し曰く汝は用に中ら
す汝が從容の態度なきは武冕の一大敎典なり眞藍足つて一心足らすとは汝の謂ひなり
と痛く擯斥せしと云ふ克已復禮以て武士道に於ける練體柔術の特色を發揮すへし

一　右片手矢筈

二　左右の違ひ

武士進み往く敵手は待て武士の近つきたるとき右手を矢筈にし(矢)武士の喉を張り押
し立る武士は(當)踏止つて反りなから左手にて敵手の右手の寸口を握り右手にて敵手
の右腕の尺澤を握り敵手より尚は强く押し來るを利用し敵手の右腋下を潜り脱け兩足
を入れ替へる敵手は力餘りて上體を前へ傾ける武士は之を羽伏せに押へ付る如くして
(曳)引き付けなから兩手を放つ敵手は(當)右肩にて猫回へりす
右肩猫回へりは右足を踏出し右臂を疊に接し頭を左方へ向け右肩にて回へり左手にて
疊を拍ちて反動を取るへし但し踵にて武士の頰を拍つ要ひあるを以て互に注意を要す
初心へは教官先つ徐かに前の如くし其の右腕を羽伏せに押し付けて右肩猫回へりせし
むへし尤も一回轉して左手にて疊を拍ち反動を取り習はしむるを要す

三　兩手彈ね右羽伏せ

四　左右の違ひ

敵手武士互に進逐ひ敵手より兩手の掌にて(矢)武士の兩乳の上を彈ね掛けて押す武士
は(當)前の右片手矢筈の如く踏止つて反り敵手より充分に押し來る迄は抗して其充分
に押し來る敵手の力を借りて利用する事前の右片手矢筈の如くす敵手亦右肩猫回へり

す

五　右拳突き

敵手武士互に進達ひ敵手(矢)右拳にて武士の鳩尾へ突き懸る武士(當)右足を引披らきつゝ右手を矢筈の如くし敵手の突き來る右拳を己れの右方へ打拂ひつゝ其手首を握りて己れの右腋へ引付け左肩にて敵手の右腕へ(曳)當りて體勢を崩し左手を敵手の右腋下より入れて敵手の首に掛け其左手は向ふへ押し右手は引き多少兩足共引退り敵手を引付けんとし(曳)引放つ敵手(當)右肩猫回へりす

六　左右の違ひ

初心をして敵手たらしむる時は敵官は初本の右片手矢筈の如く稍々初心の右手を疊に付けて左手を押して初心の頭を向ふへ捻り徐ろに右肩猫回へりせしむ(互に隙なつく可なりとす)

七　右後抱き

互に進出づ武士は素早く敵手の右側より後へ廻はり(矢)敵手を抱く敵手(當)腰を割る武士は抱きたる兩手を敵手の兩肩へ掛け右足を引披らきつゝ右方へ(曳)引倒す敵手(當)仰倒猫回へりし立つ武士は復た直に抱き付き左後抱きに移るべし

八　左右の違ひ

初心をして敵手たらしむる時は敵官手を添へて反動を取らしめて後に其手を放つべし

九　右後抱き返し

互に進出づ敵手は武士の右側より後へ廻はり(矢)抱付く武士(當)腰を割り身を沈め兩肘を張る(敵手の抱付きたる兩腕の緩みたる時)武士は右肘尖を敵手の心部へ向け(曳)突く擬勢をなしなから飛違へる敵手(當)兩足の踵跟のみにて小歩に跡退りし仰倒猫回へりし立つ敵手は復た直に抱付くべし但初心敵手たる時は臀部を疊につき右手は伸はして疊を拍ちたるまゝ頭を左肩の方へ傾け後ろへ回へり起るべし

十　左右の違ひ

十一　右拳突き逆倒し

互に進出づ敵手右拳にて(矢)武士の鳩尾へ突き懸る武士(當)飛違へに左足を敵手の右足の外側へ踏込み左手にて掛股を其右手のすロへあてる樣に逆に握りて其右拳を敵手の右耳の邊へ押し上げつゝ右足を敵手の右踵に引掛る樣に其右足の外側へ踏込み右手を敵手の右腋下より入れて敵手の右拳を藏ひ握り(曳)向ふ下へ引放し倒す敵手(當)仰倒猫回へりし立つ初心敵手たる時は敵官は其右拳を握りたるまゝ疊にまて捻り遣る初

十二　左右の違ひ

心は教官にもたれて左手にて反動を取り前の右後抱き返しの如く後ろ回へりし起るへし

十三　兩手取り右拳突き上げ　十四　左右の違ひ

敵手は進て兩手にて(矢)武士の兩手首を握る武士(當)腰を割り殊に眼を眼に對して右肘を下げ右拳を上へ向け(曳)突き離すと同時に右膝を上げて又其右腕を敵手の右手首の上へ卸ろし載せて下へ(曳)押し離すと同時に右足を踏卸ろす敵手は更に右手にて(矢)武士の眉向へ打込ひ武士右腕にて(當)受けつゝ其右手にて敵手の右手首を握り左手は敵手の右腕下より入れて逆に敵手の左襟を握り右足を引拔らき敵手を引寄せ更に敵手を向ふへ(曳)押し放つ敵手(當)右足を脫きつゝ跡退り仰倒猫回へりし立つ

初心敵手たる時は前の逆倒しの如く叮嚀に疊にまて送り遣るへし

十五　爪返し　十六　左右の違ひ

敵手は進て兩手にて(矢)武士の兩手の四指を强く握りて高く折り掛る武士(當)右足を踏込み右肩を低くして諸指を柔らかにし楊柳の心持にて右肘尖を敵手の兩腋の中間より顔の方へ右肩共に押し上げ四指を脫き更に左肘尖にて敵手の胸部に突き當る樣に(曳)飛び逸へ當身せんとす敵手(當)足踏のみにて小歩に跡退りしつゝ仰倒猫回へりし立つ

初心敵手たる時は右後抱き返しの如くすべし

振氣流練體柔術第二段之形

一　右下手羽伏せ　二　左右の違ひ

互に進逸ひ敵手(矢)武士(當)右下手四つに組み稍々張り合ふ武士は右肩を落し低くなり敵手の左の二の腕を撫く如くし兩手を敵手の左肩上に交叉して右足を引拔らく敵手は左手の尺澤を上へ向る樣に右肩の車骨を廻はしつゝ稍々上体を前へ傾け右手を左腋下へ添へて蹴らるゝ防ぎをなす武士は(曳)右足の踵にて敵手の右手の甲を蹴り復た左足の踵にて敵手の頭を(曳)蹴る敵手(當)素早く左肩猫回へりす

初心敵手たる時は教官先づ右足にて輕く蹴り左足を上げて蹴る擬勢をなしたるまゝ左足の踵を疊に踏延ばし初心の左肩を疊に柔らかに押付け初心をして左肩猫回へりせし

ひ

三　右下手肘當り

互に前の如く右下手四ッに組み稍々張り合ふ武士は右手を脱きて矢筈にし敵手の左手首を下へ(曳)押し放し左肘尖を敵手の肋部へ當る樣に飛び進へて左足を敵手の右側外へ踏込ひと同時に左肘尖を當る(曳)擬勢をなす敵手(當)蹌退りつゝ仰倒猫回へりし立つ

初心敵手たる時は右後抱き返しの如くすべし

四　左右の違ひ

五　右下手首捲き

武士は進て(矢)敵手(當)右下手四ッに組み張り合ふ敵手は左手の尺澤にて武士の首を捲き込みつゝ左足を武士の兩足の間に踏移す武士は身を沈めながら左足を曲けて敵手の股へ蹴り込みつゝ右手にて敵手の後帶を引き左手は敵手の腹部を(曳)押し放ち違る敵手左肩猫回へりす武士亦右肩にて小形に右後ろ回へりし起りつゝ左足を敵手へ向け蹴り延ばす

六　左右の違ひ

七　胸倉取り右膕打ち

武士進む敵手右手にて(矢)武士の左襟を攫ひ武士(當)左手にて敵手の右手首を取り右手を伸して敵手の右手の尺澤を握る敵手左手にて(矢)武士の右膕膕みを拍つ武士は(當)拍打せられぬ樣に右足の踵を敵手の右足の踵前へ踏しつゝ右膝を曲につき敵手を背負ひ前面へ(曳)抛げる敵手(當)右肩猫回へりす

八　左右の違ひ

初心敵手たる時は教官先づ初心を背負ひたる體にし上體を曲に接する位ひに低くなる初心は右足を敵手の右膝の側にまで踏出し後ろに右肩猫回へりを習ふべし

九　右腕止己が首捲き

武士進む敵手右拳にて(矢)武士の異向へ打込む武士(當)右腕にて受止め直ちに其右手にて敵手の右手首を握り其敵手の右手の尺澤を己れが後ろ首へ捲きつける樣に己れの首と敵手の右腋下へ差込み左腕を横に敵手の前帶通り拾ひに添へて右足を曲げ敵手の股へ(曳)蹴り込む敵手(當)右肩猫回へりす武士亦小形に左肩後ろ回へりし右足を蹴り延ばす

十　左右の違ひ

初心敵手たる時は敬官に於て之を暴し激に頭頂を疊に打付けさる様に注意すへし

十一　右手寸口

互に進み敵手右拳にて（矢）打掛る武士（當）右腕にて受止め両手の挿掛にて敵手の右手首の脈所ろを押へ握りて右足を後方へ引き伸はし右の方へ半は猫回へりしつゝ右足を縮めて敵手の右腕に掛ひ（曳）蹴り伸はす敵手は武士の蹴り掛る迄は上體を傾けなから立ち居る武士の蹴り掛けたる時蹴られぬ様に速くへ孤乘ひ右肩猫回へりし去る尤も右手の拳を固めて振り廻はす心持にすれは武士の握りたる両手は離し得るものとす

初心武士たる時は右足を充分に後方へ引き其右膝を疊につき半ば猫回へりし又初心敵手たる時は後ろに右肩猫回へりし一動一靜を確實にすへし

十三　右押し潰され返し

武士進む敵手右手にて（矢）武士の胸倉を掴み左手にて武士の後帶を握り左足を武士の右側外へ踏込みつゝ押し潰す武士は（當）左手にて敵手の右手首を握り右手の尺澤にて敵手の右の二の腕へ線に掛け敵手に押し潰されなから（曳）線を利せて抛け遠る敵手は

急乘ひ右肩猫回へりす武士は小形に右後ろ肩回へりし左足を蹴り廻はす

初心武士たる時は敬官に於て注意し己が首捻きを同しく頭頂を打付けさる様に遠るへし又初心敵手たる時は後ろに右肩を疊につけ猫回へりせしひへし

十五　右辷り込み蹴り上げ

十六　左右の違ひ

武士進む敵手両手にて（矢）武士の両腕の上より抱きつく武士は（當）身を沈め両手を敵手の両腰へ添へ敵手の股倉へ両足共に辷り込み脱けて右手の掌を敵手の左脚に押しあて、頭足を反對に向け右足を縮めて敵手の臀部を（曳）蹴り上る敵手は充分に孤乘ひ右肩猫回へりす初心敵手たる時は両足を廣く踏跨ゝりて臀部を蹴られんとする頃ろ右肩猫回へりせしひ

振氣流練體柔術第三段之形

一　頭胴打ち

二　左右の違ひ

武士進む敵手右拳にて（矢）武士の頭を打つ武士右腕にて（當）受止め其手首を握る敵手左拳にて（矢）武士の右胴を打つ武士左手を矢筈にし（當）握り止め敵手の右手の尺澤を

已れが後首ろに引掛け右足を敵手の股間へ蹴り込み後ろ猫回へりせんとす敵手撲離し右肩猫回へりす武士亦小形に後ろ左肩猫回へりし起り右足を蹴り砕バす

初心武士たる時は敵官に於て徐ろに逕りて頭頂を打付けざる樣にし又初心敵手たる時は右肩を壁につけて猫回へりせしむべし

三 壁副へ　四 左右の違ひ

敵手右拳にて（矢）打込む武士（當）右腕にて受止め直に其右腕を敵手の右の腕へ捲き込み敵手の後ろへ廻はり左手にて敵手の左肩より敵手の右の前襟を掴み左足を引被らきながら（曳）引倒す敵手（當）仰倒猫回へりし立つ

動き敵手たる時は敵官手を添へて仰倒せしむ

五 意表　六 左右の違ひ

互に進逕ひ右足を踏出したる時武士（矢）右手にて敵手の左襟を握る敵手（當）両手を貫士の右腕上に交叉し右足を引くと同時に武士の右手首を捉へ（曳）押し離す武士は直に左肩にて敵手の左脇へ（曳）當り両手にて其足を掬ひ上げ倒さんとす敵手は（當）左足を

脱きながら跡退りしつゝ仰倒猫回へりし立つ

七 鎌掛　八 左右の違ひ

武士進む敵手右拳にて（矢）打込む武士（當）左腕にて受止め直に其右手首を握り右足を敵手の右側へ踏込むと同時に右手の尺澤を鎌掛けに敵手の右の二の腕へ引掛け其鎌掛を利せながら後ろへ反り倒れつゝ（曳）彈ね敵つ敵手（當）飛び右肩猫回へりす武士亦小形に右肩後ろ猫回へりし起りて左足を蹴り砕くす

九 釣鐘　十 左右の違ひ

敵手進み右手にて（矢）武士の陰部を掴さんとす武士（當）右足を引被らき左手にて内へ敵手の右手を拂ひ直に其手首を握り右手にて敵手の右手の尺澤を握り（曳）寸口の如くす

十一 膝關　十二 左右の違ひ

敵手進み右拳にて（矢）打込む武士（當）右腕にて受止め直に其右手首を握り左足を敵手の右足の外側へ踏み込みつゝ敵手を敵手の右腋下より入れて逆に敵手の左襟を掴み一

旦敵手を引寄せて體勢を崩し左足の踝にて敵手の右膝腿を掬ひ（曳）突き飛ばし進る敵手（當）右足を脱き庭跡のみにて小歩に跡退りしつゝ仰倒猫回へりし立つ

十三　引落

武士進む敵手右拳にて（矢）打込む武士（當）右腕にて受止め外より内へ捲きつけて其手首を握り左手を敵手の右の二の腕へ添へると同時に左足にて敵手の右腰を踏張り敵手の體勢を崩し左足を外すと同時に右足を引拔らきつゝ敵手を（曳）引つけ放つ敵手（當）逆飛び右肩猫回へりす

十四　左右の違ひ

十五　脚當

互に進み武士は敵手の右側より後方へ廻はり四ッ這りしつゝ右肩にて敵手の左脚へ（曳）當る敵手（當）兩膝を疊につく武士は更に敵手の左側へ乘込み左手にて敵手の左手首を握り右手にて敵手の左の二の腕を握り（曳）羽代せに押つけんとす敵手（當）左肩猫回へりし去る

十六　左右の違ひ

振氣流練體柔術第四段之形

此第四段は初段より第三段迄の形に捨身と掬ひ倒しを前後に加へて所謂五十二ヵ手の早業（ハヤワザ）となる早業は起り頭ら起頭らに早業きにし一氣連續擧止敏捷にすべし

一　片手取り捨身

二　左右の違ひ

武士進む敵手右足を踏出し右手にて（矢）武士の兩襟を掴んとし押し出る武士は（當）其押し出て來るを利用し兩手にて其右手を握り右足を敵手の股へ辷り込め左足を縮めて敵手の脛骨にあて（曳）彈ね進る敵手（當）爲し得る丈け逆飛び右肩猫回へりす○三四片手矢管○五六兩手彈ね羽伏せ○七八拳突き○九十後抱き○十一十二後抱き返し○十三十四拳突き逆倒し○十五十六兩手取り拳突き上げ○十七十八爪返し○十九二十下手羽伏せ○二十一二十二下手肘當り○二十三二十四下手首捲き○二十五二十六胸倉取り腦打ち○二十七二十八腕止め己が首捲き○二十九三十寸口○三十一三十二押し潰され返し○三十三三十四辷り込み膝上げ○三十五三十六頭腦打ち○三十七三十八壁副へ○三十九四十宣衣○四十一四十二鎌掛○四十三四十四釣鐘○四十五四十六膝腿○四十七四十八引落○四十九五十脚當○五十一五十二掬ひ倒し此掬ひ倒しは武士敵手の後方より

兩手にて敵手の咽喉を捲き締めて敵手の浮きたる兩腰を掬ひ上げ（曳）片側へ倒す敵手

（當）仰向す最後の五十二〻手目には武士左腰を枕らさせ右手にて敵手の右腕を搦み握り

左手にて敵手の左襟を握り咽喉をかたむ敵手は必らす右足を高擧し居りて疊を拍ちて

降參りの記號をなすへし

注意　咽喉を締めらるゝ者は決して物を云ふ可らす是れ片足を高擧し居りて疊を拍

て降參りの記號をなす所以なり

振氣流練體柔術第五段之形

此第五段は雖尺壹尺六寸にして柄四寸刀身壹尺貳寸の小太刀を持し長柄竹刀を取拉

く目的の使用法なり劍術の道具を着用すれは入り身して擊ッなり突くなり自在にす

敵精眼に搏へは其刀尖に手壓りして電入す是に於て敵は兵字若くは斜に搏へさるを

得さるへし武士は挑みて打出さしめ又は虛を見て電入する等互格試合なれは七三の

克ちを得るものとす然も亦氣の作用甚タ大事なり昔し杉本某兵法の奥義を極めんと

欲し國國修行の途次或る谷川に行き掛り、渡り兼て居りしに盲人來り杖にてチョッ

と其橋を撈索よと見る間にスラリと渡りしに感發し以爲らく人の物に恐るゝも氣な

り驚に恐れさるも氣なり恐れさるの氣を以て恐るゝの氣を制せは世に恐るゝものな

けんと乃ち神夢に托して圓橋之形を作りしと云ふ今日より之を見れは神を引て信を

求んより寧ろ理を推して信を求むへきなり何となれは閉は目を瞑して奔るも棟は手

足、震ふて渡る能はす是れ皆な恐れさるの氣を以て恐るゝの氣を制するとの理

由に外ならされはなり

問ふ夢に柔術を見るは如何なる理由乎答ふ管子亦之を思ひ之を思ひ又之を思ひ通せ

されは鬼神之を通すと云へり或は爲めに自得の念を强ふするに足らん未た之を以て

神夢とは謂ふ可らさるなり又問ふ夜間安眠する能はさる時あり理由如何答ふ運動不

足なる徵候なりとす運動不足なるに加へて茶の如きを以てせは必らす精神恍惚とし

て多夢譫語し或は無益架空の事を案し煩ひ曉きに至り漸く熟眠せんとす此時務めて

柔術の初段より段々と追想し考へ往く間には必らす安眠すへしサテ是れ等は題外に

渉るも安眠は安眠の方法あると一般に物に恐れさるの氣を以て恐るゝの氣を制する

も亦手段なくんはあらず其手段の一として壹尺六寸の小太刀使用法に熟達すへし若自得する所あらん王陽明亦曰山中の賊を破るは易し心中の賊を破るは難しと物に恐るゝの氣あるは心中の賊なり心中の賊を打破て而して幾萬人の中と雖往て敵するの勇なくんはあらす

此第五段以上は掛け聲を略すと雖總へて（矢）（當）（曳）初段の如くすへし

一　胸倉隼表

（總へて太刀の技は左右あることなしと知れ）

武士は小太刀を右片手精眼に搆へ敵手は太刀を兵字に搆ゆ武士スラリと進む敵手は太刀を武士の眉向へ打込む武士は十字形に受止め直に左手にて敵手の左の頸の襟を掴み敵手の右側へ敵手を引寄せて突く氣勢をなす

二　胸倉隼裏

武士敵手共に前の如くし武士は左手を逆にして其胸倉を掴み押し立てゝ左膝を壘につき小太刀と右足とを敵手の股間へ入れ敵手を兩肩の上へ搆ゆ負ひ左側へ抛り落して仰向せしゆ左手にて左膝の側へ引寄せて突く氣勢をなす

三　右腕隼表

互に前の如くし武士の打込む太刀を受止め直に左足を深く踏込み左手の尺澤にて敵手の右の二の腕を下ゆより搆き上げ小太刀を右腰へ扣へ引寄せて突く氣勢をなす

四、右腕隼裏

互に前の如くし武士より突んとする時敵手は左手にて武士の右手首を握り止む武士は腰を割り稍々引退きて刀尖を敵手の腹部へ向け左手の尺澤を利せながら右足を敵手の股間へ辷り入れる敵手は刀尖に觸れさる樣に回轉し仰向す武士は敵手の回轉するに連れて回へり起き敵手の頸上に跨かりて突く氣勢をなす但平生は刀尖を腹部へ向く可らす

五　左腕隼表

互に前の如くし武士は敵手の太刀を受止め直に敵手の左側へ飛込み左手の尺澤にて敵手の左の二の腕を上へより入れて搆き締め稍々敵手を引寄せて突く氣勢をなす

六、左腕隼裏

互に前の如くし武士は一旦左手の尺澤にて敵手の左の二の腕を捲き其腕を小太刀の鍔際にて押へつゝ左手にて敵手の左手首を握り鍔際にて押し付けると同時に右膝を敵手の左足へ引掛け倒して突く氣勢をなす

七　臍帶隼表

武士に進んで敵手の精眼より突き掛けたる刀尖を吾が右方へ小太刀にて打拂ふや否や電入して臍帶を下より取り敵手を引寄せて突く氣勢をなす

八　臍帶隼裏

互に前の如くし武士より突んとする時敵手は左足を踏込み左手にて武士の突んとする其右手首を握る武士は腰を割り右拳を下へ向け右小指の右手首に接する機に曲げて己れの右足の方へ突き廻さすと同時に右足を引拔らき更に右足の蹠裏にて敵手の左外踝を掬ひ倒し稍々馬乘りに敵手の腹部に跨がりて突く氣勢をなす

九　奪刀隼表

互に前の表の如くし武士は己れの左方へ敵手の刀尖を打拂ひ右足を敵手の左足の外側へ踏込み左手を逆にし敵手の太刀の中柄を握り吾が小太刀の鍔際にて敵手の左手首を摺り捻ぢ離すと同時に敵手の太刀を己れの左大腿の外側を經て後方へ放棄ると又同時に右足を軸にし左足を引き稍々敵手の左側の後に移る、

十　奪刀隼裏

互に前の如くし武士は敵手の左側後へ移る敵手は其背面より左手を武士の左肩へ右手を武士の右の内股へ掛け武士を抱き上んとす武士は小太刀を逆に左手へ移し及を外へ向け握りて右手の尺澤にて敵手の首を捲き込み敵手は武士を抱き上げて徐ろに卸ろす武士は左肘を〆字にし疊に卸ろされんとする時稍々四ッ這りし寫篋の下へ敵手を捲き潜はし込み右腋の下へ敵手を組み敷き左手の逆に持ちたる小太刀にて突く氣勢をなす

十一　鞍下掬ひ投げ

武士は敵手の兵字搆へより打込ひ太刀を十字形に受け直に左手にて敵手の帶廻はりを捲き締め左膝を屈め左腹骨を敵手の股へ入れ左腹骨にて掬ひ上げ己れの右足の前へ拉る。

十二　受け返し引き胴足搦み

武士は敵手の精眼より頭上へ摺り込み打つ太刀を逆十字形に稍々小太刀の切先きは敵手の左耳へ注き小太刀の柄は己れの左肩の方へ小太刀を斜めにし敵手の摺り込み打來る太刀を彈ね上る心持にて受止め直に其右拳を轉回し小太刀を敵手の右腋より左腋へ掛け太鼓を引き切ると同時に右足を敵手の左足の外側へ踏移し脱けて其引き切り殘きたる小刀は右腰へ取り左足は右足へ引寄せ復た直に其左足を敵手の左足の後へ深く踏込み左手を失笘にし敵手の腮を張りつゝ左大腿を利せて倒す敵手仰倒し後ろ猫回へりし立つ

十三　夢見要領

武士は小太刀を稍々右腰の前へ精眼に取り體を左向きにせす唯た平生に歩む心持にて小太刀尖を長圓形に上下にうねり往きつゝ吾が小太刀を吾が左の方より敵手の精眼に携へ居る太刀の裏らへ極柔らかに合せつゝ其太刀を何の心なき體にて敵手の左肩の方へ押し上げつゝ右足も摺り込み敵手の左拳を敵手の右肘の外へ出る樣にし其左拳の右

腕の外に出たる時武士は力を刀尖に入れ左手を柄頭へ添へ敵手の太刀を輪形に右へ下へ捲き込みつゝ左足を左外へ踏移しつゝ吾が小太刀の拳にて敵手の太刀の中心を彈ねて吾が右方の天井と壁の隅へ飛はし違り武士は更に左手にて逆に敵手の右襟を掴み以下第四段の初本右片手取り捨身の如くす（剣術の際互に稍眼に取らは必らすしも不適し應用すべし刀尖をうれり何心なく兩足を摺り込み捲き込むべし若し外ずるれは振り返して左横面等を打つべし）

振氣流練體柔術第六段之形

此第六段乃至第八段の形の表は他流の技にして其裏は當振氣流の技なり

一　荒木片手胸取り表

敵手左手にて武士の右襟を掴み稍々押し掛る武士左手にて敵手の左拳を覆ひ握る即ち拇指を敵手の左拳の甲にあてる樣にす敵手より強く押し來る時武士は右足を引き兩拇指を利せて家根板割りにし左足を引きつゝ左膝を壘につき押へる敵手片四ッ道りす

二　左右の違ひ

三　當振氣流其裏

互に前の反對に取組み敵手が左膝を壘につきたる時武士は右へ半を猫回へりし蹴り起

四　左右の違ひ

て羽伏せにかたむ敵手片四ッ逼りす

五　起倒流腕止め表　　六　左右の違ひ

敵手右拳にて打掛る武士右足を引き左腕にて受止め直に敵手の打込たる右手首を取り左腰へ引付けて右手の手刀を敵手の右肩へあて丶右足を敵手の右足外へ踏込み敵手の右足を後へ拂ふと同時に右の手刀を押し左手を利せて敵手を倒す敵手仰向

七　當振氣流其裏　　八　左右の違ひ

互に前の反對ゑ取組み敵手が右手の手刀にて押し來る途端に武士は體の重みを左足へ托しチョンチョンと釣り合ひを取りつ丶身を替はし左手にて敵手の右腕を押し逼りて右手は引き離す敵手四ッ逼りす

九　關口流襟投げ表　　十　左右の違ひ

武士右手にて敵手の左襟を取り右足を踏出し押し掛り右膝を疊につく敵手は左手にて武士の右手首を握り右拳にて武士を打んとす武士は際疾く己れの右腕の下を潜り敵手を脊負ひ前方へ拋け遣る敵手右肩猫回へりす

十一　當振氣流其裏　　十二　左右の違ひ

互に前の反對ゑ取組み敵手より武士を脊負ひ拋けんとする時武士は左手を敵手の右手首に掛け右手は敵手の右肘へ引掛け左足を引き拔らきつ丶引倒す敵手仰向

十三　清川流摺込み表　　左右の違ひ

敵手右拳にて打込ひ武士は左足を敵手の右側へ踏込み體は右へ拔らき腰を割り低くなりて左手を矢筈にし敵手の腮を摺り上げ右手にて敵手の右大腿を外側より掬ひ倒し遣る敵手仰倒す

十五　當振氣流其裏　　十六　左右の違ひ

互に前の反對に取組み敵手より武士の腮を摺り右大腿を掬ひたる時武士は右足を浮へ左足にてチョンチョンと釣合を取りながら兩手にて敵手の左手首を握り吾が腮へ其手首を引付けつ丶身を替はし尙ほチョンチョンと釣合を取りつ丶右肘尖にて敵手の左肘を逆に折り掛ける敵手稍々中腰に屈みて降參りの記號をなす

振氣流練體柔術第七段之形

一　神明殺活流敵之先表

敵手右拳にて打掛る武士左腕にて受止め直に其左手にて敵手の右の二の腕を握り右肩を敵手の右腋の下へ付け同時に右足を敵手の右足の外側へ踏込み右手は敵手の右肩を掴み敵手を背負ひ前方へ投ける敵手仰向

二　左右の違ひ

三　當振氣流其裏

互に前の反對に取組み敵手より武士を背負はんとする時武士は早く身を沈めて腰を側り左足を引き披らきつゝ左手にて敵手の腰椎部を押して折り掛けて體勢を崩し又其左手を敵手の左肩へ引掛け敵手を後方へ引倒す敵手仰向

四　左右の違ひ

五　良移心頭流帶引表

敵手右拳にて打掛る武士右手にて敵手の前帶を上へより掴み左足を踏込ひと同時に左手にて敵手の腮を張り右手にて帶を釣り上る敵手は眼橋の如くなりなから陸參り

六　左右の違ひ

七　當振氣流其裏

互に前の反對に取組み敵手より武士の腮を張り帶を引く時武士は兩手にて敵手の右手

八　左右の違ひ

首を握り兩足にて疊を踏ひ葉津美に兩手を利せて敵手の右手首を押し離して右足を引き右へ半猫回へりし寸口の如くす

九　殺當流連行表

敵手は武士の右側に連行しつゝ右拳にて横に鼻に打掛る武士は左足を敵手の後方へ踏込ひと同時に左手にて敵手の後襟を取り右膝を疊につき右手にて敵手の右足を外より拂ひ敵手を後方へ引倒す敵手は一二歩跡退りつゝ仰倒す

十　左右の違ひ

十一　當振氣流其裏

互に前の反對に取組み敵手より右膝を疊につき武士を後へ引倒さんとする時武士はナンテヨンと左片足にて中心を取りつゝ右腕の肘尖にて敵手の左手首を拂ひ離す敵手は拂はれたるまゝ身を替はし四ッ這りす

十二　左右の違ひ

十三　件吾流突込み表

敵手右拳にて武士の心窩へ突き來る武士は右足を引き左手にて敵手の右拳を己れの右へ拂ひ直に其左手にて敵手の右拇の方を逆に握り右手にて小指の方を逆に握り右足を

十四　左右の違ひ

踏込むと同時に敵手の右拳を高く差上げ又直に足を引きながら右膝を壓につき敵手の右手を家根板割に引付くる敵手片手四つ遣りす

十五　當振氣流其裏　　十六　左右の違ひ

互に前の反對に取組み敵手より武士の右拳を差上げ右足を踏込みたる時武士は左足を進め又右足を踏込み左手にて敵手の後帶を取り右肘尖を其胸にあてゝ突き遣る敵手仰倒猫回へりす

振氣流練體柔術第八段之形

一　澁川流腰投け表　　二　左右の違ひ

敵手は武士の右側より武士の兩腕の上より抱き付く武士は腰を割て沈み右手を敵手の後帶へ沿ひ廻はして引締め左手にて敵手の右肩を掴み右足を敵手の右足の內側へ踏移し腰を右へ〳〵字形に横突せしめ腕骨にて掬上げ拋け落す敵手仰向

三　當振氣流其裏　　四　左右の違ひ

互に前の反對に取組み敵手より武士を腰投けにせんとする時武士は身を沈めつゝ敵手

の前方へ飛出て互に飛出て互に飛出てしつゝ敵手の體勢崩れたる時右足を深く踏込み右手は胸を押し左手は後帶を引寄せる心持にて右手を押し倒す敵手仰倒猫回へりし立つ

五　楊心流壁副表　　六　左右の違ひ

敵手右拳にて打掛る武士右足を踏出し右腕にて受止め直に左足を踏込ひと同時に右手を敵手の右腕の上より捲き込み其手先きにて敵手の脊中の衣を掴み左手を敵手の左肩より入れて右襟を握り左足を引拔らきなから左膝を壓につき敵手を引倒して其儘喉咽を固む

七　當振氣流其裏　　八　左右の違ひ

互に前の反對に取組み敵手より武士を引倒し咽喉を固めんとする時武士は左手の拇指を敵手の左耳根にあてゝ押し左足を屈めて敵手の右の二の腕へあてゝ押し彈ね起る敵手後ろ右肩猫回へりし起る

九　天神眞楊流連柏子表　　十　左右の違ひ

敵手右拳にて打掛る武士は敵手の右拳に注目せず直に左足を敵手の右足の後方へ踏込み左手の尺澤を敵手の前帶へ沿ひ其手先きを左腰へ捲付け右手を敵手の右大腿に外側より掬ひ抱き上げて後方へ振り廻はしつゝ抛け落す敵手仰向

十一　富振氣流其裏

互に前の反對に取組み敵手より武士を抱上げんとする時武士は腰を割り身を沈めて踏み耐へ右手を敵手の右頸側より入れて腿へ引掛け一旦敵手を押へ付けて體勢を崩しつつ吾が右足を引脱きながら後方へ引拔らきつゝ右膝を壘につくと同時に右手にて敵手の腿を引寄せ吾が右膝の上へ倒し込み左拳にて打つ擬勢をなす敵手仰向（降參）

十二　左右の違ひ

十三　起倒流引落表

武士進みて右手にて敵手の左襟を取り左手にて其右袖を取り敵手亦同じく襟袖を取る武士は三四歩後方へ敵手を引出し來りつゝ敵手が左足を踏移さんと浮き上げたる途端に武士は俄かに充分に左足を引き其膝を壘につきなら敵手を引倒す敵手左手にて反動を取る樣に仰向す

十四　左右の違ひ

十五　富振氣流其裏

互に前の反對に取組み敵手より左膝を壘につきたる時武士は兩手にて敵手の右の二の腕を握り釣り鐘の技の如く右方へ半ゞ猫回へりし跳り起り羽伏せに固ひ（釣鐘の如く左足を引くに及ばず踏出したる樣にて可也）

振氣流練體柔術第九段之形

此第九段は第六第七第八段の技を早業にする事第四段に於けるが如し故に四ッ道り又は仰向等總べて猫回へりし起るべし但し最後の羽伏せはかたひ

○一二胸倉取り表○三四其裏○五六腕止め表○七八其裏○九十襟投表○十一十二其裏○十三十四帶込○十五十六其裏○十七十八敵之先○十九二十其裏○二十一二十二帶引○二十三二十四其裏○二十五二十六連行○二十七二十八其裏○二十九三十突込○三十一三十二其裏○三十三三十四腰投○三十五三十六其裏○三十七三十八壁副○三十九四十其裏○四十一四十二連拍子○四十三四十四其裏○四十五四十六引落○四十七四十八其裏

振氣流練體柔術第十段之形

此第十段は　日本武尊の時代に行はれたるつるぎに擬したる拵への偽刀を用ゆ

一　拇搦み振り返へし

敵手兩手にて武士の拇を握る武士は左拇指を鍔に掛け(以下皆準之)右手を敵手の兩手の下より入れて拇頭を握り右方へ引廻はし上げ右足を踏込み拇にて敵手の兩手を已れの左下へ振り離し更に武士は兩手にて敵手の左腕を握り右足を引拔らく敵手は右手の掌を左腋へ添ゆ武士は右足の蹠にて敵手の左腋に在る其右手の甲を蹴り又直に右肩にて敵手を搗ぎ上る必持に右手を差して敵手の浮きたる時右踵を敵手の左足の脛前へ引掛け倒して羽伏せにし右足を羽伏の中に踏込み敵手の左の二の腕を踏み押へ其左手首を吾が右脛前へ入れ右膝を屈める如くし羽伏にかたむ敵手は右手の手刀にて武士の右側面を打んとす武士は右手を伸ばしたるまゝ其腕にて之を受止め敵手の右手首を捻りて吾が右脛前へ入れ右手の拇頭にて胛下を押へる敵手降參り

二　拇搦み掬ひ戻し

敵手兩手にて武士の拇を握る武士は右手を拇の下より敵手の拳共に握り固め己れの左方へ引廻はし敵手の兩手首を交叉する樣にし左足を踏込み拇にて敵手の兩手を振ち離し更に兩手にて敵手の右腕を握り左足の蹠にて蹴る以下前と左右の違ひ

六　拇搦み板割り

敵手は武士の左側へ行違ひに進み左手にて拇を握り右手にて鞘を握る武士は兩手にて拇共に敵手の左手を握り左足を引きつゝ左膝を疊につき敵手の左手を板割りの如くに引付け固む敵手片四ッ通りす

四

敵手は武士の左側へ連行し左手にて拇を握り右手を鞘に掛る武士は右手にて敵手の左手首を握り左手は敵手の左手の尺澤を握り兩足を入替へつゝ外方より敵手の左腕の下を潜り脱け捻ぢ掛けつゝ右足を踏込み倒して羽伏せにし左膝を疊につく敵手仰向

五　鬢摺り倒し門ぬきかため

敵手は武士の右側へ連行し右手にて武士の拇を握り左手にて武士の鞘を握る武士は鞘

稍腰を割り右足を敵手の右側へ踏込むと同時に左手は敵手の右腕を捲き締め右手は四指の指頭に力を入れ敵手の左鬢を摺り倒す敵手仰向武士は右手にて逆に敵手の右手首を握り左足を敵手の肩の側へ置き左手にて鞘を吾が下腹へ横たへ右足を敵手の腹上へ乗せ両手にて敵手の右腕を吾が両股へ引込み左足も寄せて之を挾み腹を張り上げて眼橋の如くす此の技は剣術試合に應用し易きものなり尤も剣術試合の際敵を倒すには鬢摺り足搦み等皆同一の理由にして極高く摺り倒すか極低く土際を拂ひ倒すかに利ありとす

三　羽伏せ蹴り

敵手は武士の後方より進み俄かに武士の右側へ飛出つゝ大抱きに抱付く武士は右肘を張り右肩を低く落し敵手の右腕を吾が右肩の上に擔ぐ如くし第二段の初本の如く右足にて蹴り繼て左足にて蹴り右膝を屋につきながらかたむ敵手片四ッ這り

七　後抱き顎彈ね

敵手は武士の後方より吾か頭首を武士の右腋下へ入れつゝ抱付く武士は腰を割り身を

沈め左手の拇指は鍔に掛け右手を脱きて敵手の右肩の方より其顎へ其右手先きを引掛け右足を後方へ引披らくと同時に顎を引倒す敵手は必らず齒を噛み締め居るべし武士敵手稍々遠距離に分かる敵手の起き上らんとする迄は武士は柄に右手を掛けて扣へ居り敵手の起き上らんとする時武士は飛込み己れの右手の尺澤にて敵手の咽喉を捲き締めつゝ右膝を屋につき其左手は敵手の左手首を握り吾か左腰部にて折り掛る敵手片足を拍て降参り

八　前抱き先王の遺法拔き打ち

敵手は武士の正面より武士の右腋下へ頭首を入れ武士の腰へ大抱きに抱付く武士は左拇指を鍔に掛け腰を割り右足を引披らき右手の掌を敵手の額にあてゝ摺り上げつゝ左足の甲を敵手の右足へ鎌掛けに引掛け額を押し倒す敵手仰倒猫回へりし起る武士右拳にて打込む敵手左腕にて受止め直に脊負ひ投げんとす武士は右手を利せ右足を引披き引倒す敵手仰倒猫回へりし立て逃げんとす武士は右手にて敵手の後襟を取り身を替はして脊と脊を合せ右手を利せて吾が前面へ投出す敵手蜻蛉回へりし又直に武士の右

腰を見掛け飛び來る(注意武士の拔打に觸れざる樣側方へ飛込ひべし)武士は先王の遺法拔きに逆に拔付ける敵手仰倒猫回へりし立ち(先王の遺法拔きとは　日本武尊の遺法にして武人の崇稱する「つるぎ」拔き是れなり其法は左手にて鯉口を握り右手にて鍔際を握り拔きつゝ左手にて鞘を拂ひ左足を踏込ひと同時に左手にて柄頭を握り敵の胸通りを逆に切り上げ右拳を轉回し兵字構へに取り右足を踏込み太刀を茶巾シボリに刀尖高く手元低く切込み氣當りす敵手は傍らに置し在る太刀を取て精眼に構ゆ武士亦精眼に構へ其刀尖を敵刀の左右へ長圓形にうねりつゝ吾が體共に敵刀の左外へ避けて摺り込み又敵刀の右外へ移つて賺し込み稍々兩三次之を行ひ敵をして吾が位地の在る所を定めさせずして敵刀の右外へ賺し込み吾が體に根さして右肘を引きなから吾か刀の峯にて敵手の刀の峯を打拔らきつゝ兩足を摺込み稍々拳を轉回し刀及にて敵手の右腕の中頃ろを輕く打つ敵手少しく跡退りす武士復た刀峯にて打拔らき摺り込み右腕を打つ敵手跡退りす斯の如くすること概三四回に及ふ時敵手太刀を左八相に取る武士は敵手の左八相に取るに連れて摺込み相接してツット左足を敵手の右足の外側より右顳に側れぬ樣に廻はし置き太刀は敵手の左八相に搆へたる中柄を押へ付け太刀先きに力を入れ摺り倒す心持にて押す敵手跡退りせんとして右足の浮き上りたる時武士は始めて吾が左足の甲にて鎌掛けに引くと吾が太刀先きにて摺り倒すと同時にす敵手仰倒猫回へりし立て復た精眼にて立向ふ是より以下互に第五段の十貳本目の樣の如くす即ち敵手より摺込み打に依り武士は右片手にて受けて顳顬を引切り脫けて遠く避け左手を添へ精眼に搆へんとす敵手復た右足を前にしたるまゝ摺込み打來る武士は初の反對に刀尖を吾が左方へ斜めに受けて敵手の右腋より左腋へ掛けて心窩を引切り脫ける敵手復た精眼に搆ゆ武士は太刀を右片手精眼に搆へ平生に歩み往く如く一歩も駐めず刀尖を長圓形にうねりつゝ第五段の十三本目を應用す敵手は捨身に彈ね遣りて稍々小形に後ろ左肩猫回へりし起て驅け寄りつゝ片足を上げ右肘を後へ引き稍々高く上げて突く擬勢をなす敵手降參り

振氣流練體柔術第十一段之形

此節十段の試驗は第五段同樣劍術道具着用にて之を行ふ